ゴルド族：松花江下流の“魚皮韃子”

オーウェン・ラティモア　著
増井　寛也　訳注

訳者序言

ここに訳出したのは Owen Lattimore, The Gold Tribe,“Fishskin Tatars”of the Lower Sungari, *Memoirs of the American Anthropological Association*,vol.40,1933, pp.5-77（後に同じ著者の *Studies in Frontier History, Collected Papers, 1928-1958*,London,1962 に再録）の全文である。先行の翻訳としては、長谷川四郎「ゴリド族の社会構成」(『書香』15-6、1943、pp.64-71) があるが、表題のとおり第 6 章「社会構成」のみを対象とした部分訳である。当該部分の訳出にあたっては、本訳稿でも参考にさせていただいた。

さて、ラティモア（1900-1989）自身もこの報告のなかで述べているように、彼が松花江下流域に住むツングース系のゴルド族 Gold[※1] に対して人類学的なフィールドワークを行ったのは 1930 年のことであり、ときあたかも満洲事変の前年にあたる。ラティモアといえば、中国史分野における辺境「貯水池 reservoir」論で著名であり、そのマンチュリア史への興味深い適用例をこの報告のなかでも見ることができる。彼のマンチュリアとの関わりは主として、長城内から当該地域に入ってきた漢人入植者を研究するために、1928 年から 1929 年の一年間、ハーヴァード大学人類学部の大学院で人類学・地理学の訓練を積んだのが機縁であった。このように、ラティモアは「中国の辺境」としてのマンチュリアを研究する一環としてゴルド族を調査し、その民族誌を記述したのであって、人類学の手法を自ら実地に試す機会となったわけである[※2]。

ラティモアと奇しくも同時期に、ゴルド（赫哲）族調査に訪れた二人の中国人民族学者が南京の中央研究院から派遣された商章孫と凌純声であ

り、ラティモアも滞在中に彼らに出会い、シャマニズム儀礼の調査に同席する機会をもったと述べている。凌純声の研究成果が大作『松花江下游的赫哲族』上下二冊（国立中央研究院歴史語言研究所単刊甲種之十四、民国二三/1934年、南京）であり、戦前来日本の学界でもしばしば参照されてきた。また、その価値が今日なお失われていないことは、影印本が台湾では『亜洲民族考古叢刊』第二輯に収録される一方、中国では『民俗・民間文学影印資料之六十三』として刊行されている事実からも明らかであろう※3。

いま、ラティモアと凌純声の研究成果を比較すると、取扱う文化領域の広範さ、記述内容の詳細さ、図版の豊富さのいずれをとっても、凌氏の著作はラティモアのそれをはるかに凌駕する。にもかかわらず、あえてラティモアの報告を訳出するのは、凌氏にはない視点を備えているからに他ならない。換言すれば、清朝滅亡から二〇年を経るなか、マンチュリアに押し寄せる漢人入植者の奔流に、抗うすべもなく埋没しつつあるゴルド族の現状を、彼らの内面を含めて観察し、描写しようとする姿勢にこそラティモアならではの特色がある。そのような意味では、ゴルド族を取り巻く状況の変化に注意を向けない凌氏の著作とは相補的な関係にあり、またそうしたものとして両者は併せ読まれるべきであろう。

最後に、本稿が旧稿の改訳補訂版であることについて一言しておきたい。旧稿は本訳稿と同じ題名のもとに、立命館大学東洋史研究会の有志を煩わして謄写版印刷に付し、「東研文庫Ⅰ」（1980年5月1日発行、部数不明）として同研究会会員に配布したものであるが、訳者の未熟な英語力や謄写版にありがちな字句の誤脱などに起因する不備がそこかしこに見受けられ、まさに汗顔ものであった。いつかは改訂しなければと思いながら、ついつい先延ばしとなって現在に至ったが、図らずも今春以来のコロナ禍によって巣籠もり生活を余儀なくされた結果、旧訳を改訂する時間的余裕を得たのも何かの巡りあわせであろう。ともあれ、この改訂版がマンチュリア研究を志す同学の一助ともなれば、訳者にとって望外の喜びである。（2020.9.24）

※ 1 ゴルディ Goldi、ゴリド Gol'd ともいい、現在、ロシア領極東に住むものはナナイ Nanai、中国黒龍江省に住むものは赫哲（ヘジェ Heje）と称される。この訳稿では原文の表記を尊重してゴルドで統一してある。

※ 2 ラティモアの経歴については、オーエン・ラチモア（磯野富士子訳）「私の中国研究の歩み―「辺境史研究」への序―1・2」(『みすず』8-9・11、1966)、および毛里和子「オウエン・ラティモア考（一）」(『お茶の水史学』22, 1979) を参照した。ちなみに前者は Owen Lattimore, *Studies in Frontier History, Collected Papers,1928-1958*, London,1962 の序文の全訳である。

※ 3 参考までに付言すれば、ゴルド族関連のロシア語文献紹介としてはイ・ア・ロパーチン（布村政雄訳）「ゴルド族に関する調査および研究の小史」(『書香』15-3、1941［И.А. Лопатин, Гольды Амурские, Уссурйские и Сунгарийские.,Владивосток, 1922/ ロパーチン『アムール、ウスリー、スンガリ流域のゴルディ族』］の序論第一章の翻訳）があり、凌氏以後の 1950 年代から 1990 年代初めにかけての中国語文献に関しては中村和之「黒龍江省の赫哲（ヘジェ）族関連文献」(『アイヌ民族博物館研究報告』4、1994）pp.49-61 に詳しく紹介されている。また、新中国成立以後の民族誌としては 1957 年以降の調査に依拠する劉忠波『赫哲人』1981 があり、旧ソ連時代の簡にして要を得た民族誌としては Ivanov,S.V., Levin,M.G. and Smolyak,A.V., “the Nanays”, Levin,M.G. and Potapv,L.P.（ed.）, *The Peoples of Siberia*, Chicago and London, 1964, pp.691-714 がある。

凡　　例

本訳稿では訳出と付注にあたって、以下の要領に準じた。

1. 原文に頻出する Manchu Dynasty とか Manchu Empire は、あえて清朝・清帝国とはせず、「満洲王朝」・「満洲帝国」のままとしておいた。また、Chinese は正確には漢人（漢族）・漢語を指すが、すべて「中国人」「中国語」と訳した。
2. 原文中の中国語（ウェード式表音）は判明する限りで漢字表記に改めて

おいたが、その文責は当然ながら訳者に存する。

3. 文中に加えた記号［ ］は、訳注部分のそれを除き、訳者による文意の補足である。また記号〔 / 〕は原文での改頁を意味する。
4. 原文の脚注四個は原注として、それぞれの位置する章の末尾に配した。
5. 付注は最小限にとどめ、巻末に一括した。なお、凌氏前掲書に基づく引用と付注は「調査赫哲族路線図」の転載を除き、煩瑣を避けて一切行わなかった。
6. 原文中の挿図および上記の「路線図」は、すべて巻末に配置した。

目　次

Ⅰ. 序言
（1）分布と人口　（2）環境と気候
Ⅱ. 歴史と伝説
Ⅲ. 隣接諸民族との関係
（1）ゴルド族と満洲族との関係　（2）他の部族との関係
（3）中国人との関係
Ⅳ. 身体的特徴
Ⅴ. 物質文化
（1）家屋　（2）生活の規範
（3）農耕　（4）家畜
（5）漁労と河川の航行　（6）狩猟
（7）衣服と器具
Ⅵ. 社会構成
Ⅶ. シャマニズム・治療・占い
（1）シャマニズム　（2）占い
（3）他の種類の病気治療法
Ⅷ. 寺廟

IX. 言語
X. 語彙

I. 序　言

ここに記述されるゴルド族 Gold とは、マンチュリア北部およびこれに隣接する部分のシベリアに分布するツングース系の一部族で、かつて満洲族と強い親縁関係にあった。今日、その人口は一〇〇家族を幾分上回るかも知れないが、多く見積もっても三〇〇家族（ウスリー河谷の同族員は除く）に達しないことは確かであり、しかも中国人入植者の進出によって急速かつ徹底的に衰滅へ追いこまれつつある。

一九三〇年五月、私は社会科学研究評議会の援助を得て、一年間をマンチュリアで過ごすことになり、ハルビンから蒸気船で松花江を下り、今なおゴルド族が見られる土地に着くとすぐに、彼らが好んで住み着く土地のタイプを見ることができるところまで、馬車で数日間旅をした。私の本来の目的はマンチュリアにおける文化の移動と伝播に関する総合的な歴史研究のために、予備的なメモを収集することであったから、ゴルド族の集中的研究については用意も準備もしていなかったけれども、観察を拡大しそれを記録すべく、あらゆる機会を利用した。

この資料の性質を考慮するに、いかなる刊行された典籍も参照することなく、単に私自身のフィールドノートと日誌を発展させることで、以下の報告を準備するのが最良と思われた。こうして直接的で個性的な報告の新鮮さを保つことができたかも知れない。どのような結論も私のものであり、事実に関するすべての叙述は個人的に収集した情報から引き出されている。従って、もし他の報告と矛盾するようなら、その原因はゴルド族自身の陳述に、多分求められるであろう。まず第一に、ほとんどないのであるが、ゴルド族はある範囲の地域的な相違を示す。第二に、ゴルド族はひどく退廃しているので、誰一人決して自分の部族に関する

信頼すべき情報を提供できない。昔ながらの生活が衰退するにつれ、多くの事物の用途と意味が失われつつある。かくして、ときとして情報提供者は親切心から、質問に対する答えをでっちあげようとする。他のときなら疑いなく、故意に悪質な答えを返そうとする。というのは、彼らは「調査」されることに、不信の目を向けているからである。いずれの誤った資料も避けるために、私はできる限り、直接的な質問によってではなく、会話をするなかで情報を収集しようと努めた。

純粋に中国人から得た情報を報告した少数の具体例では、私はその旨を明らかにしておいた。ゴルド族・満洲族・中国人の比較や、過去の歴史に関する推測などは、もとより私がゴルド族の間にいたときに、実際にとったノートからは引き出すことができない。それらは大部分、他の地域で先立つ年度になされた観察と形成された見解に基づく。〔5/6〕

私がゴルド族の住民がかつていたこと、そしていまもときおりその部族に属する家族が見られるという可能性を最初に聞き及んだのは、瑚爾哈河 Hurka（または牡丹江 Mu-tan）が松花江に合流する三姓 Sanhsing［現依蘭］においてであった。三姓から下流へ下ると、ゴルド語の地名がときたま残存していて、しばしば中国人によって訛った形で受け継がれている。これらの土地かその近辺に、とりわけ蘇蘇屯 Susu-t’un と佳木斯 Chiamosu（いずれもゴルド語を要素として含む）に、松花江の黒龍江省（西）側と吉林省（東）側の両方にわたって、ゴルド族の数家族が依然として暮らしている。しかし、松花江下流における最大の都会富錦 Fuchin に至るまで、私はゴルド族を一人も見かけなかった。富錦付近で私は、今日中国人が大多数を占めるが、かつてはゴルド族がもっぱら住んでいた小村落嘎爾当 Gardang と、これより大きな村落大屯 Ta-t’un（韃子屯 Ta-tze-t’un とも呼ばれる）を訪れた。

さらに下流に下り続けて、私は松花江とアムール河の合流点が望まれる地点、拉哈蘇蘇 Lahasusu（同江 T’ung-chiang とも称する）に足を停めた。ここには数家族のゴルド族が数えられ、その町の近辺で五、六家族のゴルド族からなる穆紅闊 Muruhungku という小漁村（ここから斉斉喀

Tsitsihar と呼ばれる別の小村が見える）を訪れた。

拉哈蘇蘇から私は馬車に乗って、一支流がアムール河に注ぐ哈義 Gaij（あるいは中国人によって街津口 Kai-chin-k'ou）と称されるタタール（韃子、ゴルド族）の古い村落まで、アムール河に沿いながら三〇マイルばかり旅をした。この地点あたりから、アムール河の右岸に丘陵が列なりはじめる。豪雨、洪水の恐れ、不十分な交通に加えて、誰もそれ以上私に同行したがらなかったこと（主としてロシア国境地帯に沿う不穏な気配による）が原因で、私はそこから引き返した。拉哈蘇蘇にもどり、馬車で富錦に行き、Niurgu［尼爾博か］と称する小村落に数時間滞在し、夜間は図斯科 T'u-tze-k'o の物悲しい廃屋に泊まった。

富錦に私はもう何日か滞在した。この二度目の富錦訪問の際、二人の中国人民族学者、すなわち国立中央研究院（南京）の商章孫・凌純声両博士が到着し、ゴルド族の集中的な研究に着手していることを知った。彼らはシラカバ樹皮カヌーのような大物まで含む、堂々たる標本のコレクションを作製中であった。シラカバ樹皮カヌーは現在使用されていないが、彼らはそれを作る技術を覚えている老人を見つけ出し、シラカバの大木のある最寄りの森（そこでカヌーを作ることになっていた）に行かせた。彼らはゴルド族をあらゆる局面（技術、シャマニズム、伝説、民間伝承、民謡等々）から研究し、その音楽を記録にとどめ、その言語を研究しようと企図していた。いままでのところで入手可能な、どんなものよりも包括的なゴルド族研究は、従って商・凌両博士がその成果を公表したときに期待されるであろう。〔6/7〕

（1）分布と人口

牡丹江（瑚爾哈河）が三姓で松花江と合流する地点は、ゴルド族の分布のおおよその南限であり、かつゴルド族と満洲族の古い接触地点であったと見てよかろう。しかし、ゴルド族の伝説はまた、さらに南方の地点、白城子 Pai-ch'eng-tze の廃墟（今日の阿什河 Ashiho―中国語形態をとる満洲語地名―、すなわちハルビンの東方、中東［中国東北］鉄道線上の都会の近く）にも

言及している。三姓のゴルド族は満洲王朝時代に満洲族によって吸収されるか、それとも取って代られた。[①] いずれにせよ、近年中国人が大挙入植し始めたころには、ほとんど残っておらず、今日三姓付近には一、二家族以上存在していない。三姓より下流の松花江両岸の多数の地点にはかつて、さほど多人数とはいえないにしても、ゴルド族が分布していた。[②] いまに残る地名は蘇蘇屯 Susu-t'un と佳木斯 Chiamosu である。前者はゴルド語の Susu（つまり廃墟）と中国語の屯 t'un（村落）に由来し、後者はゴルド語の名称が中国語風に訛ったものである。蘇蘇屯とその付近には一〇数家族以下のゴルド族が、佳木斯付近には四、五家族のゴルド族が住むといわれている。

松花江東岸の、佳木斯から約五マイル上流寄りに、六、七〇家族のゴルド族が住む大屯 Ta-t'un という村落がある。この村落の名称は通常、単に「大きな村落」を意味する漢字で表記されるが、いまでもたまに聞かれるより古い名称「韃子屯」Ta-tze-t'un―中国語で「タタールの村落」を意味する―の訛りである。そして富錦から二マイルばかりのところに、嘎爾当 Gardang（ゴルド語地名）という村落がある。この村落はかつて大きなゴルド族の村落であったが、今日六家族を余すに過ぎず、そのうち二家族は自分たちの所有地にいまも暮らしている。富錦自体は、ゴルド語地名 Fukjin[③]の中国語形であり、ロシア人は普通 Fukdin と呼んでいる。それはかつてゴルド族の主要な中心地であったが、満洲族の支配下で三姓より下流地域の最も重要な中心地となった。富錦はいまや新しくて繁華な中国人の都会であって、そこには二、三家族以上、ゴルド族は残っていない。

富錦以下では、東岸に船頭や漁師の数家族が確かにいるように、西岸にも数家族が散居しているかも知れない。村落の廃墟は図斯科 T'u-tze-k'o と Niurgu に見られる。図斯科のゴルド語本来の形態は、多分なにか Tuzke に似たものだったであろう。図斯科には約五家族、Niurgu には多分六家族のゴルド族がいる。図斯科はかつて繁栄した村落であったが、匪賊が冬期に松花江を渡るとき、よく利用する東西交通路

上に位置するため、近年多大の損害を被った。

Niurgu から約一五マイルのところに、やはり同じ側の松花江岸に位置する拉哈蘇蘇 Lahasusu（中国人は同江 T'ung-chiang と呼ぶ）がある。laha は泥に漬け込むか、泥を塗りつけたわらを捩った縄でもって築いた一種の壁を指し、susu〔7/8〕は「廃墟」を意味する。拉哈蘇蘇そのものには六家族以下のゴルド族が残存しているが、五、六マイル以内のところに、ともに六家族のゴルド族からなる穆紅闊 Muruhungku と斉斉喀 Tsitsihar の二小村がある。この二小村のゴルド族は、恐らく少数のより孤立した諸家族や小集団なのであろう。

拉哈蘇蘇は松花江の河口が望見されるところにある。三〇マイルほどアムール河を下ると、その南側（中国）の河岸に哈義 Gaij という村落があり、中国人から街津口 Kai-chin-k'ou と呼ばれる。ここに約二〇家族のゴルド族が住んでおり、そこから数マイルのところにほぼ同数か、もしくはそれ以上のゴルド族を擁する得勒奇 Derchi が位置する。哈義からアムール河の中国側河岸を進むと、低い丘陵が列なっている。地方の記録［地方志？］によれば、ゴルド族はアムール河に沿ってさほど遠くまで広がっていないが、事実上無人の空隙をおいた後、ギリヤークやその他の沿アムール諸部族に席を譲る。

本報告はアムール河のロシア側河岸に住むゴルド族、その他アムール河の中州に住む、中露どちらの所属かほとんど不明の数家族を考慮に入れていない。

こうして、ゴルド族がかつてアムール河から松花江を遡って三姓に至る、約二〇〇マイルにわたって分布したこと、およびこの範囲内に一〇〇家族以上の人口が残存することを知るであろう。その最大の密集地は富錦近辺であり、そこより下流の人口は富錦・三姓間のそれよりも、はるかに―恐らくは部分的に―多い。というのは、中国人が富錦以下のゴルド族人口をはるかに上回る人口で、遠く富錦に至るまで浸透したからである。しかしながら、近年における中国人入植地の著しい増大以前でさえ、ゴルド族人口は富錦以上よりも富錦以下が多数であったと、私は信

ずるが、このことは満洲「八旗」の配置に起因する。満洲族はかつて重要な河川警備を維持したが、その司令部は三姓と富錦にあった。満洲人は明らかに三姓（重要な満洲人都市）から松花江を上下して警備にあたり、一方ゴルド族は満洲人官吏も交えて、富錦から松花江を上り、アムール河を下って警備にあたった。

ゴルド族は河川の両岸に居住するとはいえ、たとえ今日狩猟するのに、西岸からよりも東岸からの方が遠くてすら、好んで東岸を選ぶように思われる。④これは古い生活条件に由来する遺産だと、私は信ずる。ゴルド族は河川と同一視され、たとえ遠く東方ウスリー河まで狩猟に出かけたとしても、自分たちと同様の部族としか遭遇しなかったであろう。ところが、ゴルド族の分布が松花江の西方へいくらかでも及んでいたなら、河岸の小村落に生活基盤を置かない純然たる森林・丘陵地の遊牧民に遭遇してたであろう。

（2）環境と気候

三姓以下の松花江河谷において明確な変化が生ずる。いくつもの丘陵が遠く北方は三姓まで松花江両岸に沿って存在し、〔8/9〕それらは最近まで厚く森林に覆われていた。そして、三姓で牡丹江に転ずれば、手つかずの厖大な森林に到達することができる。三姓以下では丘陵は急激に衰える。この土地は遥か北方で到達すべきツンドラ地帯の前兆である。アシの原野が何マイルにもわたって広がり、そこに生えるような樹木は沼沢密林の一部をなしている。気候は明白に三姓以上よりも以下の方が寒冷であり、短いが激しい夏期おいてはカとハエがすさまじい害虫となる。ここは遊牧民にとって理想的な土地ではなく、中国人入植者が到来するまでウマとウシは稀であり、ヒツジに至ってはいまもほとんど見ることはない。しかしながら、中国人の到来は著しい変化をもたらした。沼沢地は大部分、入念な排水を必要とするほど水浸しではなかったので、中国人は耕すことでこれを乾燥させ、草とアシの分厚いマットが鋤返されたとき、カとアブは激減した。短い夏の激しく湿潤な熱気は、腐植土

に富む黒い土壌から豊かな収穫をもたらす。〔9/10（原文空白）/11〕

Ⅱ．歴史と伝説

私が大屯で出遇ったゴルド族の一団は、自分たちが金兀朮 Chin Wu-chu[5]の子孫、すなわち金朝または女真王朝に出自する子孫だと思うと語っていた。彼らの「故地」は阿什河 Ashiho 付近の古城址、白城 Pai-ch'eng であり、岳飛 Yueh Fei（または Yao Fei）、つまり金兀朮の敵に破壊された。岳飛は宋王朝の英雄であり、「タタール Tatar」（満洲系の諸部族はもとよりモンゴル系のそれでもある）と対決した偉業に関する多くの中国の伝説で称賛される。岳飛は白城から多数の「白家雀」Pai-chia-ch'iao を手に入れ、硫黄を背負わせて放った。白スズメは白城に飛び返り、その背が家のひさしと擦れたとき、都市に火をつけてしまった［のだという］。

それ以上の伝説を公表しようと私は期待して、かつてゴルド族が満洲族の伝説における太汗爺 T'ai Han-yeh（「大ハン」；ヌルハチ Nurhachih）の敵、ニカン・ワイレ Nikan Wailê（または Nikan Wailan）によってどのように苦しめられたのか、尋ねてみた。男たちの一人が大声で笑って、ニカン Nikan（Nikhan・Nihan）とは満洲語と同様、中国人に対するゴルド語名称であり、ワイレ Wailê とは古董 ku-tung（中国語の方言で「悪い」「悪賢い」「二心のある」を表現する）[6]を意味する用語だと説明した。従って、ニカン・ワイレは「悪い中国人」ということになる。ニカン・ワイレは『東華続録』Tung Hua Hsü Lu（満洲王朝の官撰年代記の一版本）［補注］と『満洲実録』Man-chou Shih Lu（一九三〇年の刊本であり、瀋陽故宮で発見された原本に由来するといわれる）のいずれにおいても、尼堪外蘭 Ni-k'an Wai-lan の名で言及されている。どちらの記録でも、ニカン・ワイランは明の遼東の行政官と共謀して、ヌルハチの初期部族戦争の期間を通じて彼を打倒しようとした人物として描写されている（Nikan はモンゴル語の Khitat や Hitat と同様、侮辱的な「奴隷」の含意を有する）。だから、すべてのゴルド族

は以下のように、太汗爺とニカン・ワイレの物語が同一だと認めているのである。

太汗爺の母は、太汗爺がその父を殺したのと同じ敵（さまざまに岳飛とニカン・ワイレに同一視される）に殺されるのを恐れ、彼をシラカバ樹皮の揺籃に置き、ウスリー河（満洲族の伝説のように松花江ではなく）に浮かべた。母は言い聞かせた。「私はお前を育てることができませんが、お前が幸運ならば誰かが守ってくれましょう。その後、お前は父の仇討を遂げられるでしょう。」それから、揺籃はウスリー河がアムール河に注ぐ三江口 San-chiang-k'ou[原注1] へと浮かびながら下っていった。その当時、たまたまゴルド族の三氏族が三姓に住んでいて〔11/12〕、漁をしに三江口まで下って来ていた。彼らは揺籃を見つけ太汗爺を三姓に連れ帰った。「それがどのようにして彼が三姓に行き着いたか、ということなのだ。つまり、人々は彼を連れ帰り、彼は河の流れを浮かんで溯ることはなかった。」「そして、彼の母はどうなったか。」「彼は成長したとき、母の許に帰り、父の仇を自ら討ち取った。」

さて、満洲族型の伝説を要約すると、以下のとおりである[原注2]。

一人の乙女が長白山上の森に入り込み、赤い果実を食べて身重になった。男児が生まれると、彼女は揺籃に乗せ、松花江に浮かべた。彼は三姓へと下っていった。そこでは三氏族の男たちが支配者になろうと戦っていた。彼らは戦いをやめ、子供を河から拾い上げ、こういった。「この子は我々のハンになるだろう。」

通俗的な物語では、この子どもはときに太汗爺と呼ばれるが、正しくは愛新覚羅 Aisin Jioro と称されなければならない。⑦ 数世代後、最初にニングタ Ninguta（寧古塔）、ついで吉林市、さらに奉天（遼寧）省境に征服が及んだ後、真の太汗爺が台頭する。愛新覚羅が満洲国 Manchu nation の創始者であったように、太汗爺は満洲帝国の創始者であった。太汗爺は中国人官吏、つまり物語中のニカン・ワイレの在任中に、帝国を創始すべき運命を示す、生まれながらのしるしをもつことを発見された。彼

を死刑に処せとの命令が発せられたが、太汗爺は逃亡し、幾多の冒険を経て、後に満洲帝国となる王国を建設した。

両部族の長期にわたる接触を考慮するなら、部族祖に関するゴルド族の伝説が満洲族から借用されたか、それとも満洲族がいまだ部族段階にあるときに、伝説をゴルド族から得たのかを断定することは不可能である。[8] 私個人としては、上記いずれのバージョンも、親縁関係にある人々に属する、同系統の神話の一部なのだと思う。この伝説で私が興味をそそられるのは、遠く離れた二地方間の関係を説明しようとする歴然たる努力である。つまり、ウスリー河の南方上流の地点がアムール河の北方下流の地点と連結されるかも知れないし、あるいは松花江の南方上流の地点がアムール河の北方下流の地点と連結されるかも知れない。さらにまた、長白山の松花江水源といった南方の地点が、三姓における牡丹江との合流点といった北方下流の地点と連結されるかも知れない。

この伝説は歴史と明白な関連をもつようにも、私には思われる。案に違わず、中国側の記録は満洲族やその同類ゴルド族の伝説よりもはるかに詳しく、このことを説明する。〔12/13〕中国人は長期にわたって遼東に強力な足場を確保していたが、彼らが注目すべき人口で吉林・黒龍江両省に広がったのは近年のことに過ぎない。満洲人の時代に到るまで、多数の中国人人口がマンチュリアに拡大した、あり得べき北限はほぼ奉天［瀋陽］の緯度線あたりであった。いうまでもないが、中国人の影響はしばしばもっと北方の地域にまで及んだ。中国人人口が永続的にマンチュリア最南部に定着するうちに、政治的権威は大きく変化した。非中国人部族がマンチュリアにおける中国人の「境界」を襲撃し、それを支配する趨勢が再発したのである。そして彼らはしばしば遼や金の場合のように、その支配を遠く中国本土にまで及ぼした。逆に中国人がこの種の支配を振り払い、勝利に乗じて中国人住民の実際の領域のはるか北方にまで、その影響を拡張する傾向もあった。これらの相反する潮流の結果に、中国人による同名の部族に対する頻繁な「生」wild と「熟」tame の区別（後者は中国人との活発な接触をもつものである）は起因する。「熟」部

族は「生」なる同族に対する辺境の藩屏として、しばしば金品を供与され、一種の交易を行った。金品供与と交易を二つながらに「朝貢」の名目で偽る慣例があった。すなわち、部族長は中国辺境の官吏に「貢物」を献上し、これに対して官吏は「貢物」よりも価値の優る「褒賞」を返礼に贈ったが、それは事実上、外部の部族に中国を襲撃させずにおくよう、部族長を説得するために支払う金品に他ならなかった。

いまだかつてその極盛期に攻撃され、打倒された中国王朝は皆無であり、中国への侵入を引き起こすような、北方における深刻な人口圧もあり得なかった。その趨勢とはむしろ、中国王朝の衰亡時に機会をつかみ、中国の領域を襲撃することであった。襲撃はやがて領域の占領と、中国的な形態を模倣した「原住民国家 native state」の形成に席を譲る。そしてその完全な成功の指標は、中国本土の一部ないし全部を領有する帝国の建設であった。そうしたタイプの帝国には、ともにマンチュリアに起源する遼王朝と金王朝、モンゴリアに由来する元王朝、そして再びマンチュリアに起源する清（満洲）王朝がある。

遊牧民族、あるいは満洲族のように村落に住むが、経済的基盤を大部分狩猟と漁労に置く民族ですら、中国人のような農民と職人からなる国民ほど稠密に、一平方マイル当たりの人口を集中させることは不可能である。その結果、遼・金・満洲諸王朝が中国本土を征服したとき、膨張した政治的領土を効果的に占領する困難さに直面した。それらの王朝はこの困難を、一部は中国人部隊を徴集し、自らの利害関係を中国人の地方派閥と同一視することによって、〔13/14〕また一部は「生」なる同族から援軍を補充することによって解決した。こうして満洲王朝は中国本土の征服に衷心から参加を願った遼東の中国人住民から「漢軍旗人」を徴集すると同時に、八旗をゴルド族、ダグール族 Daghur、ソロン族 Solon その他の近縁部族に拡大し、修正した形態でモンゴル人にも拡大した。ゴルド族はあまりにも満洲族と酷似したので、彼らを「新満洲族」[9]として満洲族社会と統合するには明らかに好都合であった。ダグール族とソロン族は物質経済が満洲族と著しく異なり、少なくともダグール族、な

らびに一部のソロン族は強くモンゴル化していたにせよ、特定地域においては少なくとも、同じく「新満洲族」として統合するに足るだけ、種族と言語の点でなお近縁であった。ところが、モンゴル人は中国人よりは満洲族に近いとはいえ、相互に社会的に分離したままでいるのに十分なだけ強固な、彼ら自身の社会を形成していた。

ゴルド族と比較的遠縁な金朝との、伝承に基づく結合関係についていえば、それは自然かつ妥当である。満洲族もそうした伝説をもっており、恐らくマンチュリアにおけるあらゆる非モンゴル系部族がそうだったのであろう。[10] 彼らはこの関係を、より早期の遼よりはむしろ金に遡るであろう。何故なら、遼はより多くのモンゴル的複合をもっていたからである。金のような王朝が繁栄する間、王朝の本来的で種族的な支持者たちは、彼らと真の中国人との主たる相違が一個の政策となる以前に、言語・社会・文化の点でますます中国化していった。このタイプの最後の王朝、清（満洲）王朝の歴史はこの過程をきわめて鮮明に例証する。満洲族が本質的に中国化するにつれて、中国王朝が衰微したのとまさしく同様に、清王朝は結局衰亡していった。政治的転覆が遂に訪れたとき、名目上の異民族（実際は王朝と結託する中国人［化した］特権階層）は、中国人の住む地域の至る所で虐殺されるか、中国人に吸収された。しかし、辺境ではかつての征服民族の残留者が取り残され、中国に移動した人びとを補充すべく、より遠隔の地域から引き入れられた部族民と混和した。この辺境の残留者たちの内部で、再び「原住民国家」の建設が始まる。彼らは「生」諸部族と文明化した中国人の中間にあって、彼らの接触した中国人に強く影響されながら、しかし中国人とは峻別され、程度の上で中国から金品を受け取ることと辺境諸地方から金品を脅し取ることの間を変化するような独立性を政治的に維持し続けた。

満洲族自身がこのタイプであった。というのは、その権力が一群の境界「原住民国家」（たとえば「マンジュ」Manjo［Manju］に加えて、イェヘ Yehê、ホイファ Huifa［Hoifa］[11] といった）の合体の上に樹立されたからである。このことは満洲族・ゴルド族その他を金朝からの系譜に帰する伝承の正確

な価値〔14/15〕を説明する。種族的にいって、この主張は著しく修正された意味においてのみ真実であり得る。なぜなら、「熟」境界部族は、中国へ向かう出口と北方未開部族からの入口を備えた一種の貯水池(reservoir）を形成するからであり、よってある種族的な接触が持続せずにはすまない間、種族的な、少なくとも部族的な構成比率は、数世紀を通じて徐々に変化したに違いない。これに反して、政治的な連鎖は直接かつ正確であった。つまり、少なくとも金朝の滅亡から満洲王朝の勃興まで、境界部族は相対的に一様な位置を占めた。彼らの地位は潮が干満する（潮は依然として同じ水道を流れる）ように、幾度となく臣下と大君主の間を変動した。こうして、考え得る限り、もし満洲王朝滅亡当時の中国に、西洋の影響（旧来の軍事的均衡を改変する西洋火器と、マンチュリアにおける中国人入植地の全自然を変貌させる鉄道）がなかったとしたら、あと数世紀で満洲族ではなくマンチュリアンManchurianの勢力が蘇ったことであろう。とかくするうちに、マンチュリアに残った満洲族は、国家からの補助および帝国と結託する特権階層としての社会的地位を剥奪されて、半部族的状態に後退したであろう。そして、ゴルド族は満洲族の補助者たる恩典を奪われ、「新満洲族」と自称するのをやめたであろう。しかし、衰退と再分布の過程で両民族の間に、ゴルド族が「新満洲族」の地位に上昇しているうちに継続していた以上の、大規模な融合が生じたであろう。やがて新たな部族的勢力がマンチュリアに勃興し、王朝を建設したなら、正当性をもって満洲王朝の後継者と自称するであろうが、満洲族とゴルド族のいずれにも直接的には由来しない、新規の民族名と王朝名を採用したであろう。同様に、中核的部族と補助的部族の新規の区分が生じたであろう。それらの各々は歴史的機能において、満洲族とゴルド族（ダグール族・ソロン族その他）の直系的後継者であるが、種族的組成と社会的・部族的構造においては単なる間接的後継者に過ぎない。

私の見解では、明確なタイプの歴史的周期が長期にわたって作用していた、マンチュリアのような地理的に輪郭の明確な地域内においては、歴史的機能の継承関係の認識は、真の社会的・部族的・「種族的」継承の

形態として、遼・金・清・「新満洲族」などの間でのような関係の理解を著しく単純化する。マンチュリアのいかなる二つの所与の部族集団間であれ、所与の時期と場所における種族的・社会的親縁性の程度は、正確に定義するのがはなはだ困難である。しかし、それらの相対的分類は所与の時期と場所においてではなく、絶えず進行する生きた過程の一部として解釈されるとき、決定する上でほとんど困難を感じることはない。〔15/16〕

満洲族とゴルド族の親縁性は、満洲族とダグール族、満洲族とソロン族のそれなどよりも決定するのがはるかに容易である。身体的なタイプや言語において、両者は驚くほど近接する。その最も重要な相違は、彼らが被った中国人の影響と境界政治の異なった程度から生じた。満洲族が境界諸国家を建設し、軍事組織を発展させる一方、ゴルド族は優秀な兵士の人的資源であり続けたにせよ、この点で立ち遅れてしまった。その関係は、満洲族の勃興期において、これらの諸部族がたとえば「熟女直」と「生女直」にまさに匹敵する、ということによって要約されるであろう。満洲族の中国征服後、ゴルド族は「熟」部族民の地位に上昇し、「最僻遠の未開人」から「生」補助部族に上昇した、より遠隔地の沿アムール諸部族を背後に引き寄せた。たとえば、ソロン族、さらにはダグール族ですら、清代には「生」と「熟」の区別をもっていた。これは満洲族の観点であって、中国人の観点からすれば、特別な段階ないし程度が付加されなければならないであろう。つまり、「熟」部族民は「生」部族民であり、「生」部族民は「生」と称するに足るという見分けすらつかない、最僻遠の暗黒に住む未開人であって、完全に全体像から外れている。

ちょうど検討し終わった歴史的周期のタイプは、満洲族やゴルド族といった民族の中心的な伝説、つまり南方に生れ落ち、北方へ（「浮かびながら下流へ」）取って返し、そして「太汗爺」という子孫として、民族の権力と栄光を明らかにすべく、再び南方へ帰るという、文化英雄 culture hero[12]（「愛新覚羅」）の神話と関連を有する。この伝説は民族の北方起源と、彼らの成功と権力の基準が中国との関係にあったという事実とを整合さ

せようとする、非常に早い時期の努力を象徴するように思われる。彼らは北方から到来し、南方で成功するか失敗した。彼らが南方に落ち着いたとき、その伝説と宗教的観念を新たな土地に帰属させようとする自然な傾向が生じた。ことに満洲族の場合、彼らにとって目を引く長白山が、その際立った中央の頂とそこから流れ出す諸大河とによって、明瞭な焦点となった。伝説の英雄と新たな地域的焦点を結合することは必然的であったが、真の北方起源と成功した南下の記憶は、無意識的に英雄の南方から下流に向かって北方（ここで彼は「三氏族」の支配権を手中にし、その後彼に相応しい子孫が南方において境界勢力を確立する）に至る移動に反映された。私の考えでは、この伝説はまた、反復される歴史の周期において、満洲族やゴルド族が歴史的機能の上で最後の継承者であった集団に属する「熟」部族が、断続的に中国人のために敗北を喫し、北方の荒野へ追い返され、そこで彼らは再編され、〔16/17〕そしてここから小規模な辺境「原住民国家」の「約束の土地」へ導かれてもどっていく、という事実によっても潤色されている。こうして、満洲族形式の伝説は長白山型（北は三姓に至り、長白山地方にもどる）であり、ゴルド族形式はウスリー河谷型（北はアムール河に至り、南は松花江を経由して三姓にもどる）である。これらと並行する伝説がウスリー河自体にも発見され得たであろうことを、私は少しも疑っていない。あるタイプの歴史的証拠（考古学的な）は、いまだかつて十分に調査されたことがない。満洲族やゴルド族の土地の至るところに、今日「朝鮮［高句麗］人の物」と称される都会や砦の廃墟が散らばっている。[13] その多くは事実、古い時代の朝鮮人による支配、もしくは影響の遺物かも知れない。しかし、その一部は確かに中国的なタイプに属し、十分歴史時代に収まる［考古学的］資料（それは今日絶望的に不鮮明となっている部族的な地層を解明するであろう）を含有することが、いずれ発見されるかも知れない。三姓以下の松花江河畔には、あたかもかつて頂上に砦を戴いていたかのような丘がときおり見られる。要塞化した野営地規模の「朝鮮人都市」の輪郭が、富錦と拉哈蘇蘇（同江 T'ungchiang）の間、図斯科のやや北方に見られる。いま一つは哈義の小村を見下ろす

丘の上に見られ、強力な自然の要害をなす。これらの砦や都市が全部、朝鮮人や中国人によって建設されたというのではなく、ときとしてこれらの民族に占拠される一方、別の時代には原住の部族自身に占拠されたものと私は考えている。私が信ずるところでは、それぞれ異なった時期に波及した朝鮮人と中国人の影響は、彼らの占領地や統治範囲の外縁をはるかに超えて広がり、そして部族長たちが小規模な国家を創設するに足る勢力を得たときはいつでも、たとえ目的のためには設計者と職工を招き入れてでも、「文明化した」モデルを模倣して自分用に要塞を建設したもののようである。〔17/18〕

原注 1.　三江口という地名は興味深い。その意味は中国語で「三大河の河口」であり、今日、松花江とアムール河の合流点をこう呼ぶ。二河川の合流は、合流点における「三叉」形式から三江と称されたようである。ウスリー河がアムール河に注ぐ地点が、同様の名称で呼ばれるのも無理からぬことである。満洲族タイプの説話では揺籃は松花江を下って三姓（満洲語名称 Ilan-Hala、これも三氏族の意）―ここにおける牡丹江と松花江の合流は、まさに同じく「三叉」形式があてはまる―に至る。こうして、同一の説話が容易に地方化することの可能な三つの地点が存在することになる。

原注 2.　以下の物語は、今なお残存する伝説に基づくものであって、史籍に見られる公式の文語版に基づくものではない。

Ⅲ．隣接諸民族との関係

（1）ゴルド族と満洲族の関係

満洲族の中国征服後、ゴルド族は満洲八旗の組織内部に編入された。[14] このことはゴルド族に武官・文官いずれの公務をも職業として開放し、かつ陸軍予備兵の試験に合格した強健な男子に、銀両と糧米の年俸を受

ける資格を与えた。ゴルド族は三姓で満洲族と重なりあい、三姓・富錦・拉哈蘇蘇に配属された比較的高位の官吏によって、それよりも小さな地方では満洲的官位を有する下級官吏によって統治された。高級官職は満洲族が掌握したようであるが、ゴルド族が排除されたわけではない。帝国時代、兵役に就いたあるゴルド人は、黒龍江省ではそれでも高位の官人と称された。彼が［最後に？］自分の家を訪れてから二〇年以上経って、「人々が彼に『ゴルドとは何のことですか、そしてあなたの家族は誰ですか』と尋ねたとき、彼は涙にくれた」と言われている。私は哈義で何年間もハルビンに上級通訳として配属されていた老人（その地の同類の間で著名な）に出会った。彼はロシア語が実に流暢で、その上満洲語・中国語のいずれも読み書きができた。

しかしながら、ゴルド族が果たした主な任務は、満洲族が維持した松花江・アムール河の河川警備であった。この警備の任務は現在、河川用砲艇によって引き継がれている。河川用蒸気船の船員がそうであるように、この砲艇の乗組員のなかにも何人か、ゴルド族がいるかも知れないが、人数の上では山東省の人びとや天津附近出身の村民が優勢である。何軒かのゴルド族民家で、私は満洲族よりは低い官位のゴルド人の肖像画を見たが、彼らは服装に風変わりで興味深い混合を示し、中国風の威厳と蛮族的な光輝をあわせもっていた。彼らと今日落魄した同類たちとの対比は痛ましい。

（2）他の部族との関係

沿アムール諸部族間における族名の混同は、ゴルド族が他の部族についていかなる知識をもち、彼らが何と呼ばれたのか、を決定するのを著しく困難にする。ひとつとして自称を他の部族から受容するような部族はないと思われ、またどの一部族も、その隣接する各部族によって別個に名づけられるであろう。この混同はロシア人と中国人に受け継がれたようであり、現在二つの過程は続行中である。つまり、実際は異なる数部族が同一の名称で総称されたり、あるいは区別が設けられ、ときには

分類された側の人々によっては少なくとも承認されないような名称が付与されたりする。中国人はアムール河上流のどの部族民も、〔18/19〕全然区別せずにソロン Solon（索倫）・チリン Ch’i-lin（棲林）、ないしタフリ Ta-hu-li（達呼里：Daghur）と呼ぶ傾向があり、彼らの間で暮らしたことがあるような中国人でさえ、これらの名称の一つに分類されるどの部族に関しても、まさしく同一の描写をなし、まさしく同一の物語を話すであろう。事実、すべての部族に関する中国人の「通俗的知識」は、いくつかの物語に要約され、その異口同音さたるや、誰一人個人的な観察によって逐一確かめる必要がないほどである。松花江とアムール河の合流点以下では、すべての部族が「魚皮韃子」Yü-p’i Ta-tze と呼ばれるが、しかし魚皮韃子・ソロン・チリン・タフリが「ことごとく同じである」という傾向もある。こうして、私は［コミュニケーションを］中国語に頼っていたので、族名問題を扱うことは非常に困難であることが分かった。

私は繰り返しゴルド族に他の部族について説明するように求めたけれども、いつものように直接的な質問は貧弱な返答を引き出したに過ぎなかった。私はまた聞いたり、書籍から得た部族名のいくつかについて、ゴルド族が用いるそれと同一かどうか、尋ねてみた。その最も明確な返答は、ゴルド族自身、ギリヤーク人 Gilyak、そしてスンガリ・ゴルド族[15]の同族であるウスリー河谷の人びとを取り扱ったものであった。そもそも今日のゴルド族は相当期間にわたって狩猟旅行をする間に、それほど他の部族と接触しなくなっている。恐らく旧満洲王朝時代よりはるかに少ないであろう。年長の人びとは若者などより鮮明に、他の部族のことを知っている。というのは、彼らが成長したとき、多くのゴルド族は行政的な事柄で、現在のスンガリ・ゴルド族のそれより広大な領域に住む諸部族と関係していたからである。ゴルド族は「魚皮韃子」と呼ばれることに反感をもっている。なぜなら、それが野蛮という侮蔑的な含意を帯びるからであり、「本当」の魚皮族はギリヤークか、アムール河下流の他の部族だといい返すのがつねである。ギリヤーク人はギリミン

Girimin と自称する。[16] この単語の min という要素は、多分中国語の「民」であろう。中国語の名称チリン Ch'i-lin は現地語 Giri の転訛かも知れないが、チリンは普通ギリヤークから遠く隔たった黒龍江省の住民に当てはまる。さらにキリン Kirin（中国語「吉林」Chi-lin）なる名称は類似の部族名と多少関係があるかも知れないが、通常「渓谷」を意味する満洲語に由来するといわれている。[17] ギリミンないしギリヤークはつねに「大きな耳環をつけた人々」として描写され、「‘キレ Kile’ と同じだ」[18] といわれている。

私は何度か「ソロン族はビラル Birar 族ないしビラリ Birari 族である」[19] と断言されるのを聞いたことがある。このことはロシア人によってビラリと呼ばれたアムール河上流の部族が、事実ソロン族の亜族であったことを意味するのかも知れない。もしかするとビラルないしビラリは、ゴルド語の bira、つまり「川」ないし「小さな渓流」と関連するのではないかと私が尋ねたところ、ゴルド族は同意したが、これは彼らが実際にそのような含みを意図したことを意味しない。〔19/20〕

オロチョン Orochon 族のことを、ゴルド族はオロンチョン Oronchon、またはオロスチョン Oroschon と呼ぶが、彼らとは決して遭遇しないという。ゴルド族は中国人をニカン Nikan（先に指摘したように「奴隷」の含みもある）と呼び、ロシア人をオロス Oross ではなく、ルチャ Lucha と呼ぶ。『吉林通志』に羅刹 Lo-ch'a に対する軍事行動にふれた、いくつかの言及が見える。羅刹とは明らかにロシア人のことであって、満洲族が松花江下流およびアムール河の諸部族を平定し統治下に置くうちに、ロシア人と接触するようになり、彼らから火器を分捕ったのだという。私がノートした最初の言及は順治九年（1653）の条にある。もういくつかの言及の後、羅刹が消え、代って老羌 Lao-ch'iang なる用語が康熙三年（1665）の条に現れる。老羌は黒斤 Hei-chin を侵略したとして、最初に言及されている。明白に黒斤は和真 Ho-chen（すなわちヘジェン Hêjên ないしゴルド族）のより古い形態である。康熙一五年（1677）の条に、老羌防禦のための相当な規模をもつ河川艦隊の建造が言及されてい

る。[20] 唯一、哈義村でだけ私はラムンカ Lamunka（ロシア領のラムート Lamut 族か）[21]、すなわち「海の人びと」のことを聞きつけた。彼らは「ウラジオストクの附近」に住むといわれ、その言語はゴルド族に全然通じない。彼らはゴルド族よりもスキーや小さなカヌーの扱いに長じ、鼻輪をつけている。髪は二本のおさげに編み、それを肩の前に垂らし、胸の上で輪になるように結ぶ。上着の腰から下の裾は、海貝で装飾されている。[22]

最後に、ときにウスリー・ゴルドと呼ばれる部族を、［松花江の］ゴルド族はヘジン Hêjin（中国語の Ho-chin）と呼び、私が彼らに試したケチェン Ketchen と「同じ」名称だといっていた。ヘジンという名称はヘジェン Hêjên の変形に相違なく、ヘジェンは後述するようにゴルド族の自称の一つである。ヘジンをゴルド族は彼ら自身の一支派とみなしているらしく、方言は違うけれども、松花江とウスリー河の人びとは意思疎通が可能だという。ゴルドという名称そのものについて、ゴルド族は「ゴルディ Goldi とはロシア人が我々を呼ぶ名称だ」とか、「それはロシア語だ」という以外、使用も承認もしていない。のみならず、彼らは他のいかなる部族もゴルドやゴルディと呼んだりしない。

ゴルド族の言によれば、彼らはヘジェ Hêjê ないしヘジェン Hêjên と自称する。[23] これは彼らが上品で正式な名称をもちたいと願ったとき、土地の中国人が適用した名称（Ho-che または Ho-chen）に他ならない。私が見出し得た ヘジェないしヘジェンの最も早い時期の漢字音訳は『吉林通志』第一巻・六葉裏の天聰一〇年（1637）条にあり、Heichê と呼ばれ、精悍な部族として言及されている。漢字は「黒」hei（ときに ho とも hê とも発音される）と「折」（che）であるが、今日では「赫」（ho）〔20/21〕と「哲」（chê）が使用される。[24]「蛮」族の中国語名称における粗野な意味の漢字から好ましいそれへの向上は、全然見られないわけではなく、かつそのことは中国人の目から見た地位の上昇を示す。ヘジェは満洲部族連合に加入したにもかかわらず、先に引用した『吉林通志』の一節で「いまだ信頼ずるに足らない」と言及されている。

(3) 中国人との関係

中国人とゴルド族との関係は、全体として非常に良好である。すなわち、中国人・満洲族間ほどではないにしても、中国人・モンゴル人間よりは著しくよい。ゴルド族は中国人に圧倒され、現在急速に滅び去ろうとしているのに、消え去った栄光に溜め息をつくだけで、その悲運を運命論的な冷淡さで見つめる以外、中国人にいかなる害意も抱いてはいない。中国人は彼らに関する限り、いつもゴルド族を人のいい侮りで眺めてきたが、ゴルド族が中国的規範を採用するのに成功すれば、中国人として受け入れた。しかし、それでも悪感情の時期はあった。満洲族の支配が終わりを告げるまで、中国人の自由な入植はゴルド族の土地では許されていなかった。唯一進出を許されたのは商人であって、あらゆる辺境商人の例に漏れず商売のやり方が良心的でなく、遺憾なことに進んで飲酒とアヘンに溺れたゴルド族を多数破産させた。満洲帝国が終焉に近づいた頃、ロシア人の侵食に対して機先を制するための不可避的な辺境防備策として、松花江下流沿岸の土地が中国人による入植に開放されたが、最良の土地はゴルド族の利益を図るべく保留された（このことは入植地の建設が満洲王朝の指導下で着手されたという事実のおかげである。満洲族は「自らの臣下」としてのゴルド族の福祉に配慮するように努めた）。ところが、ゴルド族はこの保留地を、より精力的で有能な中国人のために瞬く間に失ってしまった。このとき、中国人があまりにも大胆に山野に割り込んできたので、獲物を追い散らされて憤激したゴルド族は彼らを待ち伏せて狙撃したらしい。しかし、入植があまりにも急速に進行したので、ゴルド族は間もなく絶望的に人数で劣ってしまった。中国人はしばらくの間ゴルド族を手荒く扱い、「手つかずのままの」ゴルド族村落に最初入り込んだとき、彼らを虐めて「自分たちの置かれている立場を教えてやった。」だが間もなく、ゴルド族が新来者にとってなんら深刻な危険ではなく、そして新来者の横柄な態度に対する憤怒と、ときたま現れる旧時の蛮風が事実上、消え失せていることが明らかになってきた。この比較的寛大な態度は疑いなくモンゴル人の場合のような、境界での戦争と蜂起の惨た

らしい記憶がなかったところに帰される。ゴルド族は真の障害を中国人に加えるには人数が少なすぎ、だからこそ中国人はゴルド族を倹約を知らず、文化的に劣ると軽悔することで満足したのである。〔21/22〕

ゴルド族衰滅の圧倒的な要因は、ゴルド族女子と中国人の婚姻であり、それは中国人入植者のもとでの女性不足に起因する。中国人自身は、もし相応しい相手を見つけられるなら、娘をゴルド族に嫁がせることに反対しないであろう。女子の値段［花嫁代償］があまりにも高騰しているので、見込みのありそうな娘のだれに結婚を申し込むにせよ、中国人と競争し得るようなゴルド族はほとんどいない。今日、自分たちゴルド族の女子に対してすら、中国人ほど好条件の申し込みができないため、多くのゴルド族の男たちは未婚である。まったく奇妙なことに、中国人は皆、ゴルド族の女は自分の同類の間では浪費好きでふしだらなのに、中国人の家に嫁ぐと模範的な妻になるという。なぜなら、かりにも結婚する余裕のあるような中国人だけが現金をもち、前途に順調な将来が約束されているからであって、こうして女子は安定した生活に入ることができる。一方、もし女がゴルド族の家族にとどまるなら、貧困と労苦に直面することになり、だから彼女はそうできる間、わずかばかりの快楽と小遣い銭を得るために売春するのである。

ゴルド族女子と中国人の結婚が、比較的最近に属することは指摘すべきである。なぜなら、最近まで中国人が大挙してゴルド族の土地に到来しなかっただけでなく、ゴルド族は旗人として満洲族と同様、中国人の妻を娶ることは許された（頻繁に娶ったわけではなく、満洲族よりはるかに頻度は低かった）が、しかし娘を中国人に嫁がせることは許されていなかったからである。この規則が起源上、政治的なのか、それとも種族的なのか、しかとは分からない。私には、それは政治的であって、軍事集団として旗人の階級意識を維持するためだけに設定されたという気がする。しかし、より遠い起源においては種族的であったかも知れない。というのは、ある部族は異種族の女を娶ることによってその血液が稀薄になるのは気にかけないが、女子を外部の男に嫁がせることによって血液が「失われ

る」ことには反対するからである。〔22/23〕

Ⅳ．身体的特徴

ゴルド族の間では個々人の顔立ちこそ広範囲にわたる反面、男たちの大多数はただちに中国人と違うことに見分けがつく。ゴルド族は、吉林省の満洲人に今なお頻繁に見られる、最も純粋な「ツングース的」タイプに酷似する。骨格は小さいが、よく均整がとれており、肥満の傾向が全然ないので、全体的な外見は身軽かつ柔軟である。身長は人によって大幅に異なるが、多分平均すると華北の中国人全般、とりわけ山東の中国人よりも低いであろう。ただ、男子で五フィート八インチ以上に達するものもめずらしくはない。手足は繊細でやや小さく、あまりにもほっそりとしているので、一層小さく見えるが、にもかかわらず頑丈である。顔は面長の傾向があり、明らかにモンゴル人よりも長い。顴骨は非常に高いが、モンゴル人のそれや華北の中国人（顔立ちがモンゴル人に酷似する）に見られる通常タイプのそれほどは高くない。しかし、格別に長い顔が顴骨のアーチと顎の尖り方を強調している。眼窩はさほど深くはなく、眉の隆起は明確ではない。両目の間の鼻梁は非常に低い傾向がある。このことは両目が顔面に非常に浅くはめ込まれたかのように見せ、とても穏やかな眼差しを与えるが、中国人はゴルド族の目は曇っていて活気がないという。鼻梁の下部は明らかに平均的なモンゴル人の鼻よりも鋭く、鼻孔は形がよくて繊細な傾向がある。この鼻梁下部の繊細さは眼差しの穏やかさと相俟って、しばしばゴルド族に名状しがたい哀感と憂愁の表情を与える。瞳は茶色が最も一般的であるが、強くハシバミ色を帯びる傾向があり、真のハシバミ色もさほどめずらしくない。私は青色と灰色の瞳を見たことがある。毛髪は黒いけれども、ほとんどつねに紛れもなく褪せた茶色っぽい色彩を帯び、子供にことのほか顕著である。中国人の頭髪のような漆黒、つまり光沢のある黒色はほとんど見られない。私の思うに、ゴルド族の頭髪は中国人のそれより粗くはない。勿論、毛髪

の茶色っぽい色合いなど、中国人、ことに子供については聞いたことがないけれども、大人の毛髪がかりに著しく「褪せる」傾向をもつとすれば、毛髪油を塗って黒さを取り戻しているのである。私は、独特のショウガ色をした、赤茶けた顎ひげをもじゃもじゃと生やした一人の老シャマンに会ったことがある。その老人の瞳は青く、あるいはロシア人の血を引くのかも知れない。彼は非常に背が高かったが、目鼻立ちの造作、体格の身軽さは、まさに「ツングース」そのものであった。

後頭部はしばしば、多分つねに、極度に平坦である。同様の特徴は吉林省の満洲族にも見られるが、彼らはより一層中国人になろうと努めているため、現在急速に消滅しつつある。この特徴は、子供がまだ幼児のときに、きわめて固い枕で寝かされるところに起因する。[25]〔23/24〕枕にはぎっしり穀物が詰め込んである。その穀物が特別な種類のものか、特に選ばれたものか、私は知らない。しかし、以前はそうだったのであり、そういう慣習が意味をもっていたのだと、私は信ずる。満洲族の間でつねに大きな重要性を保ってきた、特殊な種類の北方産のキビがある。[26]これは満洲族による最初の栽培植物であったかも知れず、ゴルド族が重要視してきたのももっともなことである。『青い (輝かしい) 大元国の歴史年代記』[27]と称されるモンゴル年代記に、幼いチンギスが「前方の土地」、すなわち南方の土地ないし中国で栽培される九種の穀物を詰めた敷布団に寝かされたという趣旨の、大変興味深い物語がある。

女子は男子ほど種族的タイプが明確ではない。その多くは、容貌や全般的外見からすれば、中国人や満洲族の女子も同然である。女子の頭部の比較的軽快な骨格構造は、私の思うに、男子の頭部に見られることになる特徴を軽減している。

ゴルド族の間にいるとき、私は小規模な身体計測（男子のみ）を行って、ハーヴァード大学のフートン E.A.Hooton 博士に送った。〔24/25〕

Ⅴ．物質文化

ゴルド族は満洲族と同様、早くから中国人の影響下にあり、それはある点で圧倒的であるが、他の点ではゴルド族固有の規範にそれほど強力に作用していない。満洲帝国の終末期までに、ゴルド族はいまだ満洲族ほどは中国化していなかったが、それは主として満洲族が彼らと中国の直接的影響との間に介在したからである。しかし、満洲族と同じく、彼らが支配種族に所属する恩恵を共有することを通じて、人為的に高められた生活水準を享受して以来、最も重要な借用物は快適さと洗練さに関わるそれであった。ゴルド族はすでに河岸の村落に定着し、衣食の供給を大部分、漁猟に依存すると同時に、ある程度の農耕も行う人々であった。彼らはいまだかつて漁猟を放棄したことはなかったし、経済の主要な要素とするほど大規模に農耕を採用したこともなかった。[28] 彼らには出生による明確な貴族階級（たとえばモンゴル人のような）は存在せず、地位は彼ら自身の推挙か、満洲政府の任命に依存したが、ときには満洲族の制度に準じて殊勲が世襲身分、官職、称号によって報われることもあった。公務で結びつく諸家族が上流階層を形成する傾向があったようである。これらの家族は安楽に暮らすことを可能にする収入を速やかに得たので、漁猟に従事するのは主に娯楽のためであった。彼らは自ずと松花江下流の行政的中心地である富錦に集中しがちであった。富錦に近い村落の家屋と、富錦から下流、アムール河にかけて広がる村落のそれとの比較は、後者の方が明らかにより「原始的」であることを示す。多分上流階層の諸家族は、奴隷を所有したであろう。というのも、奴隷が家内使用人であると同時に耕作者であるといった、満洲族と同種の奴隷制度が承認されていたと仮定する方が自然であるからに過ぎない。もっとも、現在この問題について収集され得る確実なことがらはなにもない。

（1）家屋

普及している家屋のタイプは満洲族のそれであると思われる。かりに

狩猟旅行でのティピ tipi［円錐形テント］[29]の使用が、かつての移動生活（トナカイの使用を伴う）の証左であるなら、倉庫の一タイプ、すなわち「支柱」ないし杭の上に据えた［高床式の］わら葺き小型家屋、が初期型住居の残存でない限り、家屋タイプは移動生活を放棄したときに採用されたはずである。[30]満洲族タイプの家屋（図 1）は、中国的な家屋様式と朝鮮的なそれとの組み合わせかも知れない。建築単位は（中国様式と同様）、〔25/26〕三個の「間」chien ないし部分からなる単一の建物であるが、普通特別な長さの区画（図上の C）が背後の壁面に対して設けられている。この家屋はいつも、中国式家屋のように南面して建てられ、張り出したひさし、ときにはベランダが付属する。こうして冬には太陽［の位置］が低いときも家屋の前面は最大限の日光が得られ、夏には太陽が高くなったとき、ひさしないしベランダが直射日光を遮るので室内は涼しい。事実上、家屋前面の全部、つまり地上三、四フィートの高さからほとんどひさしに至るまでは、表面に紙を貼りつけた格子枠の「窓」になっている。紙の部分は巧みに調節されているので、巻き上げることができる。裕福な家屋では、紙を巻き上げたときに虫が入り込まないように、格子の上に蚊帳のような網が貼りつけてあるかも知れない。満洲族とゴルド族の家屋の特異性は〔26/27〕紙が窓枠の外側に貼ってあることであるが、一方中国人の家屋は内側に貼ってある。[31]［とはいえ］マンチュリアに住む中国人は、ほとんど普遍的に地方的慣習に従っている。家屋の建築方法は、中国におけると同様、壁にではなく柱と梁に依存し、従って壁は単に骨組みを埋め塞ぐに過ぎず、屋根を支えることはない。家屋末端の骨組みに関する補足的スケッチ（図 2a）は、棟木を支えるための建築方法を描写する。梁は柱にはめ込まれ、そして縛りつけられるかも知れない。釘は必要としない。細い棒が棟木からひさしにかけて斜めに置かれ、わら葺きの屋根（もっと見栄を張る家屋の場合は瓦葺きの屋根）を支える。スケッチは屋根がどのようにしてベランダまで延長されるかを示している。

壁はどんな素材のものもあるが、断然興味深いのはラハ laha 壁として知られるタイプである。この壁はわら縄で造るのであるが、わら縄は最

初に泥溜まりのなかに完全に固まってしまうまで漬けこむ。このわら縄を一フィートから二フィートほど離れた、二つの薄い壁を造るために編み上げ、それから壁の間の隙間に泥とわら、あるいは泥を浸みこませた渦巻き状の縄を詰め込む。壁の各部分はその末端で柱に固定されるかも知れないが、このタイプの壁は十分に分厚く造ったなら、柱の支えなしで建てることさえできる。私はラハ造りの煙突を実見したことがある。それらは［横断面が］円形で、基部において広い直径を有し、先端へかけて次第に細くなっていた。ラハ造りの煙突を見かけた最南の土地は吉林市付近の満洲族村落であった。察するに、満洲族が三姓から南方へ移動した際、この築造方法をもたらし、それが全然不必要な土地ですら、ときには使用されることもあったのであろう。このタイプの壁を使用する理由は、松花江下流の土手の泥が煉瓦を作るのにきわめて不向きだからである。その泥で作った日干し煉瓦は砕けるのが早すぎるし、焼き煉瓦も粗悪である。その上、すべての村落が湿気を帯びた低地にあるため、その湿気が普通の煉瓦を砕けるのを待たずして腐食させてしまう。しかるに、ラハ壁は最大限水分を吸収した状態でたわんでいるときでさえ、〔27/28〕容易に倒壊しないであろうし、全力で押し返すことで再度平坦にすることも、ときには可能である。富錦およびその一帯の中国人は、ラハ造りを穀物や豆類を貯蔵する倉庫を建てるのに大々的に利用している。中国人たちはラハ造りの倉庫が煉瓦造りや木造よりも優れ、しかも穀物をよりよい通気・乾燥状態に保つといっている。なぜなら、ラハ造りは湿気が容易に浸みこむ反面、蒸発・乾燥するのもたやすいからである。

屋内に入るや、厳密に中国的な家屋からの逸脱が明白となってくる。というのは、ラハ壁の使用はさておき、その主要な相違が室内配置の内容と重要な場所の方位だからである。扉は中央の区分〔A〕へ内側に開くものがひとつあるきりで、それが一種の玄関を形づくる。そこから扉の両面が左右に開き、一方その奥まったところに特別な幅の区分〔C〕へ通ずる開口部（しばしば扉がない）がある。右側の区分〔B〕と屋内のはめ

込み部分〔C〕の本来的な用途が何であったのか、私は知らない。ときに右側の区分〔B〕には、北と南に二つの炕 k'ang〔E〕がある。その場合、この区分は女性の部屋であるか、それともその世帯の息子の一人の家族によって使用されたであろう。ときどき右側の区分〔B〕と奥の区分〔C〕は、どちらも収納場所として利用されるに過ぎず、右側の区分〔B〕で家畜が飼養されることもある。ゴルド族は貧困のために、多分大多数がかつて居住していた建物の片隅で暮らしており、それ以外は荒れるがままに放置されている。そうした家族はつねに西側の区分〔D〕に住みついている。入口の通路に泥ないし煉瓦製の高さ約一フィートの竈（かまど）が一基または二基あり、その上で食事が調理・準備される。竈の上に直径二ないし三フィートの鉄の大鍋がはめ込んであり、そのなかでほとんどすべての調理（茹でる、蒸す、揚げる、そして一種の焼き物さえ）がなされる。竈の熱気は西側の区分〔D〕の炕〔E〕の下を通って、炕を暖めながら、建物の西端に位置する煙突〔K〕から外部へ抜ける。煙突は通常、西北の一角に位置するか面しており、いつも壁の外側にある。このことは朝鮮人の家屋にもあてはまるものと、私は信ずる。中国人の家屋では煙突は壁面に内蔵されるか、壁の内か外で壁面にもたれるようにして建てるか、のいずれかである。満洲族やゴルド族がするように、煙突を家屋の外側に離して配置する本来の理由は、建築物が比較的燃えやすかったために相違ない。今日、マンチュリアの多くの家屋が、中国人の居住するそれですら、煉瓦の煙突、煉瓦の壁、瓦葺きの屋根を備えているときでも、やはり家屋の外側に数フィート離して煙突を配置し続けているのは、慣習の永続性に関する興味深い実例である。吉林省の多くの地方では、煙突は泥の基部に固定した四枚の厚板で造られているに過ぎない。

満洲族とゴルド族が使用する炕〔E〕は、西側の区分ないしは部屋〔D〕の三方をめぐっており、朝鮮人のそれに似た「床面式の炕」［オンドル］から発達したのかも知れない。ところが、厳密に中国的な炕は〔28/29〕部屋の背後に接して前方に面し、部屋の長い方の側面だけを占めるに過ぎない。満洲族とゴルド族にとって、上座〔M〕（ここには祖先の位牌や、と

きには小さな祭壇が安置される）は西側の区分〔D〕の西壁を背にするが、それに反して中国人の上座は東側の部屋〔B〕の北か東の壁を背にする。屋内で行われる通常の儀礼において、シャマンが占める場所〔SH〕は炕の西南方向の一角に位置する。家屋の北の壁の外側、ないしときには西端の壁の外側、またときにはその両方に、シャマンが儀礼で使用する各種の付属品を安置する棚〔F〕が吊り下げてある。家屋西端の西側には、三本のシャマン柱〔G〕（ときには一本しかない）が立ててある。そのなかの一本は特別な儀礼のために、家屋の南側〔H〕に臨時に設置することもあるが、まれにしか常置されない。

建物の単位は南面する三区分からなる家屋である一方で、これを建て増しするには同様の家屋単位を（再び一般的な中国式のプランに倣って）直角に配して建てるのが通常の方法であり、建て増し部分の長軸は南北に走る。もしその上なおも建て増しが必要とされるなら、この設計によって取り囲まれる空間内に、それ以上建物を付加するのではなく、再度同じ設計を反復することによって果されなければならない。

いかなる地位にある家族も、つねに三つの建物を取り囲む壁ないし塀〔Y〕を有する。これはラハ造りかも知れないが、最も一般的なものは図2b に描写したように、直立する丸太にはめ込まれた厚板の塀である。直立する丸太にはしばしば壊れた壺がかぶせてあり、それが雨をはじいて、厚板が差し込まれた溝からの腐食を防ぐのである。壁ないし柵の〔Y〕は南側に開口部がひとつあるきりで、ほとんどつねに横たえた二本の丸太を上に戴く二枚扉の門になっており、すぐさま日本の鳥居を想起させる（図 1）。たとえこの設計がなにに起源しようとも、それが中国の牌楼 p’ai-lou の崩れた輪郭すらもたないように、多分中国起源ではないであろう。この門はマンチュリアの随処と、はるか西方の内モンゴルにまで分布している。中国人はそれに対する名称（中国語で柵欄 cha-lan、満洲語とゴルド語で jalan）を使用し、漢字を当てているが、どうやら満洲語からの借用語のようである。モンゴル人はそれに対して sibege という彼ら自身の用語をもっている。

ゴルド型の倉庫は富錦では滅多に見られないが、拉哈蘇蘇から［下流で］はほとんど普遍的に使用され、中国人も大規模に採用している。恐らく下流地域では土地が富錦附近よりもさらに湿潤だからであろう。倉庫は四本の脚ないし支柱の上に設置された、切り妻屋根付きの小屋であり、地上高く建てられているので、梯子がなければ入ることができない。側壁と屋根は通例厚板でこしらえるが、側壁の一部、そして床面の一部さえも、直径一インチかそれ位の棒で補強した枝編み細工でつくることもある。あらゆる〔29/30〕種類のがらくた、漁労・狩猟用の道具、そしてときにはカヌーさえも、そのような倉庫小屋に保管されているのが見られ、小屋の床下の涼しい日陰には、しばしば魚を吊り下げて干してある。ゴルド族は倉庫小屋を調査されたがっては全然ないようである。倉庫が世帯の守護霊の座と看做される、ということさえあり得る。倉庫小屋が、満洲・朝鮮・中国的類似性をもつ家屋を採用するまで使用されていた古い住居形態の残存である、というのはまったくありそうなことである。

（2）生活の規範

ゴルド族の生活規範について中国人が主に注目するのは、女子が仕事の全部を負担するという事実である。地方によって相違するけれども、華北では概してよほど貧しい家族でない限り、女子が野良に出て働くことはない。マンチュリアの中国人においては、女子は家屋の近くで働き、食事をつくり、それを野良の男たちに届け、ニワトリ、アヒル、ガチョウの世話をし、ブタを飼育する。少女は母親の手伝いをしながら家事を学び、幼い少年は焚き木を集め、年かさの少年は父親を手伝いながら仕事を学ぶ。「ゴルド族は重労働を全部女にさせている」ため、中国人は彼らのことを見下して話すのが習慣になっている。中国人のいうことは真実であり、女たちは料理やすべての家事をこなすばかりか、焚き木集めや、しばしば魚釣りにまで出かけなくてはならない。現在の男たちは大部分がこの上なく怠惰であるが、それは彼らの社会が本来、男たちのす

べてが怠惰である特権を有する社会だったからではない。以前、男たちは明瞭な本分をもっていた。彼らは長期間の狩猟旅行(今なおその多くがしているように）に出かけ、あるいは漁労・交易その他の目的で長い川旅をした。その結果、女たちはキビやその他の穀物の小さな畑の耕作をときたま含む、家事百般ができなくてはならなかった。ゴルド族の地位が現在のそれにまで下落するにつれて、男たちは仕事の大部分を失ってしまった。中国人の入植がその土地の狩猟獣をあらかた追い払ったことにより、長期間遠出する初夏の一シーズン、および秋と初冬の一シーズンを除き、男たちはもはや狩猟することはない。営利目的の漁師としてさえも、彼らは中国人の敵ではない。旧い規範が生き続けていて、もしゴルド族の男たちがその日必要なだけの収獲をあげたとすれば、それで満足してしまうが、一方中国人なら終日漁を続け、最も利の薄い獲物を食用に回し、残りを売りに出すであろう。その結果、いまや男たちはのらくらと時間を空費している。彼らは自分たちのあり余る暇が女たちの仕事を奪うべき理由になるなどと考えないほど、心根が純朴なのである。

（3）農耕

農業がゴルド族の主要な生業であったことはない。松花江下流地域が最初中国人の入植に開放されたとき、〔30/31〕富錦附近のゴルド族には河岸沿いの幅五里（約 1⅔ マイル）におよぶ、最も価値のある細長い土地が割り当てられた。そのなかのきわめて狭小な部分は、依然としてゴルド族の手許に残っている。嘎爾当村には六家族のゴルド族が生き残っているけれども、土地を所有するのは二家族だけだといわれる。約六〇家族のゴルド族を擁する大屯においてすら、土地所有者は事実上皆無である。拉哈蘇蘇付近で私は豊かな農場とこぎれいな家をもつ若い男を見かけた。彼は在理 Ts’ai-li として知られる中国人の秘密宗教結社[32]に加入していたので、阿片・煙草・酒のどれも断っていた。その男は中国人に顔が広く、一般的なゴルド族の標準に対して異彩を放つ例外だと遍く看做されていた。

ゴルド族（の女子であったらしく思われる）によって栽培された最古の穀物は、どうやら一種のキビであったようである。それから造られる一種の粥ないし雑炊は、中国人に「韃子粥」Ta-tse chou として知られ、軽蔑される。このキビは満洲族の間でも重視され、儀式に用いられた。吉林附近に産する特殊な白色の変種は、「貢物」として北京の宮殿に納められ、儀礼の供え物に用いた。

（4）家畜

ウマとウシは明らかに比較的遅れて松花江下流河谷にもたらされ、ゴルド族本来の経済に所属するものではなかった。気候、ことにカとアブの害を伴う蒸し暑い夏の気候が、それらの飼育を困難にしているけれども、ブラシをかけて清潔にしてやることや、鋤き返した後に土地が比較的乾燥することが、ウマとウシの体調改善に大いに役立っている。今日、モンゴル型のポニーが多数、平底船に載せられて松花江を下っている。体格は小さいが屈強なシベリア型のポニーも、アムール河を横切ってもちこまれている。そのうち種ウマと雌ウマの比率がきわめて高く、それは地方的に繁殖させることの有利さを物語る。というのは、ウマが普通かつ安価に供給されるところではどこでも、中国人が自ら多くのウマを繁殖させることはないからである。使用される馬車の型には、二輪の中国型と四輪のロシア型との相違があり、概して後者の方が優勢である。ゴルド族はウマを好み、その扱いと騎乗に巧みである。彼らは主として狩猟旅行にウマを利用し、また中国人が普通にそうするよりも、はるかに「楽しみのために」騎乗するように思われる。

ウシもまた比較的遅くもちこまれたものである。切り開かねばならない、根株だらけの広大な未耕地のせいで、ウシは多くの地域で耕作獣としてウマよりも役に立つ。供給はいまだ需要を下回り、そのため富錦周辺の官憲は価格の高騰を抑制し、耕牛としての使用を促すために、ウシを食用に屠殺することを禁止している。

ヒツジはゴルド経済の一部であったことが一切なく、〔31/32〕松花江

下流沿岸では今日でもきわめてめずらしい。ヒツジにとって、その土地は脚を腐らせるほど湿度が高く、夏は蒸し暑すぎる。

ゴルド族の主要な家畜はブタとイヌであったようである。彼らは家禽やネコももっているが、そのネコでさえ遅れて獲得したものであったかも知れない。というのは、その名称 kêshka がまるでロシア語 koshka からの借用語のように思われるからである[33]。ゴルド族の生活条件下でも容易に飼養できたブタは、松花江下流の気候によく耐え、あまり人手がかからず、しかも大量の肉を供給した。ブタは満洲族におけると同様、ゴルド族においても最も重要な供犠獣であった。医薬的価値をもつような獣肉は別として、いかなる狩猟獣の肉よりもブタ肉は好ましいと看做されている。これは多量の狩猟獣を捕獲できる人々の間では、自然な基準のように思われる。たとえばモンゴル人はカモシカの肉よりも羊肉をはるかに好むが、それはカモシカをしとめるのは娯楽や運の問題であるのに対して、ヒツジは富を意味し、かつ理由もなく屠殺するなどあり得ないからである。私は松花江下流一帯の屋外便所ほど、サナダ虫がはびこり、その体節が蠢いているようなところを見たことがない。だから、この地方のブタ、そして魚も、サナダ虫が寄生しているに違いない。

真のゴルド犬種は現在、不幸にもほとんど残っていない。外見上、ゴルド犬は極地の「ハスキー」種に酷似し、ひと目で中国人やモンゴル人の番犬と区別がつく。この種のイヌは狩猟と橇牽きに利用された。今日、極度に限定された残存犬は狩猟に使用されるに過ぎないが、しかし狩猟は主としてイヌなしで行われる。私が聞いた相異なる曖昧な話から想像すると、狩猟において獲物を探しあてる間、イヌは紐に繋がれ、獲物が手負いになってはじめて放たれ、獲物を追いつめる。イヌは静かに追いかけ、獲物を追いつめたときに咆えるだけだといわれている。良犬はキジを追いつめるだろうと、かつていわれたことを私は聞いた。キジが潜む、しかしイヌが走るのを阻むほど深くはない、低い茂みのある開けた土地では、まったくありそうなことである。東部内モンゴル、熱河北部、マンチュリアの奉天（遼寧）省西部のジェリム盟では、モンゴル人がキジ

狩り用にグレイハウンドを使っている。秋になると、キジは肥えふとり、二回や三回の短い飛行をするには非常に敏捷であるけれども、遠くへ飛ぶことはできなくなる。イヌはキジに狙いをつけると、キジが飛んでいる間、その後を追い続ける。二、三回飛ぶとキジはもう飛び上れなくなり、やがて走り出す。そうなれば、イヌがキジを追いつめるのは比較的容易である。この種の狩りには卓越した速力よりも、知恵と忍耐が重要であり、ゴルド犬がこの方法でキジを捕えてはならないという理由は何もない。しかし、これは明らかに本格的狩猟ではない。ゴルド族はキジが欲しいなら、すべて罠で捕えるから、この方法を特に必要としない。〔32/33〕

いまから八年か一〇年前、中国人が大挙して到来するまでは、松花江沿岸地方では少なくともときどきは、イヌ橇が使用されていた。イヌ橇は依然として優れた冬期の輸送形態であったろうが、それを消滅させたのは明らかに中国人の嘲笑のためであった。その点でゴルド族はかなり傷つきやすい傾向さえある。私はイヌを橇に繋ぐ方法を見せてくれるものを、一人も見つけられなかった。あるものはイヌは主牽き綱に繋がる牽き革に繋ぐといい、他のものは扇状に繋ぐといっていた。[34] 哈義村で私は一台だけであるが、さほど古くないイヌ橇を見かけた。首尾同形で造りが美しく、ほとんどどの木製部分も強度を保持したまま最大限軽くするために、巧みに斜角がつけてあった。一般にいわれるところでは、ハバロフスク地方よりも北方のアムール河では、もはやイヌ橇を見ることはできない。

イヌ橇がかつてゴルド族と満洲族によって日常的に使用されたものの一つであったと、私は信ずる。私自身、最近まで吉林市の子供たちが、冬に凍結した松花江で玩具のイヌ橇に乗って遊んだものだと聞いたことがある。また吉林市付近の満洲族が優勢な村落で、そのような玩具のイヌ橇を見たことがある。玩具のイヌ橇はイヌを一匹しか使用せず、しかも首輪で橇に繋がれるに過ぎなかった。

以前の重要性にもかかわらず、イヌは――「守護霊」をもつにしても

――儀礼において、あるいは犠牲として、なんら重要な位置を占めていないようである。少なくともある満洲族のシャマン儀礼（多分すべての儀礼）では、イヌは儀礼が始まる前に家屋や庭から追い出された。[35] これがゴルド族にもあてはまるのか、私は知らないが、もしあてはまるとすれば、それは多分、橇牽きイヌが実は比較的遅い獲得であるという推側、すなわちゴルド - 満洲族集団はかつてトナカイを有し、それにとって不向きな土地に移動した後、はじめてイヌを使用するようになった、という推側を強固にすると看做されてよかろう。

（5）漁労と河川の航行

ゴルド族がかつて主として河岸に生きる人々であったことは疑問の余地がない。今日、富錦附近およびそれより上流の人びとと、下流（ことに拉哈蘇蘇以下）の人びとの間に、明確な相違がある。漁労は下流の人びとにとっては依然として最も重要な生業であるが、他方富錦ではゴルド族は中国人の従属者になっていて、その主要な生業は狩猟である。ゴルド族は魚網、釣糸、銛を使って、河岸と小舟の両方から漁を行う。ゴルド族によると、冬は江上に張った氷に穴を穿って釣糸を垂れ、また夜間は氷中の穴に松明をかざし、そのきらめく明かりに引き寄せられた魚に銛を打ち込むのだという。その上、ゴルド族はカヌーからも銛を打ち込むのであるが、「その昔」彼らがどのようにしてシラカバ樹皮製のカヌーからチョウザメを銛でしとめたかを、〔33/34〕よく耳にする。銛の頭部は柄に緩くはめ込まれており、大魚に銛を打ち込むと、柄がはずれるようになっている。漁師はカヌーに座って、魚が引き回すままにしておき、魚が疲れきったところで手繰り寄せ、再度銛を打ち込む。カヌーからの銛打ちと氷上の穴からの銛打ちは、どちらも以前は満洲族の間でも一般的であったが、吉林省では今なお忘れられてはいない。

松花江下流で最も一般的な漁法は、そこかしこに釣針のついた釣糸をしかける方法で、少ない人口の割に多量の漁獲があり、かつまた魚網でさらうほど［魚群に］打撃を与えない。

哈義には最も注目すべき漁法がある。アムール河の流れは哈義で河岸に向かって回り込み、同じ地点で広い潟の緩い流れが本流に流出している。緩急の流れがちょうど合流するところで、岩の岬がアムール河に突出し、その周囲全体に深くて強い渦が旋回している。緩流から急流に入ってくる魚はたちまち渦に捉えられ、安定を取り戻す間もなく渦に巻き込まれてしまう。この理想的な地点に、男が三人並んで立つことができる岩棚があり、これこそがゴルド族の漁場である。この場所を中国語で「釣魚台」tiao-yü t'ai と称し、現地の中国人によれば「その小さな高台」は「この韃子の村全体を養っている。」

魚釣りには長さ八から一〇フィートのしなやかな釣竿を使用する。釣糸の末端に鉛の錘がついていて、その底部から返しのある湾曲した三本の釣針が上を向く。餌は全然用いない。魚釣りの方法はいつも同じで、三人の男たち（ときには女も）が例の岩棚に並んで立ち、釣竿を一斉に調子を合せて振り上げ、釣糸を上手の流れに投げ込む。錘が沈む間を置くと、流れの下手へ釣糸を急激に振り、渦のなかを空を切って通過させる。三つ一組の釣針はものすごい速さで渦のなかを引っ張られ、ときおり渦巻きにうろたえた魚を引っかける。釣針が頭部、体側、尾びれのどこに引っかかろうと、釣針の一つがあまりにも深く突き刺さるので、魚は巧みに水中からはじき出され、岩棚の方に振り上げられる。彼らはこの方法で数インチから二フィートに達する魚を釣り上げるのであるが、それ以外の漁法についてあれこれ思い悩むことはないようである。早朝と夕方が魚釣りに最適の時間帯といわれる。もし食事用に魚の持ち合わせがないようなら、世帯の一人が件の「釣魚台」に下りていき、必要なだけ釣ってそれでやめる。普通彼らが一度の釣りにかける時間はしばしば三〇分ほどであるが、釣れなければ時間はもっとかかる。その間中、三人は完全に息を合せ、単調な規則正しさでもって釣糸を上流に振り入れては渦のなかをぐいと引き戻し続けるのである。〔34/35〕

私が三つ一組の釣針がついた風変わりな錘をどこで手に入れるのかと聞くと、返答は「自分たちで作る。そんなものをどこかで売っていただ

ろうか」であった。ゴルド族は釣竿と釣針に巧妙な安全装置を取りつけている。釣糸自体は釣竿の先端に取りつけられているが、特別な長さの釣糸が釣糸本体と、釣竿の先端から一フィートないしそれ以上のところに結びつけられる。こうして重い魚を引っかけた衝撃で釣竿の先端が折れたとしても、釣糸は依然として釣竿の先端よりも下の部分でしっかり固定される。

哈義（街津口 K’ai-chin-k’ou）での釣りは、ゴルド族と中国人の気質的相違をみごとに活写する。哈義村を見渡せる小高い丘（その上に昔の砦の輪郭が見つかる）があり、その高みからいつもは緩慢な水流が流れる潟になっている、アムール河の三本の古い氾濫水路が見える。これらの水路が最も奥まったところには、また水流が東から流れ込む。「釣魚台」の位置する地点でアムール河へ流出するものがこれである。この潟の流れは中国人に「魚梁河」Yü-liang Ho として知られており、梁（やな）をしかけるのに理想的であったから、中国人漁師によって長年利用されてきた。彼らは獲物を大きな生簀に捕えておき、冬に取りだして凍らせ、橇か荷車でアムール河と松花江を遡り市場まで運ぶのである。中国人漁師は梁をしかける「独占権」を主張しており、この権利はあまりにも価値があり過ぎて、満洲王朝時代には解決のために紛争がはるばる北京に持ち込まれたものだといわれている。だから中国人はその地域に一般的に浸透する以前から多年にわたり、大儲けできるこの場所に魅了されてきたに違いない。ところが、その地点に住むゴルド族は、かの「釣魚台」に一度につき何時間か立って、自分たちが消費するのに必要なだけの獲物を得ることで、いつも満足してきたのである。

魚はいつも、冬でさえ、手に入るので、ゴルド族は貯蔵用に魚を干したり凍らせたりするものの、大した量ではない。ゴルド族はまた川べりに一種の小枝細工の籠を備えつけ、そのなかで魚を生きたまま保存することができる。中国人は即座にこのやり方を採用したが、ゴルド族自身は常用するわけではない。ゴルド族はしかけた釣糸で大魚が大量にとれたとき、「高床式」倉庫小屋の床下や家屋のひさしの下など、日陰に吊る

し、少々腐っても気にかけない。中国人はモンゴル人の「羶味児」shan wei'rh（肉の生臭い匂い）でむかつくのとちょうど同じように、ゴルド族の「腥味児」hsing wei'rh（魚の生臭い匂い）で吐き気を催すとこぼしている。

ゴルド族は満洲族と同様、魚を生で食べる。[36] 何種類かの魚はそんな風にして食べるが、絶対に新鮮でなくてはならない。生魚と香草を一緒に和えた一種のサラダは、十分覚悟を決めたときには非常にうまい一品である。松花江下流沿岸の中国人はこの料理を愛好し、〔35/36〕実際は松花江上流の満洲族の間で十分周知されているにもかかわらず、つねに「風土的特色」の一つとして言及する。

ゴルド族は艀（はしけ）や中国人が使用するジャンク（戎克）型の帆船以外に、数種類のカヌーを有する。ゴルド族自身はいかなる種類の本格的な帆も使用しないようであるが、上流へ航行する場合、順風が吹けばどんな間に合わせの帆でも、風をとらえる用が足りるからであろう。しかし、三姓には船首がくさび型に尖り、船尾に小さな「家屋」をもつ風変わりなジャンクがある。それはあたかもゴルド族、満洲族、中国人の影響が一つに組み合わさって、三枚板カヌーから発達したかのように見える。それは軽くて扱いやすく、そして荷船としてよりも漁船として利用されているようである。そうした小型船は満洲王朝時代の河川警備に、少なくとも補助として役立ったかも知れない。

一本の丸太を刳りぬいて造る満洲族タイプのカヌーは、事実上、三姓に達するときまでには消滅し、三姓以下では見られない。私が三姓で見かけたその一つは、ウマの飼い葉桶として利用されていた。[37] それは隔壁（丸太を刳りぬくときに残す）と、吉林周辺の松花江上流に見られるカヌーのような「鼻づら」をもっていた（図 3）。丸太カヌーの欠如は明らかに松花江下流沿岸での適切な材木の稀少さに起因する。大きな丸太は依然として、牡丹江に浮かべたものを三姓で入手できるが、松花江を遠く下ってくると丸太の価格は大きく跳ね上がる。一本丸太のカヌーに取って代った三枚板カヌーは、三枚の板をすべて同じ丸太から切り出し、そうして船尾から船首にかけて均一に細くする。三枚板カヌーは船尾が四角

く、なかには船首も四角いものがあるが、大抵は水上へ「緩やかに傾斜する」船首をもつ（図4）。富錦では三枚板カヌーは、しばしば丸太カヌーを彷彿させるやり方で底板を左右の側板よりも延長させ、「鼻づらを突きださせている」[38]（図5）。これらのカヌーは最も一般的には、男が一人で船首に面して船尾に立ち、十字形のオールで漕いで推進させる（要するに中国式）。ときにはもう一人の男が船尾に面して船首に坐り、一本のオールで西洋式に漕ぐこともある。またさらに船首の男が坐って二本のオールで西洋式に漕ぎ、一方船尾の男は中国式の揺櫓 yao-lo のやり方で、櫓ないし長大な櫂を使って舵をとるかも知れない。平底になった三枚板カヌーの優れた安定性は、それ自体が漕ぐのに適している。丸太カヌーは転覆しやすいにもかかわらず、船尾に立って掉さすのが普通であり、吉林では松花江がそれほど深くないので、この方法で横切ることができる。立った姿勢はそれが銛打ちに便利なところから発達してきたのかも知れない。

丸太カヌーが三枚板カヌーに取って代られる一方、シラカバ樹皮カヌーも別のタイプに席を譲った。シラカバ樹皮カヌーは最早松花江沿岸では見られないが、それを記憶する人たちはいる。彼らによれば、〔36/37〕アムール河とウスリー河ではいまなお見ることができるという。このカヌーは杈で魚を突き刺すときに用い、両端に水かきがついた櫂で漕ぐ。これに取って代ったカヌーは三枚板造りのそれであり、底が一枚板で作られているという意味では平たいが、幅が狭く、しかも船首・船尾に向かってわずかに反り上がっている。船首と船尾は尖り、漁労用の平底船の輪郭をかすかに帯びる。側面は外側に張り出し、一人か二人を乗せる。漕ぐには一人の男が、クロスベンチ［脚部がx字状に交叉した座席］[39]の上ではなく底部にまっすぐに坐り、両端に水かきがついた櫂を使用する。とても転覆しやすいように見えながら、荒天には他のタイプの三枚板カヌーよりも優れるといわている。このカヌーの中国語名を快馬子 k’uai-ma-tze という。丸太カヌーと三枚板カヌーは、どちらも満洲語・ゴルド語の weihu から借用された中国語で威護(wei-huo ないし wei-

hu）と呼ばれる。この名称は丸太カヌーにこそ本来かつ専一にあてはまるように思われる。三枚板カヌーは特に têmchka もしくは têmptka と称され、シラカバ樹皮カヌーは umurchen（また、しかし稀に weihu）と呼ばれる。têmchka と umurchen はどちらも（わけても前者が）快馬子、すなわち船首・船尾同形のカヌーに対して用いられる。

（6）狩猟

狩猟はかつて副次的な生業であったが、いまや主たる現金収入源であり、本格的な生業として漁労を放棄した富錦のゴルド族にとってはことに重要である。しかしながら、ゴルド族はかつて真の遊牧民であったかも知れない。というのは、彼らが狩猟旅行中にいまも使用する一種のティピ［円錐形テント］が、トナカイ・ツングース Reindeer Tungus のそれに類似するからである。狩猟には二つの重要な季節がある。一つは野獣の毛皮が最良の状態にある初冬、もう一つはオオシカの角が「袋角」になる初夏である。ゴルド族はその狩猟を中国人に支配されている。というのは、ゴルド族のもたらすあらゆる高価な毛皮や薬材は、それを買い取る商人たちが浪費を控える習慣をもたないゴルド族狩人にしばしば金銭を貸すことによって、正当な価格よりもはるかに安く手に入れるからである。かつて狩人の一隊がオオシカの角を山のように得て、はるばる牛荘まで出かけ、そこで一団となって写真を撮った。彼らが二度とその試みを繰り返さなかったところからすると、その冒険的企ては成功しなかったか、もしくは狩人たちが持ち金を使い果たしたのかのどちらかである。商人たちは前払い金を高利で貸し付け、掛売りが長続きするように望んだ。商売上の常識のなさが、中国人がゴルド族を軽んずる理由の一つなのであり、「彼らは正直すぎる」と中国人はいう。例え話であるが、その父が背負った借金だと申し立てられた金銭証文に直面したゴルド族は、もし書かれたものなら、それは真実に違いないと信じて、確かめもせずに支払いを引き受けるであろう。「正直」ということばと「愚か」ということばは、ゴルド族やモンゴル人、そしてあらゆる「韃子」

に当てはめられるとき、相互に置き換えたり、一組にして使用される。

狩猟する場合、ゴルド族は遠く南方と東方へ旅をする。彼らの最も〔37/38〕重要な猟場は富錦よりも三姓に近く、牡丹江（ないし瑚爾哈河）が貫流する丘陵地の、手つかずの森林中にある。今日、ゴルド族の多くはそこへ行くのにポニーを用いるが、なかにははるばる徒歩で行くものもある。恐らくオオシカの角は現在、毛皮獣の捕獲よりも価値がある。オオシカの猟期は、大体五月中旬から六月中旬までであり、狩人は普通八人から一〇人の隊列を組んで旅に出るが、女子は同伴しない。彼らが携帯するのは粗挽きの穀粉か小麦粉を少し、料理用の鉄鍋、テント布、蚊帳ないし薄織りの布であり、諸道具を皮袋に入れて運ぶ。猟場に到着すると、キャンプを設営し、その周辺で狩猟を行う。こうしたキャンプを中国語で「窩鋪」（wo-p’o ないし wo-p’u）と称し、「泊まり小屋」もしくは「寝小屋」の意味があり、マンチュリアや東部内モンゴルの地名に多く現れる。窩鋪は現地語の音訳かも知れない。夏の仮小屋は、柱か縄の上に張る、テント状に縫った一片の布であり、両端は開いたままにしておく。両端に料理用の焚火を設け、内部の空間はできるならば、カやハエを防ぐために薄織り布で覆う。また燻し火も焚く。冬の仮小屋は丸太棒を円錐形に組んだティピで、外側をもとはシラカバ樹皮で巻きつけたが、いまは中国製の布が取って代っている。火はティピの内部で焚く。

オオシカをしとめたときは、その頭部全体を切断してキャンプに持ち帰り、それから以下のように処置する。湯を強火ではなく弱火で沸かし続け、これに枝角を放りこんで、とろ火でぐつぐつと煮る。煮終わったとき、枝角は「仕上がった」ことになるが、これは枝角の皮を試すことで判断される。つまり枝角の皮が鞘のように緩みだすと、角は仕上がったことになる。角には血が詰まっているけれども、この調理を通じて全面的に白くなるといわれている。しかし、実際には皮だけが白くなるのかも知れない。ついで残り火にかざして、ゆっくりと、しかし徹底的に乾燥させる。そうして枝角は相当期間傷む心配がなくなり、持ち帰るために注意深く包装する。「袋角」を破損や損傷から守ることに、細心の注

意が払われる。

オオシカの頭部はどんなものでも一〇〇ドルから一〇〇〇ドル以上、あるいは二〇〇〇ドルにおよぶ価値さえある。非常に良いものは実に七〇〇ないし八〇〇ドルの値段で売られ、立派なものは一〇〇〇ドル以上の値がつく。富錦のゴルド族のいうところでは、猟期中の獲物の総量は五〇頭におよぶであろう。中国人商人の話では、富錦地方の総数は五〇～七〇頭に達するということであり、彼は一〇年前には六〇〇～七〇〇頭であったと付け加えた。この「血の角」もしくはオオシカの袋角は、最も強力な「熱い」薬の一つと看做されているので、血が「冷たい」人用の強壮剤を製造するのに役立ち、老人や性的不能、倦怠感に悩む人々に広く利用される。「乾いた」もしくは成熟したオオシカの角も薬としての価値をもち、一斤（1⅓ ポンド）当り約三ドルの値段である。それを準備する方法は〔38/39〕、きれいに削り、それを煮てゼリー状または膠状にする、というものである。これを鹿角膏 lu-chiao kao と呼ぶ。鹿角膏は調合薬の一成分として用い、どうやらそれ自体を薬として用いるのではないらしい。アカシカの雌も子宮内の腹子を取るためにしとめられるけれども、オオシカの種がアカシカよりも絶滅に瀕していないのは不思議である。オオシカの腹子は満洲王朝時代には八から一〇両の値でしか売れなかったものであるが、いまでは七〇から八〇ドルの価値がある。これはもっぱら「婦人用」に使用され、ある韃子は月経期間中にそれを順調にする効果があるといっていた。

いま一つの夏期における「狩猟」は、人参 gingseng を目的とするそれで、これまた「熱い」薬であり、「血の角」よりも強力で、より一般的に使用される。人参は古い漢方薬の王座にあり、あらゆる強壮剤の頂点にランクされる。他の一切の方法が失敗に終わったときでも、人参は死地にある人間を蘇生させ、生命を長らえさせる。この植物の価値は形状、巻ひげや根の数、それらのパターンなどによって大きく左右されるので、人参の仕入れ商人はその鑑定家でもある。野生人参は栽培ものよりもはるかに価値が高く、なかでもマンチュリア産、特に満洲族の聖域である

長白山に生育したそれが最高とされている。人参は人に類する性質（事実、その中国語名称「人参」jen-shen が仄めかすように）をもつと信じられ、いわば家族や部族をなして生えるといわれる。人参の一家族全体が、家長的な「祖先」を伴って発見されたとき、後者は信じられないほどの価値をもつ。満洲王朝時代以前の中国においても、まったく同様に人参が尊重されたのか、私は知らないが、少なくとも唐代には早くも朝貢品目の一つであった。確かに満洲王朝のもとで人参は帝室による特別な種類の愛顧を享受し、その採集と分配も帝室の監視下にあった。中国人にとって人参の価値がどうであろうと、それとは別個に満洲族にとって大きな価値をもっていたに相違ない。太汗爺（ヌルハチ）は伝説によると、若いころ人参採りであった。『東華続録』（第一套・第一巻・二一葉 a）の一五七五年に対応する日付に、それ以前満洲族は人参を保存する方法を知らなかったという記述がある。明の商人は人参が傷んでしまうのを恐れるかのように装い、いやいや買い取るふりをした。満洲族はそれで人参を早く売ろうと気を揉み、安値で処分してしまった。ヌルハチは満洲族に、人参をまず煮て、それから乾燥させることによって商売用に保存する方法を教えた。この状態で人参はよく保存され、満洲族は売り急ぐ必要なしに、より大きな利益を得られるようになった。[40] 今日、人参採集は満洲族やゴルド族に限られないが、多分探し出し、採集する方法は部族時代から変化しないままであろう。採集者は一団となって作業し、手に手に中国語で索倫杆子 so-lo kan-tze と呼ばれる棒を[41]もつ。中国語要素の杆子は「棒」を意味し、solo は満洲語 soro の中国語的な訛りで、ゴルド語では〔39/40〕ときに soro、ときに toro と発音される。この単語は「シャマン柱」としても使用されるが、その実、この柱に関する満洲族の最も普通の説明は、「それはヌルハチの人参棒を記念する[42]」というものである。採集者は並んで作業するのであるが、各人は自分の前で棒を弧状に振り、人参を求めて草むらに身をかがめる（その棒がなにか「予知棒」のような能力をもつと考えられていないのか、私はしばしば不思議に思ったが、それを確認することはまったくできなかった）。各人の形作る円弧は左右の採集者のそ

れと重なりあう。彼らが草地または林間の空き地を通過した際、貴重な人参を一つも見逃さないように、反転してそこを引き返す。人参を見つけたとき、採集者は棒槌 pang-ch’ui（しばしば pang-ts’ui と発音される）[43]と大声で叫ぶ。これはマンチュリアにおける人参に対する断然一般的な俗称であり、文字どおりには「棍棒」、「打つか叩くための短い棒」を意味する。この俗称は人参という正式な名称の使用に対する敬意のこもった忌避を暗示するのかも知れない。人参を見つけた採集者はそこにうずくまり、それ以上何の貢献もしない。他の採集者たちが根（二股に分かれている）を、巻ひげの損傷を避けるべく細心の注意を払って掘り出すのだが、彼らはこの目的のために骨製か木製の特別な道具を使用する。鉄製の道具は「人参を傷つける恐れがある」ので決して使わない。人参採集の季節は開花期の六月と七月（大体太陽暦の七月から八月）である。良質の人参たる基準とは、根がほっそりとして、しかし際立った輪ないしコブ、そして年齢を示す密で細かい木目がなければならない。マンチュリアには、七オンスの人参は「人参」（良質で成熟した人参）であるが、八オンスのそれは「財宝」である、という趣旨で引用される俗諺（中国語）が流布している。

冬期の狩猟は主に毛皮を目的とし、その最も高価なものはクロテンである。毛皮獣は普通罠で捕える。ゴルド族は管状の網になった、巧妙なクロテン用の罠を有する。これを数個の木か竹の小さな輪に据えつけるが、輪に固定することはしない。餌は管状網の奥に置く。クロテンが管状網に入り込むと、誤って輪にぶつかるか、網を破かない限り、向きを変えることも、ぎこちなく身動きすることもできない。ノロジカはオオシカのように四季を通じて狩猟され、イノシシと同じく衣料用の毛皮を大量に供給する。冬の毛皮は暖かく、良質の靴下や長衣になるが、毛足は厚くて下毛を備えるにせよ、はなはだ脆く、衣服としては通常わずか一冬しかもたない。夏の毛皮は毛が薄くて下毛もないが、衣類にはより適している。上着、ズボン、脛当て等は、しばしば毛を取り去った鞣し革でつくる。

トラは事実上、狩猟されることは決してないようである。きわめて恐ろしいと看做されながら、いかなる宗教的な先入観によっても保護されていないらしい。[44]ときにはシャマンとの関係で言及されることもあるが、〔40/41〕トラは一般的なシャマン霊でもなく、それと関連した、いかなる特別な儀礼ももってはいないようである。

かつて高度に発達したクマ狩りの技術があったものの、今日では事実上廃れている。恐らく火器の使用と、進行するクマの減少が、古風なクマ狩りを廃滅させた主因であろう。[45]クマは槍でしとめる。槍は狩人にとって弓矢を使うより安全であっただろう。なぜなら、クマは突進して来るように挑発しなければならないけれども、槍ならば狩人は足場を選ぶよりよい機会が得られるからであり、しかも矢でクマを手負いにして狂わんばかりに激怒させるよりも危険ではなく、さらに槍は矢よりも容易にクマの突進を阻止できるからである。どの程度までクマ狩りが儀礼であったのか、私は知らない。多分、クマはかつて現在よりもはるかに高い儀礼的重要性をもったであろう。私の情報提供者の多くは、私に話したいと思ったよりもはるかに多くのことを知っていたと確信している。ゴルド族はかつての「野蛮な」慣習を中国人に嘲笑されてきたので、この話題には非常に敏感なように思われる。確かにクマ狩りは大部分形式化され、クマをしとめる際の最も重要な美点は独力で倒すことであった。私は一度クマ狩りをする狩人が「片手に太鼓、片手に槍をもって」森に入ったと聞いたことがあり、またつぎのようなことも聞いた。

> 以前、槍は必要であった。その頃クマはきわめて危険であったからだ。我々の先人には火縄銃しかなかった。それは発射するのが遅く、かつ不確かであり、槍はもっと優れていた。クマはクマとトラ以外に誰を恐れたであろうか。

クマを見つけたとき、狩人はなるだけクマが後足で立ち上がって攻撃するよう挑発しなければならなかった。そのとき狩人は有利となった。彼は槍の石突きを地面に据え、突進してきたときにクマを串刺しにするのである。[46]

私は以前、槍の刀身だけを見たことがあるが、柄に取りつけた槍は見たことはまったくない。明らかに柄はほとんど重要ではなく、必要とするときにはめ込むことができた。ところが、槍の刀身は木製の鞘にしまい、鞘は革で包む。鞘は見たところ生皮を着せて縫いあげ、乾燥するにつれてきつくち縮まってゆくに任せる。槍の鞘は先端に一風変わったつまみないしボタンがついていて（図 6）、それはいくぶんかは刀身の切っ先の保護を目的とするかも知れないが、またクマの鼻づらの様式化された象徴かも知れない。槍の刀身は見事な出来栄えで、しばしば一種の波紋状の細工が象嵌されている。刀身の最も高度に特殊化した細部は、その明瞭な湾曲であり、かすかにスプーンの形状を思わせる。クマの突進を受け止めるべく地面に据えられたとき、槍は大体四五度の角度で支えられる。そのとき刀身の湾曲は槍をクマの頭蓋基部に向かう喉（ここがつねに狙われる）へ反らせることになり、かくしてクマを食い止め、上方と後方へ突き上げる。ゴルド族による説明では〔41/42〕、平たい槍は下へ反らせるかも知れず、その場合クマはたとえ致命的な深手を負ったとしても、前と下へ倒れこみ、狩人に達して彼を殺すかも知れない。

かりに私がトナカイとカンダハン（漢達韓 han-te-han・堪達漢 kan-ta-han の二様の中国語形名称で呼ばれる動物）とを同一視することが正しいとすれば、トナカイは知られているようであるが、狩りの対象とはされない。カンダハンのことを私は会話のなかでは聞いたことがない。どちらの中国語形も『吉林通志』に見られ、詩的な記述において水面を泳ぐ力強さを称賛されている。[47] そのモンゴル語名称を handahan という。この動物は「ハバロフスクあたりから」やってくるといわれている。その角も薬材に適しているが、オオシカの場合には「熱い」薬になる角がトナカイでは「冷たい」薬になる。膝まで達するモカシンのブーツは毛を外側にしたトナカイの皮で作られ、富錦やハルビンでさえ売られている。ゴルド族はトナカイに対して toki という名称ももっていて、彼らによれば、自分たちは決してトナカイを使役しないが、「ツングースはそれをもっており、ここからはるか遠方にいる」という。

（7）衣服と器具

今日のゴルド族は、特に男性が中国風のそれを主とする混合的な衣服を着用し、通常ひどく傷んで汚れている。ゴルド族は外国のフェルト帽にはっきりとした好みをもつ。目に入る古風な衣服の主要な細目は、モカシン靴（恐らく大半が身に着ける）、それから仕立ては中国風であるが乗馬するのに便利なように、裾が前後に分かれていることで見分けがつく長い上衣（かつては満洲族でも一般的であった）である。前後に分かれた裾はボタンどめの飾り紐で合わせることができる。普通ウシの生皮でつくる古風な満洲仕立てのモカシン靴は、冬期、マンチュリアの全域で中国人がよく履いている。ゴルド風のモカシン靴は仕立てがわずかに異なるが、現在満洲風のモカシン靴に使用される皮革の方がはるかに堅いため、違いは実際よりも明瞭かも知れない。ゴルド風のモカシン靴の甲皮はくるぶしの上数インチに達する。モカシン靴全体は革製かも知れないが、夏型は普通革の靴底と布の甲皮をもち、後者の表面に伝統的な花模様が、しばしばミシンで細工してある。モカシン靴はまたイノシシ革の靴底とノロジカ革の甲皮をもつかも知れない。全体を魚皮でつくったモカシン靴や、魚皮の靴底をもつそれは、いまや昔ほど一般的ではない。私の想像するに、ゴルド族がこの素材を使用することで嘲笑されてきたからであろう。にもかかわらず、魚皮は優秀な素材だと広く一般に主張されている。というのも、雪上でも滑らず、他のどんな皮革よりも溶けかけた雪や氷の上での防水性に優れるからである。冬期、毛を内側にしたノロジカの冬毛皮の靴下を履くのが普通である。またモカシン靴にウラ wula 草を詰めることもよくあり、毛皮の靴下とまったく同じというわけではないにせよ、とても暖かい。満洲族もこのウラ草を利用し、彼らから中国人に伝わって、〔42/43〕マンチュリア全体に普及している。中国人はモカシン靴をもウラと呼ぶが、それは満洲語名称かも知れないし、そうでないかも知れない。恐らく、ウラという名称は「大河」を意味する満洲語 wula に由来する。つまり、この草は川の岸辺（ないし湿地）に生えるが故にウラと呼ばれ、かつまたモカシン靴はウラ草が詰め込まれるか

らこそ、ウラと称されるのであろう。[48] ゴルド語でモカシン靴は unta ないし wunta といい、ウラ草は hairhta という。ウラ草には三種類が認められ、一つは「緑色」、一つは「赤色」、もう一つは「楕円」（すなわち断面において）である。ウラ草を準備するには、木の台の上で木槌でもってほつれるように打ちたたく。モカシン靴のなかにほどよく詰めこむと、ウラ草は鳥の巣状になる。冬には、数日間もモカシン靴を脱がず、履いたきりのことがしばしばある。

冬に狩猟するとき、ゴルド族は尻の部分のないズボン、と描写するのが最も適切な衣服を着る。それは実際上、ズボンの足のような、だぶだぶの脛当てであり、ズボンの上からはいて、ベルトから紐で吊り下げる。中国人もこの種の作業ズボン、套褲 t'ao-k'u をもっている。ゴルド族はこの脛当てを毛を外にしたノロジカの皮でつくる。普通、ゴルド族も中国人やモンゴル人がするように、暖かさのために毛を内にした全面毛皮の衣類を着用する。［しかるに］脛当てを毛を外に向けて着用するのは、彼らの言によれば、雪上で獲物に忍び寄るとき、膝でたやすく前方へ滑っていけるからである。

ゴルド族は満洲人やモンゴル人と同じく、とりわけ盛装するときにしばしば、右側でボタンをかける一種の袖なし上着ないしベストを着るのが習慣であって、バトゥル batur（英雄）上着と称する。この着衣は中国においては馬褂 ma-kua、「乗馬用の上着」として知られ、普段に着用するが、伝統的に「北方蛮族」によってもたらされたと推測されている。

冬期、ことに狩猟旅行の際、ゴルド族はノロジカの冬毛皮でつくった、毛を内にした帽子をかぶる。それはしばしば内外どちら側も毛皮でつくってあり、形はまるく、多くの場合折り返すか、耳を保護するために引き下げることができる縁がつけられている。縁はときとして羊皮製のこともある。

非常に少数のゴルド族、ほとんどは老人であるが、はいまなお辮髪を結っている。女たちは吉林満洲族の髪型（多分中国風に修正された）のいくつかを彷彿させる仕方で髪を結う。満洲族の女たちは、辛亥革命以前の

北京を記憶する人々によって信じられるであろうように、たった一つの髪型しかもたないわけではない。さまざまな時代に北京で流行し、マンチュリアに持ち込まれたといわれる多くの髪型が、吉林の古風な満洲族の村落ではいまなお見かけられる。ゴルド族の女たちは現在、中国風の衣服を着用するが、ときおり旧い満洲族風の刺繍を施した袖紐、あるいは縁が〔43/44〕その外見に色彩のきらめきとジプシーの手際をのぞかせる。女たちはすべての衣類をつくり、裁縫とミシンがけに巧みである。ミシンはゴルド族が余分の現金があるときに買い求めた、数少ない有用なもののひとつであり、女たちはそれを使って模様を縫いつけることさえできる。革の衣類を縫うにはノロジカの腱を用いる。

屋内で使用する道具は、二つの明確な範疇に分類される。狩猟と野営に関連するものは、材質と形態がほとんど中国的ではない。木製やシラカバ樹皮製の多くの小物もこの範疇に属する。宗教的な諸道具一式は、部族的なそれと中国人からの借用物（たとえば廟とか、白鑞（しろめ）の壺のような祭壇の装飾や神々の画像）の混合である。ある日、ゴルド族の家で金朝とゴルド族の祖先の「敵」である岳飛について話していたとき、一人の男が壁にかかった派手な色彩の絵を指さしながら「そこ、それがその一つだ」といった。そこに、中国人の伝説的英雄たちとともに岳飛がいた。

ほとんどの宗教的、シャマニズム的儀式において、ゴルド族は現在、中国の便利で安価な線香を使用する。にもかかわらず、きわめて重要な場合、ことに祖先崇拝と新年の儀礼には、満洲族と共有する彼ら自身の香（中国人はこれを「韃子香」か「年の終わり」と呼ぶ）を用いる。この香は険しい崖に高く成長するといわれる香木を原料とし、これを乾燥させ粉末にして作る。香を焚くには、香の粉末をのせる浅い溝を彫った木板を用いる。香は溝の一端から反対側の一端へと燃えるだろうといわれている。

ほとんどどの家でも見られるものは、木炭を燃やす一種の火鉢である。これは暖を取るために使用され、料理用ではない。火鉢が炕の採用以前に使用されたのでなければ、私はその中国起源を信じない。火鉢は陶製か金属製であり、持ち運び可能な折りたたみ式の四本足の台に据えて、

普通は炕の縁に置き、そこで胡坐をかきながら、上に手をかざして暖を取ることができる。ときにはそれを取り囲むシラカバ樹皮の、一種の「えり」をもつことがある。満洲族は彼らの行くところならどこでも、中国領トルキスタン（そこで私は古い青銅製の見事な標本を見たことがある）にさえ、この火鉢を携えていく。北京の満洲族でさえ、火鉢は中国的であるよりは満洲的だという。

ゴルド族は中国北辺のすべての隣族（ただし中国人を除いて）と同様に、揺籃を使用する。マンチュリアの中国人は大いに揺籃を採用しており、四行連句の形式で地方地方の特色を描写した、おびただしい中国押韻詩の一つは、マンチュリアの一風物詩として揺籃に言及する。いまやゴルド族は大抵売り物の揺籃を使用しており、それは赤く塗装して金色の中国的な模様をつけてあり、しばしば幸福を願って古い銅銭と着色ビーズを通した紐で吊り下げる。〔44/45〕中国人が厚板を蒸気で柔らかくし、型にはめて作ったこれらの揺籃でさえ、本来はシラカバ樹皮でできていたことを示唆する。揺籃は地面に置くか（そのときにはかすかに凸面状の底部が、揺籃を横方向ではなく縦方向に揺らす）、もしくは吊り下げることができる。きわめて一般的に母親はむずがる赤ん坊を揺籃に入れて、垂木から吊り下げてあやす。それから母親は前腕を揺籃にのせて屈んだ姿勢で立ち、いつもするように揺籃を揺らす、というよりは振り動かしながら授乳する。

ゴルド族はライフル銃で狩猟する。それらは修繕がきかないほど破損したときでも捨てないので、どの家も数丁はもっているようである。彼らは少数の先込め式火縄銃と雷管式マスケット銃ももっているが、これらはほとんど使用しない。また中国の警察隊や辺鄙な地方の軍隊でいまだにときおり見られる、時代遅れの単発式ライフルを使用し、ロシアの旧式な「スリーライン」（3-line）ライフルももっている。射撃する際、ゴルド族はほとんどつねに台架を使用する。それは非常に単純な形態で、モンゴル式のそれがライフル銃自体に取り付けられ、使用しないときはライフルに沿って折り畳んでおくのとは異なる。モンゴル人が平原や樹

木の少ない丘陵で狩猟するときには、ほとんどいつも寝転ぶか、うずくまった姿勢から射撃する。ゴルド族は森林のなかで狩猟するとき、跪いたり寝転んだりするのと同じくらい、直立した高さからでもうまく射撃できる台架を必要とする。台架はライフルに取り付けられておらず、[形状がコンパスのような] 二本の木製部品からなる。それらはしばしば申し分なく滑らかで斜角がつけてあり、高さに合わせてどの間隔にも開くことができるよう釘かボルトで固定されている。台架を運ぶために、ライフル銃の吊り革ないし吊り帯には、両端に環がつけてある。台架を開いて一方の脚を上の環に通して両脚を閉じ、下の環に刺し通す。こうして、ライフルがつねに銃口を上に向けて運ばれる限り、台架は完全に閉じられ、にもかかわらず使用するためにすばやく引き出すことができる。

スキーは、古くなって捨てられたのが家の周囲に横たわっているのを私は見たことがあるけれども、今日狩猟旅行以外にはほとんど使用されないようである。私はカンジキも、皮で包まれたスキーも見たことがなく、そしてゴルド族が皮をスキーの裏面に貼ることもないと聞いた。以下の説明は大体真実だと思われる。

> 我々は雪が異常に深くない限り、ここ（すなわち河の沿岸）ではスキーをそれほど使わない。我々は狩猟に出かけるときに、たまにスキーを使う。スキーは必要に応じて作り、使い終れば投げ捨てる。

興味深いことに、スキーには二つの用語がある。富錦では満洲語とされる kiachki（ときには karchki）[49] がむしろより一般的であるが、松花江の下流では kingli という用語を使う。哈義で私が kiachki という用語を使ったとき、最初は理解してもらえなかった。富錦にもどって〔45/46〕kingli を試したところ、誰かが「この人は kiachki のことを指している」というまで、人々は途方に暮れていた。中国語の同義語は踏板鞋 t’a-pan hsieh である。私の思うに、この用語（私はその漢字表記を見たことがない）の pan という要素は「板」を意味する漢字で書かれるのであろう。この用語はあたかも非中国語の音訳であるかのようだが、どの言語からの音訳なのか私は知らない。それは正確には「スキー」であるよりは、むし

ろ「カンジキ」を意味する用語に由来したのであろうが、pan という発音が「板」に聞こえるために、中国人は「スキー」に対して使用している。〔46/47〕

Ⅵ. 社会構成[50]

部族組織が比較的弱体であったゴルド族は、自らを言語と生活様式において同一であるが、いかなる部族的首長ももたない、ばらばらの人々と看做している。そして、たとえ彼らの有した部族組織が何であろうと、ゴルド族が満洲族に併合され、八旗に編成されたときに消滅した。この八旗は主として地域的な動員単位であり、副次的にのみ世襲的であった。主に自らの地方的事務を管掌する氏族や村落の範囲外で、八旗は政府にとって必要とされるあらゆる枠組みを提供した。

他方、氏族 clan は依然として最も重要な単位である。氏族はほとんど、もしくはまったく地域との結合関係を帯びず、氏族の成員は各々異なった村落に散居する。にもかかわらず、氏族名には場所的な含意をもつものが見出される。二つの氏族名をもつ氏族もあるが、恐らくいずれの場合も、一つが「真」の氏族名であり、他は地域との関連性をもつように思われる。家族は名称をもたず、しかも氏族名は（かつての満洲族と同じく）公式にのみ使用され、中国人の姓氏（一種の氏族名）のように一般に使用されることはない。婚姻は外婚的であり、それは「同じ名称をもつものは結婚してはならない」（中国人のいう「同姓不婚」）という決まり文句で表現されるに過ぎない。ゴルド族における大きな社会秩序の混乱と人口の減少によって、最も大きな人口を抱える氏族の成員は他の氏族から娶るべき妻が欠乏しているため、血縁関係が近くない限り、今日、氏族内部で通婚することが間々ある（同様の認可は張・李・王などといったごく一般的な姓氏の場合、中国でも知られていないわけではない）。

以下は私が収集した氏族名のすべてであり、多分富錦からアムール河にかけて残存している氏族名の大多数であろう。[51]

① Birdaki・漢姓「畢」Pi：bira（小さな川）という用語と関連するといわれる。かりにこれが正しいとすれば、他にも氏族名があるのかも知れない。

② Futar・漢姓「富」Fu：Maranka とも称する。後者はアムール河畔の一地名に由来するといわれる。この氏族のほとんどは富錦に見出され、自分たちを Futar よりはむしろ　Maranka と呼ぶが、それは彼らの一集団が一緒に富錦に移動したことを示唆するであろう。下流地方にいるこの氏族の成員は Maranka ではなく、Futar と自称する。その漢姓を「富」といい、この漢姓を帯びる人々が彼らの氏族名を Maranka と称することを通じて、私は二重名称を発見した。

③ Gekir・漢姓「葛」Ko

④ Kilen・漢姓「尤」Yu：ゴルド姓と漢姓が音韻的に類似性を欠くことは、他にもう一つの氏族名が存在することを示唆するが、私はそれを見つけ出せなかった。

⑤ Kumara・漢姓「何」Ho：この漢姓は多分、第一音節 Ku の対音かも知れないが、一層ありそうなのは他に代るべき氏族名との関連である。〔47/48〕

⑥ Luir・漢姓「陸」Lu

⑦ Mengjir・漢姓「孟」Meng

⑧ Shimuru・漢姓「蘇」Su：漢姓は恐らく“Shi”の対音であろう。

⑨ Udingke・漢姓「烏」Wu

今日、便宜上漢姓を名乗っているゴルド族の多くは、氏族名ではなく個人名の同音漢字を使用する。これにより Birdaki 氏族の男は自らを「畢氏」ではなく、「張氏」と称するかも知れない。同様のことが満洲族が中国化していく過程できわめて広範に生じたし、[52] モンゴル人でも生じている。これら三民族すべてに共通する根底的な要因、あるいは諸要因の一つは、恐らく公的に氏族名を濫用すべきではないという感覚であろう。私が理解するところでは、満洲王朝時代、個人の公的な経歴の記録は、

個人名、旗分、固山 Gushan［＝グサ Gūsa］、牛彔 Niru、以前に任命された官職、賞罰等々、そして最後に記録の末尾に「何々氏族の」として残された（固山と牛彔は八旗の下位区分であり、北京ではどの旗分にも満洲・蒙古・漢軍三種類のグサがあった）。ちょっとした知り合いでは、互いの氏族名をまったく知らないこともしばしばあったであろう。

富錦における最大の氏族は、Maranka および Kilen である。

氏族はそれぞれ「始祖」を有するけれども、氏族長の世襲的地位に関しては、いかなる痕跡もないように思われる。ゴルド族によれば、特別な機会に相当大規模な氏族集会が開かれるのがつねで、その際は普通、血統的に上位世代に属する人々の代表者が司会したという。地位のある家族はつねに、満洲人や中国人がしたように、出生、結婚、死亡を記録［＝家譜］に残した。

家族、氏族ではなく、の理想は、満洲族や中国人のそれに類似する。つまり、息子たち、孫息子たち、そして曾孫息子たちさえも共住するような、あり得る最大の集団である。そのような大集団が最終的に分裂するとき、新たに独立した諸家族は徐々に互いを親族と呼ばなくなるが、依然として同一氏族の成員であることに変わりはない。しかし、家族から婚出する女性は、氏族からも婚出するので、またまた中国におけると同様、その子供たちは家族の名簿［＝家譜］に何の記録も残らない。

婚姻や葬礼といった事柄を話し合う場合、ゴルド族は「野蛮人」と嘲笑されそうな何かを暴露しはしまいかと恐れて、詳細に説明するのを極度に嫌う。ゴルド族は自分たちの慣習を「満洲族や中国人」のそれと同じだと出張する。それはまさに順序として、満洲族がその慣習を中国人のそれと「厳密に同じだ」と主張するのと同じである。実際、ゴルド族の諸慣習は起源的に何であれ、満洲族のそれによって分厚く覆われたに相違なく、順序として中国人の慣習の分厚い覆いを伴った。かくして、結婚は媒酌人によって段取りされる。〔48/49〕花嫁を迎えに来るのは花婿の家族であり、送って行くのは花嫁自身の家族である。婚礼が行われるが、その式典の本質的な部分は夫の家族と氏族への加入であり、花嫁

が花婿とともに後者の祖先を公けに「敬う」(実際上、「礼拝する」よりは「感謝する」) ときに顕著となる。結婚後間もなく、花嫁は実家に里帰りをする。それ以後、花嫁と実家の最も重要な関係は、彼女の母の兄弟が彼女とその子供の双方に一種の権威を及ぼすことである。華北の旧慣によれば、親不孝のために父母から勘当された息子は死刑を免れないが、もし母の兄弟が仲裁してくれるなら、助命されるであろう。[53] これが厳密に中国人の慣習なのか、それとも満洲帝国建設後に承認されたものなのか、私は知らない。

主として氏族名による親族関係の決定、および女子が結婚によって自分の氏族を去るという事実は、イトコ婚に興味深い制限を課す。つまり、血縁関係の濃さは同等であるにもかかわらず、兄弟の子供たちは同じ氏族名をもつがゆえに、結婚してはならない。一方、姉妹の子供たちは異なる氏族名をもつがゆえに、結婚してもよい。[54] また、イトコ婚には、以下のような付加的制限もある。

女子は母の兄弟の息子と結婚してはならない。「なぜなら、そうすることで彼女の母が出自する氏族へ、母の血液をいくらかは持ち帰るからである。」他方、男子は母の兄弟の娘と結婚してもよい。「なぜなら、かくしてすでに彼の血液に寄与した母の氏族は、同じ血統の新鮮な血液を彼の子供たちに提供するに過ぎないからである。」換言すれば、所与の二氏族間に関しては、一方通行の婚姻しかあり得ないはずである。ここから推論するなら、男子は父の姉妹の娘と結婚してはならない (無論、[同じ] 氏族名のために、父の兄弟の娘とは結婚できない)。なぜなら、その娘の母は男子が属する氏族から婚出しており、彼女の血液を持ち帰ってはならないからである。しかし、女子は父の姉妹の息子と結婚してもよい。なぜなら、彼女と彼女の父の姉妹はともに同一の氏族から婚出し、同一の氏族へ婚入すると考えられるからである。[55]

これらの規則は疑いなく中国人のそれであるが、[56] 満洲族とゴルド族によっても同じく、自分たちのものだと主張されている。しかし、私にとって下記の伝説は、女子の血液を自分の婚出した氏族へ「持ち帰る」こと

を許す、婚姻規則上の相違がかつてあったことを示唆するように思われる。

母の兄弟に関して、現地の中国人から繰り返し聞いたところでは、ゴルド族の習慣によると、少女はまず母の兄弟に〔49/50〕結婚の申込みがなされなくてはならず、彼が拒否した場合に限って、誰でも彼女に求婚することができる。最終的に私は、その理由を説明する下記の話を、さまざまなゴルド族の村落に配属され、彼らについては何でも知っていると主張する警官から聞いた。もっとも、彼の情報のほとんどは、多数の非中国人部族にあてはまる話のありきたりな蘊蓄の一部であったけれども。

> 昔、ある女が夫と一緒に狩りに出かけた。夫が猟に出ている間に、女はクマにさらわれた。クマは女に危害を加えなかったが、岩間の洞穴に連れ去り、自分の妻にした。クマは毎日出かけて、彼女のために食べ物を持ち帰り、彼女を大切に扱った。やがて娘が生まれた。娘が十代になったある日、狩人が洞穴にやってきた。男と娘の母親は互いに訝しく思い、名前や生まれたところ、親類の名前を尋ね、兄と妹であることが分かった。そこで男は「お前と娘は私と一緒に立ち去るのだ」といったが、女は「そんなことをする勇気はありません。クマが追いかけてきて私たちを殺すでしょう。まずクマを殺さねばなりません」といった。しかし、男は「クマを殺すのは容易ならぬことだ。クマが帰ってくる前に逃げる方がましだ」といったが、女は「クマは私たちよりも速く走れるのですよ。ここでクマを撃ち殺すのに越したことはありません。クマがいつも通る帰り道を教えてあげます。だからそこに銃（原語のまま）を据えて待ち伏せ、よく狙って一発でしとめるのです」と答えた。それで、男は銃を茂みに据えて準備を整え、正確に狙いをつけて、クマが戻って来たところを一発で撃ち殺した。そうして男と母娘はそこを立ち去り、男は娘を妻に娶った。そのとき以来、少女が年頃になると、母の兄弟が最初の優先権をもち、彼が拒否した後でのみ、少女は他人に嫁ぐ

ことができるのだ。[57]

別の機会にある中国人が私に語ったところでは、「知っているか。韃子はいつも母の兄弟に娘をもらってくれと申し込むんだ。というのも、母方だけが人間の血筋で、彼らの（父方の）先祖はクマだからなんだ」とのことであったが、話の全体を聞かせてくれなかった。この物語と関連して留意しなければならないのは、中国人によって語られているので、恐らくはゴルド族［だけ？］にではなく、ギリヤークや何か他の部族（すべて「魚皮韃子」として一括分類される）に、当然のことながらあてはまるだろう、ということである。ゴルド族自身は私が直接問いただしたとき、最初に母の兄弟に少女との結婚を申し込むことも、クマに出自することも否定したばかりでなく、いかなる話も引き出すことができなかった。とはいえ、ゴルド族がその話題に関して、単に口を閉ざしていただけかも知れない。彼らはまたいかなる特別なクマ祭り bear ceremony も否定したが、これは単にクマ祭りが近年になって廃れてしまったことを意味するに過ぎない。[58]

私の聞いたところによれば、ゴルド族は種族人口の全般的な衰退が、婚姻規則を以前ほど厳格に遵守させなくなったと自認している。ある少女（彼女自身は淫奔なあばずれであった）が私にいうのに、「河を下れば」女たちは男の前でははるかに慎み深く、しつけもいいし、性的に貞淑であるそうだ。私は拉哈蘇蘇附近の図斯科で〔50/51〕知り合いのシャマンに会いそこねてしまった。というのは、非常に近い親類（血縁のそれか、単に氏族のそれなのか、私は知らない）の男と不倫関係に陥った妹を銃撃したかどで、三ヶ月の懲役に服している息子に面会しようと、そのシャマンが拉哈蘇蘇に出向いていたからである。妹を撃った後、シャマンの息子は「事故」として届け出たが、警察は調査した結果、状況に不審な点を見つけ、彼を投獄した。しかし、実際は韃子間の事件であり、また誰も進んで殺人賠償や死刑を要求しなかったので、当局はそれほど深刻な事件と看做さず、軽い懲役に服させたに過ぎなかった。私の情報提供者であった中国人は、そのゴルド人がもしことを正しい方法で処理していれば、

監獄に入る必要はなかったと付け加えた。彼は性的不品行のために、父の命で妹を撃ったと正直に届け出るべきであった。そうすれば、事件は家父長制家族の裁きに関する問題として大目に見られたであろうに。

ゴルド族は自分たちの葬礼は満洲族のそれと同じだと主張するが、それ以上確実なことは何一つ聞かなかった。確信をもてないが、私は屋葬と思しき一例を見たことがある。[59] ある中国人は、思うにそれは埋葬を待つ棺のための一時的な仮小屋に過ぎず、ゴルド族か中国人のものだろうといっていた。満洲族の棺が中国人のそれと異なることは指摘する価値がある。それはあたかも古代の葬屋から発達したかのように見えるのに反し、中国人の棺は側面がまるく、まるで棺形に刳りぬいた樹幹から発達したかのように見える。満洲族ないしゴルド族がかつて樹上葬（すなわち、大きな丸太から作った棺のなかにではなく、樹木の枝のなかに葬る）を行っていたのか否か、私は知らないが、[60] 英雄が死者の屍灰を木のなかに置くと、その後に木が「周囲に繁茂する」という伝説（この物語は明らかに火葬の記憶であり、多分遺体か屍灰を木のなかに置く慣習の追憶であろう）を聞いたことがある。

死後の霊魂がどのように想像されているか、その真の観念を把握することは中国語をコミュニケーションの手段としたために不可能である。というのは、中国語は「魂」・「霊」等々に対する用語をいくつかもっていて、それらは「魂の異なる部分への再分割」ないし「魂の複数性」といった古代の概念に由来するかも知れないからである。にもかかわらず、私はゴルド族が魂に少なくとも二つの形態（肉体の「霊」と心や感情の「魂」）があると信じている、と思いたい。[61] 彼らはまた魂がときおり人から動物へ、動物から人へ転生すること、およびシャマンの魂とシャマンが統御する諸霊が別のシャマン（通常、彼の息子）に転移することを信じているように思われる。〔51/52〕

Ⅶ. シャマニズム・治療・占い

（1）シャマニズム

いまなお残存しているゴルド族の遺風のなかで、最も興味深い研究主題は、疑いなくシャマニズムである。それはゴルド族の古い精神、感覚、思惟のなかで、最も小さなダメージしか被らなかった遺習である。シャマニズムはマンチュリア全域を通じて普及しており、中国人自身の間でさえそうである。中国にシャマニズムと類似する、もしくは少なくとも対応する、非常に古い崇拝または慣習が存在した証左がある。しかし、これはマンチュリアの中国人シャマニズムとは別物であると見分けがつく。一方、中国人は古代から長城北辺のあらゆる民族の文化に強く影響を及ぼしてきたし、彼ら自身辺境地域に入植することによって、多くの点で影響を受けてきた。辺境の中国人に目下作用中の影響は、その大部分がほとんど理解されていないが、当然のことながら、もしそれらが研究され得るとすれば、過去において辺境中国人が「野蛮人」の中国侵略（たとえば満洲族の中国征服時のような）に衷心から合流するのを可能にした、気質や感情の変化に多大な光明を投げかけるに違いない。辺境中国人に彼ら自身の個性を付与する上で、重要な効果があった態度の変化のなかで、宗教的な変容は非常に重要であったはずである。マンチュリア全域におよぶ中国的な宗教観念の拡散において注目されるべき一定の確かな現象のみならず、地方的な宗教信仰の採用という逆の傾向も考慮されなければならない。これらのなかで最も重要なものは多分マンチュリア型のシャマニズムであり、非常に早くからマンチュリアの中国人によって採用されてきたに相違ない。鉄道の敷設と大規模な入植が始まる近代以前にマンチュリアに到来した、古い入植者の血を引く人々の間では、［この種のシャマニズムは］ほとんど普遍的である。シャマンという用語の中国語的変形（ツァマ ts’a-ma、チャマ ch’a-ma、ツァモ ts’a-mo、ツァモツェ ts’a-mo-tze のような）[62]は、マンチュリアの至る所に流布している。この用語を知っているか、もしくはシャマンに助言を仰ぐ人たちの大多数は、

それを「方言」だと認めるであろうが、非中国語起源だとは知らないようである。いくらか教育のあるものだけが、シャマニズムと古代中国の巫医 wu-i の類似性を指摘するように思われる。

ゴルド・シャマニズムが比較的「純粋」であること、すなわち部族的な信仰と慣習が中国的なそれと徐々に混和した産物ではないことを見出すのは、それ故なおさら興味深い。松花江下流への中国人の入植は遅れて始まり、きわめて急速に完遂されつつあるので、その趨勢［の赴く先］はゴルド・シャマニズムを改変することではなくして、〔52/53〕それを圧倒し取って代ることである。富錦地方で私は、古い入植者の血を引く中国人のシャマニズムについて聞き及んだものの、これらの人びとは山東省から思惟・信仰・感情を集合体としてそのまま持ち込み、自分たち自身の強固なコミュニティーを形成する新顔の入植者に人口の上で圧倒されている。新顔の入植者はときに治療のことでシャマンに「相談する」かも知れないが、仲間内でシャマンを養成するほどには熱中していないようである。ゴルド族に関しては、新来の中国人の牢固たる人口が、ゴルド族自身のシャマニズムを実際上、手つかずの状態で保持するに任せた。ゴルド族自体が生き残る限り、ほんの断片であっても、少なくとも改変されない古いシャマニズムの名残をとどめるであろう。

マンチュリアではどこにおいても、シャマニズムを研究するのは骨が折れる。中国人が大多数を占めるほとんどの場所で、シャマニズムが一種の迷信やまやかしとして警察の禁令下にあるからである。どこかに見知らぬよそものが突然到来したとき、ことに警官や兵隊に護衛されている場合、たとえいかなることを話すにしても、動揺と極度の躊躇を引き起こすであろう。一度ならず私はシャマンの家を調べて見たが、家族の男たちはシャマン自身も含めて、オオシカの猟期のため不在であったので、誰一人敢えてシャマンの衣装を点検のために持ち出しさえしなかった。私の資料の大半は、不運にもシャマン自身は不在であったにせよ、図斯科に住むシャマンの家族から得たものである。

ゴルド・シャマニズムは多くの活動（すべて相互に融合している）を有す

るが、いくつかの傾向に区分し得る。私の思うに、その主要な形態は以下のとおりである。

(a) 宗教的シャマニズム：主として季節的祭礼（春と秋）に関係する。

(b) 家族シャマニズム：現在の世代を過去の根源と接触させ続け、そして祖先と子孫の連続性を主張する。

(c) 自然の力や未来のできごとの経過を統御しようと試みるシャマニズム：たとえば狩猟の前に行うシャマニズムがそれである。

(d) 病気治療のシャマニズム：これもまた自然を統御しようと試みる。

シャマニズムはその根底にきわめて高い水準の宗教観念を有し、本質的に選ばれたものの宗教である。第一に、シャマンの諸力が父から息子に譲渡されるという、非常に強い傾向がある。第二に、召命 vocation は優れて選択的である。シャマンはその「力」、経験、極度の労苦を伴う儀礼、綿密な配慮、自身が自身に対して及ぼす鍛錬を修養しなければならない。第三に、召命それ自体は個人的な人格成長に向かいがちであるけれども、シャマンは自分の人格を完全に抑制できなければならない。なぜなら、シャマンは力ないし霊が外部から憑依しない限り、無力だからである。つまり、シャマンは自分を通して自分のものではない力を操作する、単なる伝達経路 channel に過ぎない。彼の能力が大きければ大きいほど、彼が引きつけることが可能な力も大きくなる。しかし、その一つが〔53/54〕活動中であるとき、彼自身の力は完全に消し去られていなければならない。あるシャマンの力と他のシャマンのそれを比較する明白な傾向があり、それはしばしば競争を引き起こしたに違いない。にもかかわらず、シャマンは自分を主張することによってではなく、ただ自己を統御することによってのみ、他者から卓越し得る。というのは、憑依下にある間、自分の人格を没却させることができる程度が憑依され得る尺度だからである。つまり、彼の人格の不在状態によって残される余地が大きければ大きいほど、外部から霊によって占拠され得る余地が大きくなり、それだけその霊は偉大であり得る。

最後に、シャマンにとってエクスタシーの状態は、二つの形態がある。

一つは、シャマン自身の人格が閉ざされる。つまり、シャマンは不可視の世界のあらゆる諸力に開放されているが、いかなる単一の力にも憑依されていない。宗教的もしくは家族的崇拝において、祖先の霊や神はシャマンを通じて家族やコミュニティーと接触する。病気の治療においては、シャマンを通じて患者に活力が流入するか、それとも患者が自然との調和状態に置かれる。シャマンはもっぱら〔54/55〕漠然とした諸力が流れる伝達経路であって、一個の明確な力が活動する焦点なのではない。

いま一つの、中国人の言い回しで「大神」ta shen と称されるシャマニズムでは、シャマンは一定の霊に憑依され、それに身体的動作を命令される。このタイプのシャマニズムは、実際的な応用をほとんどか全然もたないように思われる。それはむしろシャマンが自分の力を単に維持することによって保証される神技の行使に似ている。シャマンが自身を苦しめ、超人的な驚くべき力強さを発揮するのは、この種の憑依下にあるときである。一方しかし、そのような力の行使は明確な目的のためになされるのでは全然ないらしく、コミュニティー全体を「強化する」のに効果的だと看做されているようである。つまり、本来的に憑依されたときのシャマンは、憎悪に満ちた不可知の諸力と衝突しても無傷な能力を示し、かくて不可視の世界の邪悪な諸力の圧迫からコミュニティーを救う、ということなのであろう。

宗教的シャマニズムは主として春と秋の祭礼と関連するらしく、私の知る限り、春の祭礼においては、冬が終わると、家屋とその住人を守護する諸霊の木像や「シャマン柱」などがきちんと配置される。秋の祭礼においては、一年の最も実り豊かな季節が祝賀され、そして冬の到来に備え、上記の物たちが再びきちんと配置される。

家族シャマニズムは現在、主として祖先崇拝と古い中国的な新年（陰暦の）に集中している。大部分満洲族からの伝播として受容された中国人の影響は、当然ながらシャマニズムの他の形態よりも、ここにおいて顕著である。

自然シャマニズムは、家畜を保護し、良好な季節を確保し、狩猟旅行

の出発前に吉凶を占い、そして狩猟中の獲物の捕獲を促すための努力と関連するように思われる。

治療シャマニズムは、ほとんどいつも邪悪な霊を追い出す形態をとらないらしく、むしろシャマンは自らトランス状態になるか、極度の興奮状態を引き起こしながら、被治療者にややトランスに似かよった状態を生じさせる。病気は一種の不調和と看做され、トランス状態下で患者はくつろぎ、自然の不調和が解きほぐされ、その再調和が生ずる。

図 7a は図斯科に住む有名なシャマンの家屋の配置を示す。彼の名前は中国式に chengnge という。私は以前彼がシャマンであることを知らずに会っていたのであるが、ところが実は彼は存命する最も著名なシャマンの一人であった。彼は平均よりもかなり背が高く、痩せていて、頑健そうな外見であった。年齢は多分五〇代であろう。彼に最初会ったとき、見入るような、考えこむような表情をした、大きな威厳を備え、物腰が非常に控え目な人間として私の心を打った。彼は目が青く、〔55/56〕茶色っぽい髪と赤い顎ひげをもち、恐らくロシア人の血を引くのであろうが、これは彼の顔立ちの上で目立ってはいなかった。彼は実際よりも若く見え、名高い猟師であった。彼は満洲語を書き、中国語を流暢に話し、多くのゴルド族のようにロシア語を話すこともできた。

平面図の点線は三戸建て家屋の元来の設計を示す。現在居住する家の［各部の］相対的位置が、この家が南北方向に建つという事実によって影響されていることに留意しなければならない。元来、シャマンは北側の建物の西端に住み、現在西側にある物はその当時は北側に、現在南側にある物はその当時は西側に位置した。utku もしくは「聖なる樹」のみは、つねに現在の位置にあったが、家屋に対する方角は相対的に南西から南に変化した。

現在建っている通りに家屋を取り上げ、外側から始める。

南端に数本のトロ toro 柱がある。この語はときに soro とも発音され、中国人と満洲族は中国語的発音を用いて、solo（索倫）あるいは solo-kan-tze（索倫杆子）と呼ぶ。これらのうち、中央のものがトロ柱本体（図 7b を

見よ）であり、すぐさまトーテムポールを想起させる。トロの前面（家の末端に面する）には、大まかであるがそれとわかる浮き彫りの図形七種（単一もしくは一対の）が彫刻されていて、トロ柱の頭部を含めて八種一組となる。ここではそれらを上から下へ、トロ柱に現れるとおりに掲載するが、ゴルド族は下から上へ数えるらしいので、そのように番号をつけた。

(8) toro 柱の突端は頭部に似せて粗く輪郭を描き、角ばらず丸くなっているので、多分男性ではなく女性であろう。

(7) ヒト形の図形、一個の soun または burkan。前者の名称は「霊」、後者は「聖なる」とか「神」を意味する。

(6,6) 一対の tormafa souni。それらは（恐らく）ワシである。souni は「霊」であり、tormafa は toro（柱本体）と mafa（老人）の組み合わせらしく、かくして「toro の老人たちの霊」ないし「聖なる老人たち」を意味するようである。しかし、図形はヒト形ではなくトリ形なので、「魂」を意味するのかも知れない。

(5,5) 一対の muduri、龍。

(4,4) 一対の chêmki、トカゲ。

(3,3) 一対の meikhê、ヘビ（大蛇でなく小さなヘビ）。

(2,2) 一対の wakshênh または wokshanh、カエル。

(1) 一個の hai-lung、ウミガメ。この語は明らかに中国語「海龍」に由来する。

トロ柱それ自体はトウヒ属の若木で、樹皮は剥いであるが、幹は手入れされないままであり、節すら取り去っていなかった。

しかしながら、これは唯一可能な配置なのではない。大屯で私は下記の配置をもつ柱を見た。トロ柱はポプラの若木で、図形を彫刻する側面は平滑にされていた。〔56/57〕

(8) 柱の突端は丸いよりはむしろ角ばった頭部となっており、従って多分女性であるよりはむしろ男性であろう。

(7) 一個の ganki ないし soun、ヒトの霊。

（6）一個の meikhê、ヘビ。

（5）一個の wakshanh、カエル。

（4）一個の hai-lung、ウミガメ。

（3）一個の soun、霊。

（2）一個の wuksa ないし wuksari、トカゲ。上記の wakshanh に比較せよ。chêmki という名称は使用されないが、これは方言の相違かも知れない。

（1）一個の muduri、龍。

二番目のトロ柱上の図形がすべて単一であることに注意されるであろう。[63]

図斯科のトロに話を戻す。

トロ本体の左側、あるいはそれが南に面している場合には右側に、二本の細い杭または棒があり、その先端に四本の足と尾をもった動物の木像が突き刺してある。足は小枝で作られ、胴体を貫いて両側に突き出ている。私はこれらに関して、満足のいくどのような名称も、説明も得られなかった。それらは ulki かも知れないが、別の説明によるとある種のリスのようである。あたかもカワウソ、ことによるとイタチかクロテンのように見える。

トロの他の側に二本の棒があり、その一本は他の一本よりもはるかに短くて細く、どちらも kêku、つまりカッコーかモリバトと思しき鳥が突き刺してある。私はほぼカッコーだと確信する。

同様の kêku や四足獣のついた一対の棒が地面に落ちていた。聞いたところでは、それらは気まぐれに拾い上げて直立させるのではなく、供犠とシャマンによる儀礼を伴って、適切な日にきちんと置かれ得るだけである。

トロ諸神は「家と中庭全体」を見張っており、それらが祖先崇拝と結合するのははなはだありそうなことである。トロの諸儀礼において崇拝される、最も重要な力の一つは ulki、つまり見たところ一種のリスであり、「それを尊敬しないと、病気をもたらす。」主たる犠牲はブタであり、

トロの根元で屠る。最初、シャマンは屋内で儀礼を指揮し、つぎに外に出て家の周囲を巡り歩く。それからブタがトロの根元に横たえられ、熱い「酒」（穀物の蒸留酒）がブタの耳に注ぎこまれる。この間、ブタはずっと完全に静かなままである（と主張されるのを私は何度か聞いたことがある）。熱い酒が耳に注がれてさえ、ブタは「霊」、「神」がそうさせないうちは、すぐには暴れない。ブタが動いた瞬間、屠られる。もしブタが全然身動きしないなら、その犠牲は受け入れられなかったことになり、全部初めからやり直さなくてはならない。ブタが動こうとせず、かくして屠殺を免れることは、〔57/58〕全然知られていないわけではないようである。この供犠は新年（陰暦の）や冬至の頃に催される満洲族の儀礼と同一だと思われる。

もしニワトリを犠牲に供えるなら、酒は頭に注ぎかける。余裕のあるものにとって標準的な犠牲はブタである。ヒツジは供犠されず、その地域ではほとんど未知の家畜である。ウシは滅多に供犠せず、ウマは絶無である。

トロ柱からやや離れたところに、utku と呼ばれる聖なる樹が立っている。それは古い節くれだった樹木で、大きく広がった枝をもつが、いかなる樹種か、私は知らない。樹の下に荒れた中国風の小さな廟があり、いかなる偶像も安置されていないが、霊の名称ないし「聖なる樹」の称号が書かれた小さな位牌がある。幹にはイノシシの頭骨といくつかの骨が収められ、枝には祈願用の端切れがいくつか結びつけてあった。

家の背後の、ひさし近くに二つの棚がある。その一つには箱が置かれ、「きわめて聖なる」と呼ばれる。その箱を開ける儀礼に際しては、月経中や妊娠中の女子はその場に居合わせることが許されない。ときには狩猟旅行に携帯されることもある。この箱の中身を私は見ていないが、同じような別の箱なら見たことがある。それは天然痘の女神に対する崇拝と関連する。その箱には多くの棒が納められ、いくつかは先端が槍の穂先形や三叉形のものなどがあった。棒はそれらを使用する儀礼の際に、ひとまとめに束ね、上から種々の色のスカーフで覆い、最後に「何か恐ろ

しいもののしるし」である黒いスカーフで覆う。私はその儀礼を見たことがない。箱の代わりにシラカバ樹皮の巻物が使用されることもあり、ひさしの下に吊るしておく。

もう一つの棚には多くの soun（霊）[64] または souni mafa（霊の老人）が置かれる。これらは大抵単なる四角い木（普通はシラカバ）の塊りであり、手足はなく、斧で粗く彫り、刻みをつけた頭部をもつ（図 8）。顔を付け加えることもある（図 9）。上述のように、四角い頭部は男性であり、丸い頭部は女性である（図 10）。木像は革の着物を身に着けることもあり、この着物はまだ新しいうちに木像に巻きつけた生皮で作られ、乾燥によってきつく締まる。いくつかは大まかに示された手足をもつ。私は生殖器をもつ男女の木像を見たことがある。頭部のてっぺんに突起をもつものは非常に一般的な形態であり（図 11）、突起は突き刺すのではなく、木塊から切り出すのであって、先端は少しばかり鉤状になっている。この木像はつねに「男性」、すなわち四角い頭部であるらしい。突起は私の見たものでは六個から九個を数える。この木像は soun horundo bis soun と称し、horundo という語は「指」を意味し、モンゴル語 horogo と同系統かも知れない。四角い頭部や丸い頭部の木像と同じく、soun horundo bis soun は家屋の背後ばかりでなく、〔58/59〕ときにはトロ柱の根元にも見出すことができる。soun があらゆる種類の霊を包括するという以外に、私は満足すべきどのような説明も得られなかった。soun はしばしば特定の儀礼のために作られ、つねに狩猟の霊を表すらしき soun horundo bis soun を除き、必要に応じて祖先の霊や狩猟の霊などを象徴する、と私は信ずる。soun はしばしば無造作なやり方で捨てられ、家に近い下生えのなかで腐っていたり、役目を全うした後、引退したことを示唆するような様子で廟のなかに片づけられているのが見られる。寸法は高さ数インチから二フィートに達する。

他の木像は頭部が平たく、目鼻が示され、切り出した手足をもつ（図 12）。またイタチ、イヌ（私が見たことがあるのは一個だけである）、ときにはクマの木像もある。いくつかの木像について聞いたところでは、頭部が

平たいのも丸いのも、ウマやその他の動物を統御する霊であり、そして狩猟の神だという。「いうまでもなく、もし彼ら［soun］を尊敬しないなら、我々はいかにしてしとめるべき獲物を見つけられようか。獲物をしとめたとき、その獲物は彼らによって送り届けられたのだ。」

第二の棚にはまた木製の底と差し込み蓋のついた、シラカバ樹皮製で円筒形の小箱が置かれ、なかに多くのヒト形の偶像が収納されている。二つが木製であり、その他は真鍮と白鑞でできている。真鍮製は「金色」で、白鑞製は「銀色」である。これらの偶像は全部一本の紐に繋がれ、ある儀礼の間、シャマンの首のまわりに吊るす。それらは現にシャマンが着用する装備のうち、戸外で保管される唯一の部分であるように思う。それらは burkan、つまり「神」、「聖なるもの」と総称され、私は以下の個別名称を得た。

êchihê	sarka	bukchunh, bukchungh
ganki	kirinh	

屋内におけるシャマンの通常の位置は、着座する場合、炕の南西の一角にある。この家の場合、「主屋」ではなく「側屋」なので、南東の一角にある。シャマンが舞踏するとき、高く盛り上がった炕に三方から取り囲まれた床面に立つ。この家では、部屋の端に近い、炕ではなく床の上方に、木製で生皮（乾燥によって収縮する）を巻きつけた鳥が天井からぶら下がる。その翼は皮製のひだを羽毛として飾りつけてあり、同じような皮製のひだが首から吊り下がり、たてがみのように見える。これは明らかにウマに似た頭部の外見を強めるのに効果的であるが、鳥とウマの結合を象徴する〔59/60〕何らかの意図があるとは私は思わない。その鳥はワシだと私は信ずる。kori と称されるこの鳥は、あるシャマニズム儀礼、つまり、私の信ずるところでは、主としてシャマンが自己の力を、いかなる特別な目的のためでもなく、ただ神技のために行使するに過ぎないような種類の儀礼において大きな重要性をもつ。シャマンの使い霊 (familiar spirit)［守護霊］が降って来るとき、それは最初鳥にとまる。それから鳥は触れられもしないのに動く。そこに居合わせた青年は「昔、

この鳥は我々の飛行機でした。シャマンはこの鳥とともにどこにでも行くことができ、天上に昇ることもできました」と語った。彼いわく、天界には多くの階層（どれほど多いのか、誰も知らない）があり、どこまで高く昇れるかはシャマンの力量次第であった。

シャマンの服装と装備は儀礼によって相違する。そのうち疑いなく最も重要な単体の道具は太鼓である。これなくしてシャマンはトランス、もしくはエクスタシーを引き起こすことができない。太鼓はつねに楕円形をなし、つねにニレの木枠にぴんと張ったノロジカの皮で作られる。皮は水に浸し、毛をこそぎ落として準備する。木枠は形にあわせて曲げるために熱し、枠の楕円は「不可視の」継ぎ目で接合する。木枠の外側は二本の溝がぐるりとめぐり、皮の上からくくりつけるためにしっかりしたひっかかりを与える。太鼓には柄がないが、中心の金輪に集まる四本の紐で支え持つ。打つときには太鼓は左手で吊り支えるので、表面は下を向き、バチがそれを打ち上げる。打つたびにぐいと太鼓を引き上げる独特のスタイルがあり、そのため左手と手首が皮に接触し、打撃の共鳴が打消される。打撃と打消しの時間的間隔には変化があり、それが音に長短を与えリズムを作り出す。私は異なった村で数人のゴルド族が太鼓を打つのを聞いたことがあるが、そのリズムはいつも一様であった。太鼓のリズムはつねに打ち手とすべての聞き手に、すぐさまうっとりとした表情を浮かばせ、ゴルド族にただちに深く強い感情を喚起することは疑問の余地がない。打つ前に太鼓は必ず火にかざして暖めなければならない。というのは、皮は弾力性を有し、ほんのわずかな湿気も皮をたるませ、反響を台無しにするからである。太鼓のバチはどのような種類の木で作ってもよい。バチはノロジカの四肢の皮か、カワウソの尾のいずれかでくるまれており、私はそれ以外のどんな種類も見たことがない。

シャマンがいつも決まって着用すると思われる衣装の二つの部分は、スカートと腰帯である。スカートは事実上、前と後にしめる二つのエプロンであり、多彩な色リボンで飾ってある。腰帯は革製で、非常に長いアイスクリームコーンのような形をした重い鉄鈴が吊り下げられる。鉄

鈴には鐘のような舌はないが、互いにぶつけあわすことによって鳴らす。シャマンは太鼓を打ち鳴らしながら、反時計回りに輪を描いて踊る。その踊りは一種の摺り足である。つまり、左足がつねに先行し、右足よりもやや遅いテンポを保ち、〔60/61〕これが急激な足の踏み鳴らしを伴う摺り足のリズムを軽快にする。それと同時に尻をくねらせ、鉄鈴（腰の後ろに吊るされ、前の方へぐるりと回ってくる）を互いにぶつけあわせる。体の上半身は前屈みになる。大抵どのゴルド族も、シャマンであろうとなかろうと、この太鼓打ちと踊りができるらしく、それを dirkidêrê と称する。

シャマンはまたいつも決まって一揃いの青銅鏡を胸と背に着けるようであり、前に三面、背に三面というのが標準的な配置である。これらの鏡は中国語では鏡とはいわず、「護心板」と呼び、私はゴルド語の saghêdi-toli という用語も「守護鏡」ないし「守護板」を意味すると信ずる[原注3]。その特有の用途は、邪悪な霊の攻撃に対してではなく、競争相手のシャマンないし敵対するシャマンに対する防禦としてである。「シャマン自身の霊（もしくは魂）が“トランスに入る”とき、その霊を敵対するシャマンは遠く離れたところからまごつかせることができ、そのために彼は二度と意識を取り戻さないだろう。」より小さな鏡はしばしばスカートの上に着けたり、衣装や装備のさまざまな部分に取りつける。

ゴルド族のシャマンは、私の知る限り、ほとんどの儀礼の間、頭飾りを被らないのであるが、特別な機会に人目を惹く被り物を使用する。それは一対の枝角形をなし、鉄でできていて、冠として着用できるように小さな輪の上に据えつける。枝角の枝には普通薄い絹製リボンの房がぶらさがり、基部にはクマ皮とチョウザメ皮の小片が結びつけてある。私の聞き得た範囲では、ゴルド族のもとではこの被り物は「オオシカの霊の踊り」と称される踊りのために着用されるだけであり、その目的はオオシカの頭数増加を促すことか、あるいは狩猟隊が出発する前に、あらかじめオオシカに呪文をかけることに相違ない。しかし、クマ皮とチョウザメ皮から判断すると、多分他の儀礼と関連している（もしくはかつて

関連していた）のかも知れない。この被り物を着用するとき、つねに絹の房のマスクがシャマンの額から吊るされ、目と顔面を覆う。枝角状の被り物は満洲族と中国人のシャマンの間では非常に一般的であり、どうやらあらゆる種類の「大神」儀礼に使用されるらしい。中国語でこれを「神帽」shen mao と称する。神帽はモンゴル人シャマンにも存在し、またある種の踊りにおけるラマ僧の被り物として、その使用ははるかチベットに至るまで途切れることがない。

ゴルド族のシャマンはまた、「大神」儀礼にだけ使用される槍ももっている。彼らが太鼓と槍を同時にもつことはない。槍はつねに短く、ナイフのように片刃である。槍の刃と柄の間にはほとんどつねに、金属製の「ボタン」、ないし鍔がついている。その真下にクマ皮かチョウザメ皮の「えり」がある。またその下には〔61/62〕ulki やイタチ、あるいはその他、シャマンの使い霊の木像が二、三個、結びつけるのでなくして、穴に挿し込んであるかも知れない。槍の柄は大蛇の皮でしっかりとくるまれ、私はこの皮のないものを見たことがない。槍は「大神」儀礼（このときシャマンはしばしばひどい狂乱に陥るであろう）の間、護身用にだけ使用されるに過ぎない。邪悪な、あるいは敵意のある霊（ときにはシャマンによって認識され命名されることもあり、それ以外のときには無名の恐怖）は通常、シャマン自身の諸霊の一つが彼を離脱し、別のそれがいまだ憑依しに到来していない瞬間に、シャマンに憑依しようと試みるであろう。シャマンは槍で邪悪な霊と戦ってこれを撃退し、遂には戸口から追い出す。ここには「大神」シャマニズムが、邪悪な霊に対する全般的ないし特定の魔除けと深く関連することが示唆されている。私の聞いたところでは、ときおり平穏な儀礼の最中、邪悪な霊がシャマンを攻撃することがあり、そのときシャマンは敵と戦うために儀礼を中断しなくてはならないという。いつも鏡と小さな burkan を（力だけでなく保護をも得るために）身に着けることは、この理由にとって部分的である。これはつぎのことがらの、また別個の表出なのである。すなわち、シャマンは自らの個人的な意志と人格を発展させるのに役立つ訓練法でたゆまず修練したにせよ、依然とし

てトランス状態にある間、コミュニティー全体に影響を及ぼす善と悪の力が遭遇し、戦って決着をつける、多分に中立的な焦点なのであり、かくてシャマンが一種の身代りになっている間に、コミュニティーは両者の衝突から救われるのである。

イタチ、ulki（多分リス類の動物）、ワシ、チョウザメ、カワウソが最もありふれた使い霊であるらしい。シャマンが明確に「水生」の縁者（チョウザメ、カワウソ）や、明確に「陸生」の縁者（イタチ、ulki、ワシ）をもつのは非常に一般的なことらしい。これらの霊のうち、ワシを除き、一つとして明白な獰猛性を連想させるものはないが、にもかかわらずイタチと ulki は（中国人におけるキツネのように）非常に悪賢い動物であり、しばしばひどいわるさをしでかす（もっとも、それらを使い霊とするシャマンに対してでないことは無論である）。クマや、ことにトラのような霊はときに「大神」儀礼の最中に敵として現れることもあるけれども、使い霊としてはきわめて稀なように思われる。

非常に強力な「大神」シャマンはよく知られた人物（普通死亡したシャマン）を使い霊としてもつことが間々あるが、それは自分自身の祖先かも知れないし、そうでないかも知れない。私は一度だけトラの使い霊をもつらしきシャマンについて聞いたことがあり、どうやら非常に恐るべき人物と看做されていたようである。嘎爾当村のある老人いわく、

> その昔、シャマンたちははるかに強大な力（彼はこの力を中国語で「本事」pen-shih、つまり才能、天賦の才と表現した）をもっていた。かつて死者を蘇生させたり、自分自身の肉体を自らの操る諸霊とともに消し去ることができるシャマンがいた。彼の消え去るやり方ゆえに、人々は彼の肩に穴を穿ち、〔62/63〕鎖骨に鎖をしっかりと固定し、縛りあげたが、彼は再び消え去った。スキーを履いてさえ誰も旅行できないほど、新雪が深く積もったときに、彼はやっと舞い戻った。足跡を一切残さず、トラの姿で戻って来た。その後、誰一人敢えて彼を邪魔立てしなかった。また当時、上流に向けて航行するのに東風が必要なときに、それを自在に操れるシャマンたちがいた（この風は

どうも卓越風のことではないようである)。

ゴルド族は満洲族や中国人と同様、憑依霊の到着を表現するのに、つねに中国語の「神下来」shen hsia-lai（霊が降って来る）という言い回しを用いる。しばしば頭骨頂上部の隙間から霊が入ってくるといわれるけれども、にもかかわらず、まったくしばしば（それ以上ではないにしても)、霊は地面から足と脚を伝って昇ってくると理解されている。霊は脳よりもむしろ心臓を占拠する。霊が出現する際、まずシャマンの体は特に脚が身震いに襲われ、ついで硬直が始まり、そして弛緩する。シャマンの声は変わり、普通霊が自ら名乗るか、もしくはシャマンの動作によって特定される。ただし、シャマンがどこまで動物の物真似を身に着けているのか、私は知らない。普通、憑依が終わった後、シャマンは憑依中に起こったことを何も知らないが、非常に強力なシャマンはときとして一種の二重意識を持続することが可能であり、儀礼後に自分の言動を話すことができる。

女性シャマンはかなり一般的であるが、私は一人も見たことがないし、衣装と実践において男性シャマンとどう違うのかも知らない。私の知っているのは、私がいつも耳にした女性シャマンたちは皆中年以上の年齢らしい、ということだけである。私の推測するのに、彼女らのほとんどは若い頃から訓練されるのではなく、観察によって儀式と実践を習得するのであり、女性の一生で最も役立ち活動的な時期を妻そして母として過ごした後、その才能を現すのであろう。

一度だけではあるが、私はゴルド族の治療シャマニズムを見たことがあり、そのとき私は商章孫・凌純声両博士が研究する事例［の観察］に同行したのであった。商・凌両博士が同一シャマンによる一連の儀式に対して詳細な研究を行っていたので、私は完全な観察ノートを取ろうとは企てなかった。［よって、以下においては］ただ概略だけを示すであろう。その儀式は型にはまった行為ではなく、シャマンが病人の女にひと連なりになった日ごとの治療を施すのであって、商・凌両博士はそれらに出席することができた。私が見た治療は朝に行われた。見たところ、

すべての「大神」シャマン儀礼、および家族と祖先に関するある種の儀礼が日が暮れてから挙行される一方で、日中に行われる戸外の儀礼（トロ柱をきちんと配置するような）が存在することは注目に値する。そして、少なくとも今日では、明るいうちに治療行為を行うことはまったく自然である。[65]

病人の女は結核を患っている様子で、衰弱し物憂げに見えた。彼女は北に面し背を日光に向けて、南の炕に坐っていた。その背後に老女が跪く。〔63/64〕彼女は私が会ったことのあるどのゴルド族とも同じほど、シャマニズム、往時のことがら、旧習について知っていると思われ、彼女自身がシャマンであったとしても不思議はない。シャマンは南の炕と西の炕が交わる角に坐る。太鼓はすでに暖められてぴんと張り、儀式は多少さりげない様子で始まった。一人の青年（私は彼をそれ以前から知っていたが、確かにシャマンでもその弟子でもなかった）が、スカートと鉄鈴つきの腰帯をまとい、太鼓を手にとって dirkidêrê 踊りを始めた。これはどうやらいかなる素人にもできるようで、一種の導入部である。それが終わると、青年は三本の線香に火を点し、（中国人がするように）両手で額に戴き、西の炕に向かってお辞儀をして、壺に入れる（図 13）。これに対して年かさの男が異を唱え、立ち上がって三本の線香を一つにまとめて、西に向けて傾ける。炕の南西の隅に蚊帳を持ち上げる棒（それ自体は天井から吊るされている）から、紙を大まかに切り抜いたウマが吊り下がる。これは病人の女がシャマン自身に奉納した供え物のウマであり、シャマンの霊ないし諸霊に対する供え物ではない。「無論、霊たちはすでに知っている。」

この間ずっと、シャマンは南西の隅に坐って無関心に巻煙草をふかしている。彼は五〇代初めの男であり、その風貌は思いやりがあって、かつ知的というよりは聰明と描写することができる。彼は土地では善良、正直と評判の男であった。導入部が続くにつれて、シャマンはおもむろにスカート、鉄鈴、前と後に各三面一組の鏡を身に着け、タオルで額をぐるりとしばる。部屋には枝角状の被り物があったが、シャマンはそれ

は「この儀式用ではない」といった。

線香が点されたとき、煙草を吸い終ったシャマンは太鼓を手に取る。患者の後ろに跪いた付添いの老女と数語を交わした後、鳴り物の前奏なしで詠唱に転ずる。シャマンは一方の脚を尻の下で折り曲げ、もう一方を炕の縁から垂らして坐り、病人の方へ上体をわずかに傾ける。光が彼の顔に降りかかり、顔の向きは横と上に変えられる。

詠唱と太鼓はほとんど同時に始まる。詠唱の最初の語句はhaire,ihairei！である。音楽のリズムと調子は中国人とは異質であるが、モンゴル人とは似通う。ほとんどの時間、シャマンの目は閉じられている。詠唱と太鼓打ちは上下するリズム、持続的な加速と増大する緊張、そして緊張を持続させる努力を伴って同時に続く。メロディーには高低がなく単調であるが、太鼓のうなりと打消しが音に軽快なリズムを与える。汗が出始めると、間もなくシャマンの顔と体から滴り落ちる。額に巻いたタオルが、汗が目に入るのを防ぐ。汗が流れ、盲目的で、平たく、ほとんど肉の削げた顔に、光がきらめく。そこには理解しようと全力を振り絞る男ではなく、〔64/65〕感覚に全エネルギーを注ぎ込む男の名状しがたい熱情があった。まるでカワウソが水から跳び出して、自分に関わる世界にいることを感じ取ろうと全能力を集中するかのような、野生動物の表情があった。しかし同時に、シャマンは束縛されていた。つまり、シャマンは彼が動物ではなくして人だという何か（それが何か、私は知らない）からすっかり解放されたわけではない。シャマンは知性と理性の面においてよりも、別のそれにおいて人なのである。すべてが崇高であった。それは闇黒の、最も模索的で、無形の思索へ沈んでゆく。つまり、それは理解されるのではなくして感知される力の世界における、盲目的な魂および束縛された意志の格闘なのである。

熱烈な努力にもかかわらず、シャマンは外部から霊に憑依されることも、彼自身から離脱することもなかった。シャマン自身の霊は服従させられるのであって、排除されるのではない。一度付添いの女がシャマンを中断させたことがあった。シャマンは中止して、ごく普通に返答して、

そして続行した（すぐさま相変わらず夢中になって）。彼は二人の男に写真を撮られ、一人にノートを取られていたのに、全然自分を意識することがなかった。恐らく一再ならず押しあう物見高いよそものに取り囲まれたことがあるのであろう。

病人の女は、彼女に関する限り、その間ずっと何か催眠術的なトランスに近い状態にあった。彼女はシャマンに目を向けず、顔を前に向けて不動のままであった。一時は脚を組んで坐っていたが、ほとんどは片脚を体の下で曲げ、もう一方の脚を前に伸ばして坐っていた。目蓋は一時は伏し目がちに閉じられたが、大抵はじっと虚ろな凝視に見開かれていた。私は断続的ないし周期的な体の動きに何も気づかなかったが、ある「反応」があったに違いない。何故なら、それを検知することが、付き添いの女の役目だからである。病人の後ろに跪きながら、彼女は親指を肩甲骨に、他の指を鎖骨の窪みにあてがう。彼女は二、三度危険を知らせるかのように大声で叫んだ。そのとき、シャマンは付添いが再び叫ぶまで、何を変えるのか私にはいえないが、詠唱の速度か調子、もしくは恐らく歌詞を変えたのであろう。

この事例では、私は患者が身動きするのをまったく見ることができなかったけれども、その反応を説明してもらったことがある。それは断続的な痙攣の形をとり、背骨に集中しなければならない。ときには背中、つまり肩と肩の間だけを襲うこともあり、あるいは両肩、もしくは首と頭を襲うかもしれない。もし頭が痙攣に襲われたなら、その結果は普通の首振りや揺れ動きではなく、パターン化された内と外へ縫うような、そして突き出すような動作として現れる。それにはいくつかの標準的な型が認められ、実地に見せてくれた。付添い（熟練者でなければならない）をもつ目的は、反応を監視し、かつシャマンを手引きするところにある。もし治療が効いているなら、付添いは sêrêmurê と叫ぶ。それはどうやら「動いている」、「痙攣が生じている」を意味するらしい。もし反応がなければ、付添いは anchi（「何もない」、「何の結果もない」を意味するようである）と叫ぶ。〔65/66〕

詠唱と太鼓打ちは突然止む。シャマンが最後まで詠唱し終わったからなのか、疲労を感じたからなのか、それとも患者を十分長く揺り動かさせたと直感的に感知したからなのか、私は知らない。いかなる明瞭な終りもなかった。シャマンは儀式を終えたとき、異常な状態にあるとはいえなかったけれども、明らかに疲労しもし、「興奮して」もいた。シャマンは太鼓打ちが神経に触るといっていた。病人の女は明らかに意識を回復していなかったが、ただ深く坐り、その後横になってくつろぐことを許されただけであった。

その治療はすでにおよそ一五日間続いていたが、もう一五日間続くかも知れなかった。患者はよくなった感じがするといわれていた。

シャマンが衣装を脱ぐことに関しては、なんの儀式もなかった。

(2) 占い

ゴルド族はまた、シャマンを必要としない占いと予知の方法ももっている。一つはノロジカの肩甲骨を焼くか、もっと正確にいえば熱した石炭の上で焦がすことによるもので、狩猟に出かける方角や、はぐれウマを探しあてる方角を決めるのにきわめて一般的に用いられる。肩甲骨が熱でひび割れると、それは一つのお告げとして点検される。ひび割れはしばしば馴染み深い場所の地図として解釈される。

もう一つのそれは一種のくじ引きであり、なすべきことの明確な指示を与えるというよりは、むしろ運勢の良し悪しや成功と失敗の予告を与える。くじ引きのくじには一種の細枝、ないしはある種の草の茎かも知れない、が用いられる。くじを引く人は四一本か四九本の束で始める。目をつむりながら、束を額まで持ち上げ、細枝を一方の手からもう一方の手へとあちこち手さぐりで探し、最後に下に降ろし、四つの束に区分けして片手の指の股で挟みもつ。それから小さな束を各々二本一組にして数え、もし正確に二本一組で割り切れたなら、そのままにしておく。もし一本ないし三本が余れば、それは除外する（かくして名目上二本一組にして数えるけれども、実際は四本一組のように見える）。それらの束は捨てた分

を除外して、再び一緒にまとめ、先と同じやり方でもう一度額まで持ち上げ、四つの束に区分けし、二本一組にして数える。このような事を三度繰り返し、最後に捨てたくじの本数を数える。とりわけ好ましい結果は三本であり、二一本や三三本もよいとされる。最悪の結果は九本と二七本である。

(3) 他の種類の病気治療

ゴルド族は尋ねられたとき、シャマンによる治療以外にいかなる治療法ももたないと答え、かつあらゆる医薬は中国人から入手するといっていた。それにもかかわらず、彼らは他の治療法も有し、そのうち最も興味ぶかいものは恐らく pinching であろう。pinching は我々がアスピリンを服用するのと同様に、〔66/67〕何気なくしかもしばしば利用され、アスピリンとほぼ同じ範囲（疼き、痛み、寒気、「気分がよくない」）で頼りにされる。病人の女を治療し終わったばかりのシャマンに、それが施されるのを私は見た。シャマンは治療後ほどなく、ぶらりと別の家にやってきて、自分は病気だ、つまり太鼓打ちが自分の頭にとって鬱陶しいのだ、といった。シャマンは「熱い」、「冷たい」、「乾いた」、「湿った」病気といった意味のことばを用いて、自分が冷たい病気だといった。シャマンの助手をつとめた老女は、自分が彼からそれをむしり取りましょうといった。シャマンは上着を脱ぎ、彼女は最初胃の上、下ってへその両側に取りかかった。彼女は指を曲げ、人差し指と中指の関節の間に肉をつまみ、ときどき唾を吐きかけながら、むしり取ってまたむしり取る。右手が疲れると、彼女は握力を補うために左手に取り代えた。彼女は皮膚のかなり大きな部分があざになって紫色に見え始め、遂には皮膚が擦りむけて表面全体から出血するまで、同じ場所かそこに非常に近いところをむしり続けた。ついでもっと高い場所に移り、鎖骨からそう遠くない胸部をむしり取る。シャマンは額も擦りむいており、そこに最近同じ治療が施されたことを示していた。

この治療法は決してゴルド族に特有なのではなく、マンチュリア全土、

ことにその北部に顕著である。その地の中国人もそれを利用しているが、私はその中国起源を疑っている。長年にわたって黒龍江省に住んでいるカトリックの司祭は彼自身風邪や咽頭炎に罹った最初の兆候が現れたとき、いつもその治療を施してもらったと語っていた。私の推察するのに、この治療法は強度の局部的な逆刺激が必要とされる多くの症状に有効なのであろう。また、［この治療による］痛みは患者に発汗を引き起こし、それは多分風邪による充血を軽減する。この治療法は中国辺境と内モンゴルに沿って見られるものときわめて緊密に対応する。そこでは非常に小さなカップに強い蒸留酒を満たして点火し、炎がよく燃え上がったところで、患者の額にひょいとかぶせる。カップの炎は消えるまで少しの間燃え続け、真空状態となって直径一インチを少し超える皮膚を強く吸い上げる。この治療はこげ茶色のミミズ腫れを残すが、さほどの苦痛はないそうである。これは風邪や頭痛、またはどのような軽い普通の不快感にも施されるが、通常額にだけ施す点で pinching 治療とは異なる。

できものはヤマネコの爪で引掻いて治す。この治療は喉に引っかかった魚の骨を飲み下すのを助けることにも施される。分娩中の女性には、乾かしたクマの鼻から作った粉末状の削りくずを与える。人参とオオシカの角は中国人と同じようにして使用するが、そうした薬がどの程度まで中国起源なのか、またどの程度まで中国人によって早期に引き継がれた非常に古い部族薬なのかは、もとより決定不可能である。〔67/68〕

原注 3.　注意せよ。toli という用語は実際に「鏡」を意味する。toli はモンゴル語において銅鏡はもちろん、ガラス鏡も意味するが、ゴルド語にはガラス鏡に対して別の用語がある。

Ⅷ. 寺廟

寺廟は明らかに満洲人を介して受容した中国人の影響に帰される。大規模なものはなく、私の知る限り共有のものもなく、すべて家族、ない

し血縁関係にある諸家族の小集団に所属する。それらは普通、規模において廟に過ぎず、主として祖先崇拝、老爺 lao-yeh（関帝 Kuan Ti）[原注 4]、そして山の霊と関連があるように思われ、それらの位牌（漢字の）が小さな前開きになった一部屋造りの建物に並べられている。家屋（倉庫として建てられたものと思しき）の背後に置かれる種類の木製偶像を除き、私は寺廟のなかに偶像が安置されているのを見たことがない。寺廟は南に面し、そして普通は家屋または家屋群の背後か、右側に位置する。というのは「好い影響」が南と西からやって来て、寺廟の方へ引き寄せられるからであり、それゆえ家屋はそれを寺廟に至る途中で遮る位置に置かれる。

トロ toro 柱の代わりに、通常廟の前に中国風のやり方で二本の柱を据えつける。これらの柱はときとして一種の「カラスの巣」のミニチュア（穀物を量る中国の斗 tou「ます」に形を似せ、それに因んで名づけられた）を支えることがある（満洲族のもとでは単一の toro/soro 柱でさえ、陰暦の新年の頃に、最も重要な祖先崇拝の儀礼のために立てるとき、しばしば斗 tou を支える）。もっと見栄を張った廟の前には、少し離れた山から運んできた一対のトウヒ属の木――モミもしくはマツ（中国語「松」sung）がよく立ててある。性質上、その一本は中国人のいう陽の原理を、もう一本は陰の原理を象徴する。陽とは男性、陽光、乾燥であり、陰とは女性、陰影、湿潤である。木は陰と陽の位置にある山で選ばれ、より陽あたりのよい斜面（南）とより陽のささない斜面（北）によって決定される。その相対的位置は慎重に書きとめられ、木が移植され廟の正面に据えられる際に保持されなければならない。マンチュリア、モンゴリアであれ、中国領トルキスタンであれ、長城を越えて中国人が移住したとき、彼らの大多数は道観以外に滅多に寺院を建設しなかったので、結果としてゴルド族のような諸部族において中国人の宗教的影響は道教が圧倒的である。〔68/69〕

原注 4.　かつては別個であった岳飛崇拝が、関帝のそれに吸収されてしまったことは注意する価値がある。

IX. 言語

ゴルド族は満洲族と対照的に、かなう限りの頑強さで自分たちの言語を保存してきた。ゴルド族自身が人口の上で、中国人に圧倒されていないゴルド村落がほとんど存在しない今日でさえ、小児はいまだにゴルド語を話す。言語が残存した主要な理由は疑いなく、ゴルド族がモンゴル人（彼らも自己の言語を保存する強い傾向がある）と同じく、滅多に中国人を妻にしなかったという事実に存する。ゴルド族の女たちに要求される辛く忙しい生活は、中国人にはほとんど耐え難いものであった。ゴルド族の女たちの方が男たちよりも中国語が不得手であるというのは注目に値する。他方、満洲族は早くからその社会を中国的な基準を模範として形成し始め、権力を掌握するに伴って中国人の女子を（ことに満洲人の目的のために協力した漢軍八旗から）家庭内へ受け入れ始めた。だから子供たちは中国語を母語として学ぶ反面、満洲語は急速に衰滅したのである。

ゴルド語は早口に話されるとき、ただちにモンゴル語を彷彿とさせるものの、どの単語も決まって最後の音節にアクセントが置かれる点で相違する。その類似性は全体として文の抑揚に由来し、中国語とは著しく異なる。中国語を完璧な正確さと流暢さで話すゴルド族でさえ、ほとんどつねに、この頑固に残り続ける抑揚の違いによって即座に見破ることができる。

ゴルド語と満洲語が同一言語に属する、相互に深く関連しあう方言である限りにおいて、ゴルド語は文字をもつといえるかも知れない。というのは、満洲王朝の末年まで、満洲文字が官立学校で旗人の子弟に教授されたからである。しかしながら、満洲文字は公的な伝達や公文書を除いてほとんど使用されず、それ故あらゆる公的伝達が満洲語で表現され、口語の慣用とは異なったままに書かれて以来、ゴルド語の口語にほとんど影響を及ぼさなかった。満洲語はかくて主に富錦や三姓といった中心地でゴルド語に影響し、そこではかなりの満洲語要素がゴルド語に生き残り、二つの言語は共通の話しことばに相互に影響しあった。こうして、

つねに限りある人口と限定された分布にもかかわらず、ゴルド族はいまなお存続する顕著な方言上の相違をその特色としてきた。富錦方言は富錦より下流のそれと異なり、富錦より上流の古い方言はまた異なるといわれる。多分これらの相違はある程度、満洲語から受けた影響の相違を反映するのであろう。他方、松花江とアムール河の合流点以下に住むゴルド族は、恐らく他の沿アムール部族からの借用語をもつであろう。〔69/70〕ゴルド族によれば、彼らは話し方によって実際に、居住する村落を的確にいいあてることができるそうである。

ゴルド語の音韻は単純であり、母音調和（同一単語内の a, i, o［の共存］、あるいは e, i, u［の共存］―しかし a と e、もしくは o と u［の共存］は話されるときは比較的まれであり、満洲文字で書留められるときにはまったくない）の強い傾向が単語の記録を容易にしている。ゴルド族自身は優れた外国語通であり、大多数が三か国語を話し、完璧な流暢さで中国語とロシア語を操る。教育のあるゴルド族は教育のない中国人よりも、ロシア語をより文法的に、かつまたより正しい発音で話すであろう。そして、ゴルド族による中国語の話し方とロシア人によるそれとはまるで比較にならない。私の会ったどのゴルド族も、語順ないし語句の逆転に伴うときたまの困難にもかかわらず、中国語を巧みに操り、そのアクセントと発音はほとんど完璧であった。つまり、異質に聞こえるということは、全体として主に文の抑揚に存するのである。ところが一方、ロシア人はたとえ中国人の間で成長したとしても、あの粗野なことば遣いと実にひどいアクセントから免れることは滅多にない。〔70/71〕

X．語彙

以下は短い単語リストであるが、体系的な語彙集であろうとは少しも試みていない。発音の主な特性は、語尾の n 音がさまざまな程度で鼻音化することである。それはほとんど聞き取れないかも知れないし、フランス語における語尾の n 音に類似するかも知れない。あるいは nh や ngh

のように聞こえるかも知れない。この他にも、u 音、ことに語頭のそれがときとして wu 音になる傾向があり、紛れもなく中国語の影響である。

〔A〕

aduch consukt kungh：ベッドカバー

afungh：毛皮帽子（shapto, aoho（ママ）も見よ）

aga：兄

aimi：シャマンの使い霊［守護霊］（シャマンに憑依する；下記の amijgê、およびモンゴル語の amiga「生命」と比較せよ）

aishin：黄金

ajan：チョウザメ（ajan sopjin：チョウザメの皮）

ajirgan：種ウマ

alin：山（urka, urukên も見よ）

ama：父（正式な呼称；baba も見よ）

amijgê saghêdi jo：意味は「主たる（北側の）家屋もしくは部屋の背後」として与えられる。多分、守護霊がそこにいることに関連するのであろう。amijgê についてはモンゴル語の amiga「生命」と、saghêdi についてはモンゴル語の saghitai「保護する」と比較せよ。

amnga：口

anchi：〜でない、〜がない

angku：布製テント

aoh（二音節）：帽子

arki：蒸留酒、「酒」

asi, asên, asun, asün：少女、女

asinai：同上（-nai は形容詞的ないし属格的前接語である）

asên boyeh：女

asên gadara, asên gadori：妻を娶る、結婚する

asên sáman：女シャマン

asên shita：娘［親族としての］（下記の shita を見よ）

〔B〕

ba：天界、空

baba：お父ちゃん（幼児によって用いられる；上記の ama を見よ）

bachilan:「小助手、付添い人、予言するときに霊を助ける人」などと説明される

banishkin tuktyuri：シャマンの霊がするように、天界に上昇すること

bihan filuli：狩りをする

bilê：小さな川

bira：小さな渓流（bilê と同一の単語かも知れない）

boyeh：男、人（下記の nioh を見よ）〔71/72〕

bucha,buchan：オオシカ（満洲語由来といわれる；下記の khumaka を見よ）

budêhên：死んだ〜、〜が死んだ

bukchun,bukchunh,bukchungh：シャマンの首のまわりに吊るす、小さな金属製偶像の個別名称の一つ

burkan：神（「神」「聖なる」に対する最も近い訳語）、シャマンの首のまわりに吊るす、小さな神像の総称

burku：本物の鏡（シャマンが使用する青銅鏡 toli とは区別される）〔C〕

chafungh unta：子供用の（丈の長い）モカシンブーツ

chêmki：トカゲ

chêrêmi：鉢（下記の munguru も見よ）

choru：ティピ［円錐形テント］、tsoru とも発音される

churako：潟の小流

churêktê：シャマンがかぶる枝角状の頭飾りにつける布リボン〔D〕

damging：タバコ（一つ目の g は硬音）

dêktê：小さな楕円形の木箱

dirkidêrê：鉄鈴付きの腰帯をつけて行うシャマンのダンス

doka：門

düri：揺籃（哈義方言、êmku も見よ）

〔E〕

êchê：父の兄弟

êchihê：シャマンの首のまわりに吊るす、小さな神像の個別名称の一つ（多分「祖先」を意味する；モンゴル語の êchighê「父」と比較せよ）

êdu mafka birê：逐語的には「ここに・クマが・いる」

êju hêtu：三戸建て中庭式家屋の東側の建物

êkin：姉

êmku：揺籃（富錦方言、düri も見よ）

êniang：母

〔F〕

fara：そり（満洲語、モンゴル語、東部チュルク語において稀な f 音の好例。モンゴル人、中国領トルキスタンのチュルク人は、f 音をしばしば発音できず、うまくいっても p と発音されるだけである。fara は後期満洲語に由来し、中国語の「扒犂」p’a-li の語源であったかも知れない。[66] さらにまた「排子」p’ai-tze〔-tze は前接語的実詞〕は多分、扒犂の短縮形ないし省略形であろう）

fonfchê：毛皮の靴下

〔G〕

ganki, ganki soun：小さな神像（たとえばシャマンの首のまわりに吊るすそれ）

gaska：アヒル

gêgê：母方の従姉（恐らく中国語の兄を意味する「哥哥」ko-ko に由来するであろう。イトコ関係は兄弟関係に同化されるように思われる。特別のイトコ呼称は母方のイトコにだけ適用されるようである。中国語の「表兄弟」piao-hsiung-ti、すなわち母方のイトコ［母の兄弟のムスコ］と比較せよ。父方のイトコは兄弟・姉妹として分類されるらしい。[67]「自己の兄弟、自己の父の弟のムスコ」を意味する中国語の「叔兄弟」shu-hsiung-ti と比較せよ）

giam dakchuri：花嫁

gilachan sopku unta：魚皮のモカシン靴（これに使用する皮は普通、下記の jêlu と称する魚から取るという）〔72/73〕

gidsoh：シャマンが使用する太鼓のバチ（哈義方言）

gishi：同上（富錦方言）

giucha, giuchan：ノロジカ

giuchên siumkaneh：裁縫用のノロジカの腱

gida：クマ狩りの槍

goo：雌ウマ（実際上、二音節として発音される）

gufa：父の父（yeh-yeh も見よ）

〔H〕

hahanai：男（-nai は前接語）

hailung：ウミガメ（中国語の「海龍」に由来）

hairta：ウラ wula 草（冬期、モカシン靴に詰め込むのに用いる）

hajunh：鉄鈴のついたシャマンの腰帯（下記の shisa を見よ）

handahan：何かしらオオシカに似ているが、しかし別個の動物（多分トナカイであろう）、toki を見よ

heiki：ズボン（nas heiki：皮のズボン）

huiki：シャマンの枝角状の被り物（上記の churêktê と下記の tashirti を見よ）

hunaja, huonajieh：妹、父方の従妹[68]

hurdsa：寝袋（nas hurdsa：皮の寝袋）

husha：野生のガチョウ（野生のハクチョウか）

〔I〕

ihan：ウシ（下記の yehê を見よ）

ima boyehni：「河の下流に住む人たち」（哈義で使われる用語；「魚の民」を意味するかも知れない）

imaha：魚（yarhu も見よ）

iniang：母の姉妹（中国語の姨娘 i-niang に由来）

isala：目

ishku：小さい

ishku toli：シャマンが衣装の一部として着用する類いの小さな青銅鏡

〔J〕

jabjan：シャマンの槍［の柄］をくるむヘビ皮の鞘

jangfang：蚊帳（中国語の帳房 chang-fang に由来）
jêlu：魚の一種（多分、サケであろう）
jiujiu：母の兄弟（中国語の舅舅 chiu-chiu に由来）
jo：家屋
jukun, jukunh, jukungh：カワウソ
juzhupti, juzhuptinh：シャマンのスカート（juz-hupti と発音する）
〔K〕
kachênma：手袋
kachki：外套
kêku：カッコウ（モリバトかも知れない；tuturki を見よ）
kêshka：ネコ（恐らくロシア語の koshka に由来する）
khumaka：オオシカ
kiachki：スキー（富錦方言；満洲語に由来するとされ、ときに karchi と発音する）
kingli：同上（哈義方言）
kirinh：シャマンの首のまわりに吊るす、小さな神像の個別名称の一つ〔73/74〕
konggukhta：シャマンの衣装に取りつける小さな鈴
kori：天井から吊り下げるシャマンの「ワシ」
〔L〕
laha：捩りあわせた縄で築いた壁[69]
lahada：黒白模様の一種のミサゴ
lamu：海
lamunka, lamungka：部族名、「海の民」
laolao：母の母（中国語の姥姥 lao-lao に由来）
lao-yeh：母の父（中国語の老爺 lao-yeh に由来）
lochiringi：一種の脚絆、ないし脛当て（nas lochiringi：皮の脚絆）
〔M〕
mafa：老人

mafka ofuranieh：クマの鼻、鼻づら（薬用、下記の ofura を見よ）

mamg：大河（中国語の「江」の同義語、松花江・アムール河・鴨緑江等々といった規模の河川に適用される）

mamung：アムール河下流に対する呼称

meikhê：ヘビ（小型の）

miao：寺院、戸外の社（中国語の廟 miao に由来）

morin：ウマ

morin souni：ウマの守護霊

muduri：龍

muk：水

munguru：鉢（上記の chêrêmi を見よ）

〔N〕

na：大地（富錦方言）

nabé：ゴルド族に対する呼称（富錦方言で「その土地の人びと」を意味するとされる；上記の na と boyeh を見よ）

naboyehni：「その土地の人びと」（哈義方言）

naha：炕 k'ang（床面より高くした、泥造りか煉瓦造りの寝台；煙道によって暖める）

nainai：父の母、神霊もしくは女神の名称でもある（中国語の奶奶 nai-nai に由来）

nas：皮、革、毛皮

nibgu：大きな森（下記の showo を見よ）

niktê：野生のイノシシ

niktê nasani bosu unta：イノシシ皮を靴底にした、子供用のブーツ丈モカシン（多分 bosu は靴底で、つまりは「イノシシ皮の靴底のモカシン」を意味する）

nioh：男（上記の boyeh を見よ）

nirgi：ヤナギの茂み（私が訪れた niurgu という村の名称は、多分この語の中国語的訛りであろう）

no, noo：弟、父方の従弟[70]

〔O〕

ofura：鼻（上記の mafka ofuranieh を見よ）

orhoda：チョウセンニンジン

〔P〕

pitska：マッチ（恐らくはロシア語の spíchka に由来）

〔S〕

sáman（稀に shaman）：シャマン（これは最後の音節にアクセントを置かない、非常にめずらしい単語の一つである；そのアクセントはほとんどいつも最初の音節にあり、ここまで一般的ではないが、平板なアクセントになることもある）

sáman mafa：「シャマンの老人」（シャマンに対する丁寧な呼びかけ方）

saghêdi：多分意味は「守護する」

saghêdi toli：シャマンが邪悪な影響力に対するお守りとして体の前後に着用する大きな［青銅］鏡の名称）　〔74/75〕

sahalin：アムール河、アムール河上流（多分モンゴル語の amor「平和」に由来する amur という名称は使用されない）

sarka：シャマンの首のまわりに吊るす、小さな神像の個別名称の一つ

sarmaktê：眉

sêbu：クロテン（軟音の l を伴うロシア語の sóbol’ と比較せよ）

sêjên：荷馬車

sênkirei：香（中国の線香ではなく、ゴルド族と満洲族が用いる類いの粉末香）

sêrêmurê：「動いている」、「痙攣している」

shapto：毛皮帽（上記の afungh を見よ）

shingêri：ネズミ

shisa：シャマンが身に着ける腰帯上の長い鉄鈴（上記の hajunh を見よ）

shirmafu, shirmafunh：シャマンの槍

shita：息子

showo, shuowu：森林（二つ目の発音は中国語の影響を示す；上記の nibgu を見よ）

shulu kochkani：ヤマネコの爪（下記の suóli と比較せよ）

soro：toro を見よ

souni mafa：「神霊の老人」、木製の神像

souni horundo bis soun：頭部に「指状突起」のある木製神像、狩猟の神霊（soun は二音節である）

sujiako：ライフル銃の台架

sunggeri：松花江（満洲語の名称と同じで、文字どおりの意味は「銀河」である。ゴルド族と満洲族はアムール河は単なる支流で、松花江こそが本流だと看做しており、中国人はこの先例に倣った。従って、我々がアムール河下流と呼ぶものを、彼らは松花江と称する）

suóli：イタチ、ことによるとヤマネコ（第二音節にアクセントがある興味深い単語である。また上記の shulu を彷彿とさせ、どちらも中国語の猞猁 she-li を示唆する。この語が suóli のアクセント変化に影響したのかも知れないが、猞猁の完称はそれ自体が中国語起源ではないことを暗示する三音節形、猞猁猻 she-li-sun である）

suriêj hêtu：三戸建て中庭式家屋の西側の建物

susu：廃墟、見捨てられた集落

〔T〕

tarkhuntayeh：シラカバ樹皮製の小箱（私は tarkhun がシラカバを意味すると信ずる）

targê：小さな池、潟

tashirti（発音は tas-hirti）：シャマンの枝角状の被り物に取りつけるクマ皮のリボン（上記の huiki を見よ）

tashka：トラ

tatama：丈の短いブーツ式のモカシン（この語が恐らく地方の、つまりマンチュリア方言の中国語 t'ang-t'u-ma へ転訛したのであろう。この中国語はゴルド族の土地のはるか南方で使用されているので、満洲語形に由来したものであろう）[71]

têkêni：槍の留め金、またはボタン（ここで槍の刀身が柄にはめこまれる）

têmchka, têmptka：三枚板カヌー　〔75/76〕

têrki：天界の一階層

to：火

toki：トナカイ（handahan も見よ）

topto：多分、一種のライチョウ（土地の中国語方言で棒槌雀児 pang-ts'ui ch'i ao'rh、「人参鳥」と称する。トロ柱の傍らに立てた柱の上に乗せる木製の鳥形偶像の名称）

torki：イヌ橇

toro：toro 柱（soro はより一般的でない語形。また「家の背後の霊たち」を意味するともいう。満洲語 - 中国語形の solo は soro に由来し、満洲族のある種の供犠においてシャマン柱として使用されたり、人参採集者の棒としても使用される。どちらも索倫杆子 so-lo kan-tze と称する）

tsoru：ティピ（choru のより一般的でない語形。語頭の ts は多分中国語の発音が影響した結果であろう）

tuturki：モリバト

tyoko：ニワトリ

〔U〕

uku：クロテン用の網罠

ukul：漁網（uku と同一単語かも知れない）

ulki：リス（ことによるとイタチ）

umêkchi：釣る（小さな魚を）

umurchên：シラカバ樹皮カヌー、また両端同形になった小さくて快速の三枚板カヌー

unta：丈の高いブーツ型モカシン（転訛形で wunta とも。unta はそれ自体高いことを意味するのであろう。モンゴル語の undur、口語形 unterê「高い」「丈が高い」と比較せよ）

untih：シャマンの太鼓

urgieh：ブタ

ura：妻

urka, urukên：山

urkê：戸

ushuku：小山、丘

utiuri, ütüi：犠牲を捧げる、宗教儀礼を挙行する、シャマン儀礼を行う

utku：聖なる樹木

〔W〕

wakshanh, wokshanh, wakshênh：カエル、トカゲ（恐らく三者のどれも本来的形態ではあるまい）

weihu：カヌー、あらゆる小舟（多分中国語的発音によって改変された満洲語であろう）

wuksa, wuksari：トカゲ（上記の wakshanh を見よ）

〔Y〕

yadanya：ハクチョウかガチョウのどちらか

yaharko：火鍋、炭火鉢

yarhu：魚（上記の imaha を見よ）

yehê：ウシ（ihan も見よ）

yehyeh：父の父（中国語の爺爺 yeh-yeh に由来；gufa も見よ）

yinda：イヌ

yindalin：イヌの霊、イヌの守護霊

yoping：油（銃の手入れ用）の壷（中国語の油瓶 yu-p'ing に由来）〔76/77〕

数詞

1	êmkê	7	nadan	15	topkun※	70	nadanju
2	juru	8	jakung	20	wolin	100	êmê tangwu
3	ilan	9	uyun,wuyun	30	guosun	1,000	êmê minggan
4	düyin	10	juan	40	dêhi	10,000	êmê toman
5	sunja	11	juamkê	50	gusai[72]		
6	ninggu	12	juanju	60	ninju		

※ 15 topkun を除き（この変則性は満洲語でも生ずる）[73]、19 までの数詞は［たとえば 11 juamkê ＜ juan êmkê のように］juan と合成することに

よって規則的に作られる。

訳　注

① 三姓 ilan hala という地名は、ここに居住した「窩稽（weji）韃子」の三氏族に由来する。楊賓『柳辺紀略』巻三によれば、革依克勒（克益克勒）、祜什喀里（虎習哈礼）、拏耶勒（閙雷）の三姓を指し、彼らは康熙年間には同地の駐防八旗に編成されていた。『吉林依蘭県志』人物門・世族によれば、革依克勒氏は明末天啓年間にウスリー河口から三姓地方に遷居し、一帯を勢力下に収めたと伝承されている。

② 清・祁嶲藻（1793-1866）の『富克錦輿地略』（『黒龍江述略（外六種）』1985所収）によると、富（克）錦より以西上流の富替新、喀爾庫瑪、瓦里霍呑、蘇蘇屯の各地、また富（克）錦より以東下流の嘎爾当、霍呑吉林、図斯科、呢爾搏、拉哈蘇蘇、奇奇喀、莫力洪庫、街津、科木、徳勒奇、額図、阿瑪勒洪、奇訥林、富当吉、色勒街庫の各地に「赫哲兵」が住み、富替新西方の蘇蘇屯と蒙古力は「赫哲等の種熟地」であったという。

③ 富錦は、明代にはすでに弗提斤・弗踢奚の字面で現れ、ここに弗提衛が設置された。和田清「明初の満洲経略 下」（『東亜史研究 満洲篇』1955）pp.358-361参照。

④ ゴルド族の別名「赫哲」の語源は、一説によるとゴルド語で東を意味する hêji にもとめられるという（嶋田好「近代東部満洲民族考」『満洲学報』5、1937、p.84）。

⑤ 金兀朮とは、金太祖完顔阿骨打の第四子兀朮（漢名宗弼）である。兀朮が特に祖先として選ばれたのは、中国の演劇や語り物などで、岳飛の敵役として広く人口に膾炙していたからであろう（村田治郎「金の兀朮の伝説」『学海』4-4、1947）。

⑥ 「悪い」「悪賢い」「二心のある」という意味の ku-tung がいかなる中国語に該当するのか断言できないが、しばらく「【故道 gu-dao】（性格が）ひねくれている、好んで悪い考えを出す。また“古董”に作る」（許皓光・張大鳴編『簡明東北方言詞典』1988、p.147）の古董 gu-dong（ウェード式では ku-tung）に擬しておきたい。

⑦ 満文『満洲実録』巻一によれば、この子供は自ら「我が姓は天より降れる愛新覚羅 aisin gioro、名は布庫里雍順 bukūri yongšon」と名乗っている。

⑧ 東洋文庫清代史研究室訳註『旧満洲檔 天聰九年 1』1972 の天聰九年五月六日

条（pp.124-125）に、黒龍江フルハ部（現愛琿附近を中心に分布した部族）から帰順したムクシケなる人物が、その地にマンジュ国人の始祖ブクリ・ヨンションの伝説が伝存していると語った記事が見える。その翌年に『満洲実録』の原拠である『太祖太后実録』（現存せず）が告成するので、ムクシケの発言内容が『太祖太后実録』編纂過程で採用されたのではないか、と推論されている（松村潤「清朝の開国説話について」［初出 1972］『明清史論考』2008、pp.218-230）。

⑨　新満洲 ice manju とは旧満洲 fe manju に対する用語で、もとは太宗ホンタイジ時代に満洲八旗に編入された女真 jušen 族の近縁諸部族を指したが、後には清朝の入関定鼎後に満洲八旗に編入された諸部族の成員を意味するようになった（商鴻逵等編『清史満語辞典』1990、pp.217-218）。

⑩　たとえば、メルゲン地方北方のソロン族は「金朝を建国した女真族の子孫だと主張する」という（Ravenstein, E. G., *The Russians on the Amur*, London, 1861, p.357）。

⑪　マンジュ・グルン Manju gurun、すなわち建州女直は明末時点でスクスフ・フネヘ・ジェチェン・ドンゴ・ワンギャ五部からなり、対するフルン・グルン Hūlun gurun、すなわち海西女直はハダ・イェヘ・ウラ・ホイファ四国から構成された。この両者はジュシェン（女真・女直）人意識を共有したが、程度は不明ながら方言・習俗を異にしたようである。

⑫　文化英雄とは、文化起源の神話において不可欠とまではいえないにせよ、重要な役割を果たす要素であって、人間に文化諸要素を伝授した人物を指し、部族祖としての性格を帯びる場合が多い（田村克己「英雄神話」『縮刷版 文化人類学事典』1994、pp.99-100）。

⑬　このことは内モンゴルにもあてはまるらしく、たとえばボロ・ホトン（旧遼上京臨潢府）附近のモンゴル人は、遺跡をカウリーフンの居城とし、中国人はこれを高麗人（カウリー）のものと看做す。鳥居龍蔵・きみ子『満蒙を再び探る』［初出 1932］（『鳥居龍蔵全集 第九巻』1975 に再録）pp.450-451 参照。

⑭　三姓 ilan hala 集団が現地の駐防八旗に編入されたのは康熙五三（1714）年であり、富錦以下の集団（これを清朝は「七姓」nada hala と呼んだ）が八旗に編入されたのは清末の光緒七（1881）年である。この七姓集団が今日の中国領赫哲族の直接的な前身である。八旗編入の歴史的背景と経緯については、松浦茂「十八世紀のアムール川中流地方における民族の交替」（『清朝のアムール政策と少数民族』2006）pp.311-340 が詳論する。

⑮　ゴルド族は通常、分布地によってスンガリ・ゴルド、ウスリー・ーゴルド、アムール・ゴルドに大別される。なお、マンチュリアを含む東北アジアの民族名

とその異称に関しては、加藤九祚『北東アジア民族学史の研究』1986 の資料篇Ⅰ「北東アジア民族名考」に詳しい解説がある。

⑯　ギリヤーク族の自称はニヴフ Nivkh であるから、ラティモアのいうギリミンは他称を自称と取り違えたものであろう。

⑰　『吉林外記』巻二は吉林烏拉を「吉林、沿也。烏拉、江也」、すなわち「沿江」と解釈する。girin には「峻崖」の意味もある（河内良弘『満洲語辞典　改訂増補版』2018、p.477）。

⑱　キレは、キーレン、キレルあるいはサモゲルとも称され、ギリヤークよりはむしろゴルド族に近縁な北方ツングースの一支である（マーク Maak,P.K.［北方産業研究所編訳］「アムール河流域民族誌（三）」『季刊ユーラシア』7、1972、p.184）。ちなみに、このマークの「民族誌」は同著『アムール紀行』1859（露文）から「民族に関わる部分を編訳したもの」である（「アムール河流域民族誌（一）『季刊ユーラシア』5、1972 の加藤九祚氏序文による）。

⑲　ソロン族は現在の中国では鄂温克族に分類され、ここには鄂温克 evenki を自称とする三つの北方ツングース集団（索倫（ソロン）・雅庫特（ヤクート）・通古斯（ツングース））が一括される。ソロン族はもとアムール河上流（ゼーヤ河との合流点以上）に分布したが、一七世紀中頃、ロシアの圧迫を避けるべく清朝の命令により嫩江流域に遷徙させられた。現在のソロン族はフルンブイル草原に分布し、文化的にモンゴル化したツングース遊牧民と位置づけ得る。なお、ビラルは後出のオロチョン族を構成する一地域集団である。

⑳　ロシア関連の言及はすべて『吉林通志』巻七・大事志一（第 36・37 葉）に見える。

㉑　分布地から考えてラムート（エヴェン Even）ではあり得ない。ラムートは、レナ河からオホーツク海沿岸にわたって分布し、少数がカムチャッカ半島にも住む。

㉒　ラムンカがウラジオストク附近に分布すること、およびラティモアの記述するラムンカの習俗がキャカラ族（奇雅喀喇）のそれに符合することから判断して、キャカラすなわちツングース系のウデヘ Udehe 族と見て誤りない。奇雅喀喇の習俗については、曹廷杰『西伯利東偏紀要』（光緒一一［1885］年、一名『俄界情形』）参照。

㉓「ゴルド族がヘジェンと自称する」というのは、多分対外的にであって、仲間内ではラティモアも「Ｘ．語彙」の項目において解説するように、nabé・naboyehni（土地の人びと）を用いたのであろう。ロシアでは今日、ゴルド族を自称によって nai（人）, nanai, nani（ともに土地の人）と呼ぶ。

㉔　ヘジェ・ヘジェンの漢字音訳には、赫哲、黒折、和真の他に、黒斤、黒金、黒津、徽欽などがある。

㉕　この習俗は『清稗類鈔』風俗類や『瀋故』巻四によると、マンチュリア全域に見られ、平坦な後頭部でただちに奉天（遼寧）・吉林・黒龍江三省出身であることが分かるほどであったという。ただし、枕に詰め込むのは穀類ではなく、豆類であったらしい。

㉖　中国人は満洲族を「小米子」somize と呼称するが、それは自分たちが栽培しないある種のキビを栽培するからであった。シロコゴロフ Shirokogoroff , S. M.（大町篤三・戸田茂喜共訳）『満洲族の社会組織』1967、p.202 参照。

㉗　張興東編著『蒙古参考書目』1958、p.43 に見える『大元勃興青史』*yehe yuan ulus-un manduγsan törü-yin köke sudur* のことであろうか、後考に俟つ。

㉘　『皇清職貢図』巻三「七姓 nadan hala」条（荘吉発『謝遂《職貢図》満文図説校注』1989、pp.182-183）に「地産莜麦。雖知耕作種、而専以漁猟為生。bade mere tucimbi. tarire usire be sacibe, damu nimaha gurgu butame banjimbi.（［その］土地にソバを産する。農耕を知るとはいえ、専ら魚と野獣を獲って暮らす）」とある。七姓については注⑭を参照。

㉙　「Ｘ．語彙」の choru, tsoru 参照。前掲の曹廷杰『西伯利東偏紀要』に黒斤（短毛子ないし剃髪黒斤）、つまりロシア領のゴルド族の住居に関して「冬夏所止之処、取樹皮或草為屋、有安口（樺皮為之、捕牲住）、搓羅（草蓋用棚、捕魚住）、傲苟（冬行晩宿所住、或布或樹皮為之）、胡莫納（樺皮小円棚、夏捕魚住）、麻衣嘎（不剃髪黒斤捕魚小棚）、刀倫阿吉嚷莽（行船時、晩宿岸上小布棚）諸名。平居皆草房、在沿江、有暖匟（炕）」とある。「安口」「搓羅」に関しては「Ｘ．語彙」の angku・choru と比較せよ。

㉚　ゴルド語で家屋を jo（「Ｘ．語彙」参照）ないし tuo（泉靖一「赫哲（ゴルジ）族踏査報告」［初出 1938］『泉靖一著作集 1』1972、p.67）といい、エヴェンキ（北方ツングース）の円錐形天幕を意味する đu（＝ džu）や ʒo（＝ dzo）（シロコゴロフ Shirokogoroff , S. M.［川久保悌郎・田中克己共訳］『北方ツングースの社会構成』1941 の「特殊語彙」［逆頁 p.54・p.72］）に類し、あるいはラティモアの主張を傍証するかも知れない。

㉛　紙を窓枠の外側に貼るのは、マンチュリアの厳寒が原因である。室内と戸外の寒暖差が非常に大きいため、窓枠の内側に紙を貼ると、窓の格子と紙の接合部に凍結した氷雪が室温で融けて紙をはがれやすくする上に、格子自体を腐食させてしまうのである（韓暁時編著『満族民居民俗』2004、pp.1-4）。

㉜　『清稗類鈔』宗教類によれば、在理（在裏）教は白蓮教の別派で、清代嘉慶・

道光年間に天津の製粉業者尹某によって創始され、直隷・奉天・吉林に信者が多かったという。この宗派は飲酒・喫煙を禁ずる戒律を有し、違反すれば破門された。

㉝　文語満洲語でもネコを kesike というので、ロシア語からの借用語説は成り立たないであろう。満洲族はゴルド族で愛好されるネコを一手に取引し、儲けが台無しにならないように去勢した雄ネコだけをもたらしたという（Ravenstein, E. G., *The Russians on the Amur*, London, 1861, p.381）。

㉞　マークいわく「そり（トキー）の前部に綱がついており、先端に首輪のついた別の綱をこれにつなぎ、これを犬にかけるようになっている。荷物の重量によって二対または四対という風に縦二列に犬をつなぎ、先頭に離れて一頭つけ、これに先導させる」（前掲「アムール河流域民族誌（三）」p.207）。

㉟　満洲族のシャマニズム儀礼においては、イヌが追い払われるのはもとより、参列者がイヌ皮の帽子や外套を着用するのも厳しいタブーとされた（前掲シロコゴロフ『満洲族の社会組織』p.144 の［訳者注］参照）。

㊱　ウスリー河のゴルド族が iluam-yu と tamara と称する二種類の魚を専ら生食したという一九世紀中頃の観察がある（江藤利夫「黒龍江を下った二人の仏蘭西羅馬僧の話」『韃靼』1938、p.87）。赫哲語で「生魚」を塔爾卡といい（劉忠波『赫哲人』1981、p.10）、ツングース系のナナイ、ウリチ、ウデヘ、オロチなどは生魚を一種の「たたき」にした料理をタラ、ギリヤークはタルクと称する（佐々木史郎「沿海州における食文化」［森浩一編『日本海シンポジウム 日本海沿岸の諸民族の食文化と日本―味噌・醤油・酒の来た道』1987］pp.65-66）。

㊲　この種のカヌーをウェイフ weihu（本文後出）という。『柳辺紀略』巻四に「寧古塔船有二種、小者曰威弧、独木、鋭首尾、古所謂刳木為舟者是也。可受三四人。……威弧、随処皆有。秋冬則以為馬槽」とあり、ウェイフは河川が凍結する秋冬、飼い葉桶として古来常用されたようである。

㊳　この鼻づらは岸へ漕ぎ寄せたとき、舳先を痛めないように取り付けてあるらしい（前掲マーク「アムール河流域民族誌（三）」p.197）。

㊴　cross-bench とは、辞書的には ‘a bech placed at right angles to each other benches’（*The Oxford English Dictionary*, second edition, vol.4, 1989, p.54）と説明されているが、ここでの用例とは意味的に齟齬するので、「脚部が x 字状に交叉した座席」と訳しておいた。

㊵　ヌルハチが人参の保存方法を発明したという有名な逸話は、『満洲実録』巻三では乙巳年（1605）三月条に繋けられているので、1575 年という年次は何かの錯誤であろう。

㊶　この他、索莫杆・索摩杆・索木杆・薩莫杆などの異訳がある（石橋丑雄『北平の薩満教に就て』1934・pp.187-194、赤松智城・秋葉隆『満蒙の民族と宗教』1941・p.196）。

㊷　満洲族には「満洲皇帝の祖先が山奥で人参を採っていた頃に、その人参採りの棒を地上に立てて、豚を殺して祭った」のが杆子祭の起源であるという伝説がある（前掲『満蒙の民族と宗教』pp.191-192）。

㊸　棒槌は棒棰とも書く。二〇世紀初頭、沿海州南部を踏査した B.K. アルセニエフ（1872-1930）によれば、ゴルド族の狩人デルスは野生の人参を「パンツイ」と呼んでいる（アルセニエフ［長谷川四郎訳］『デルス・ウザーラ』［河出書房新社版］1975、p.125・p.359）。

㊹　前注のデルスは、トラ（アムバ）は人参の守護神だから殺してはならないと述べ、またトラと出会った際には叩頭してトラに話しかけ、縄張りに踏みこんだ非礼を丁重に詫びている（前掲『デルス・ウザーラ』p.18・pp.94-95）。その一方で、前掲 Ravenstein, *The Russians on the Amur*, p.382 によると、ゴルディ等の「原住民が出くわす最も恐るべき敵はトラであって、そのためトラに関してははなはだ迷信深く、トラについて話すのさえ、悪い結果が起こる恐れがあるとして避けたがる。トラの偶像は木に彫刻され、森林の大木の根元に置いたり、お守り（すなわち、それを所持するものをトラの襲撃から護ると想像されている）として身に着けたりする。今でもゴルディは時おりトラを殺し、それを偉業として誇る」という記述もある。なお、トラをめぐるアムール下流地域の伝承に関しては、荻原真子『北方諸民族の世界観　アイヌとアムール・サハリン地域の神話伝承』1966、pp.174-207 が詳しい。

㊺　マーク「アムール河流域民族誌」（1855 年当時の調査）と曹廷杰『西伯利東偏紀要』（1885 年の探査報告）を比較すると、ロシア領のゴルド族のクマ狩りについて前者が詳細な記録を残す（次注参照）のに対し、後者は一言もしていない。軽忽な判断は控えるべきであろうが、両者を隔てる三〇年間の意味は一考の価値がある。

㊻　マークの描写によれば、クマ狩りの情形は以下のようである。「ホゼング族（ヘジェンに同じ：引用者）は……熊に向かって一騎打ちの猟をする。彼らは普通弓で熊を射かけるのであるが、一矢を以てしとめることができない場合が往々ある。手負いの熊が怒り猟師に躍りかかってくる時、彼は槍（ギッダ）を以てこれを迎えるのである。鉄の槍先は一尋以上の柄にとりつけてあり、猟師は熊が躍りかかってくるのを、槍の石突きの方を地につけて迎える。激怒した野獣は……自ら槍先にかかるのである。その時、熊はさらに猟師に躍りかかろうと

あがくに従って、槍に深く突き刺されながら身をもがくのであるが、槍先と柄のつぎ目のところに草ひもで杵形の棒がつばのようにしばりつけてあるので、……猟師との間にある距離をおくのである。そのうちに、痛みと出血のために、野獣は力を失い、勇敢な猟師の獲物となるのである」（前掲「アムール河流域民族誌（三）」p.191）。

㊼　この記事は『吉林通志』巻六・天章志収載の乾隆帝御製詩「盛京土産雑詠十二首」第八「堪達漢」に見え、「履洳迅行如蹴雨、逢岡遅進似騰煙」とあり、その割注に「是獣生山中而喜水、行水則速。行山則遅。亦異聞也」とある。なお、『黒龍江外記』巻八によると、カンダハン（満洲語 kandahan、漢語駝鹿）とトナカイは別個の動物であり、後者は満洲語で oron buhū（漢語四不像）という。

㊽　ウラ草は「護臘」「烏喇」などとも音訳する。『柳辺紀略』巻三に、「護臘、革履也。絮（しく）毛子草于中、可御寒。……毛子草……一名護臘草。土人語云、『関東三件宝。貂鼠、人参、護臘草。』……」とあるように、ウラ草の語源は大河のウラではなく、「革履」に求められる。また高士奇『扈従東巡日録』巻下・附録も「革履」を「烏喇」と呼び、「烏喇草」は本来無名であったと明言する。ただし、満洲語の ula には革靴の意味はないので、恐らくモンゴル語の ula（足の裏、靴底）からの借用語であろう。モンゴル語の ula に関しては Lessing, F. D., *Mongolian-English Dictionary*, Berkeley and Los Angeles, 1960, p.868 参照。

㊾　『扈従東巡日録』巻下・附録に「薩喇、木板鞋也。長尺許。以皮鞁之、歴雪磧峻嶺、逐獣如馳」とあり、満洲人はスキー板ないしカンジキを「薩喇」と呼んだが、これに該当する満洲語を確認できなかった。

㊿　訳者序言でもふれたように、本章はこれのみ単独で、すでに長谷川四郎氏によって「ゴリド族の社会構成」（『書香』15-6、1943）として訳出されている。

51　ラティモアが掲げる①～⑨の氏族名は、来源不詳の kumara と mengjir を除き、三姓 ilan hala と七姓 nadan hala の系統を引くと考えられる（前掲松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』p.332-334）。また、ゴルド氏族の漢姓は、すべて前掲泉靖一「赫哲（ゴルジ）族踏査報告」p.65 掲載の対照表に依拠した。ただし、Udingke の漢姓は「烏」の他に、同音の「呉」とも称したようである（劉忠波『赫哲人』1981、p.7 ）。

52　『清稗類鈔』姓名類によれば、清代順治・康熙・雍正・乾隆四朝の満洲人大臣には、満洲姓（漢字音訳）の一字、満洲名（同上）の一字を漢姓として転用したものが看取される。前者としては舒穆録（šumuru）元夢が徐（šu）元夢と名乗って以来、その子孫が徐氏を称した例があり、後者としては伊爾根覚羅顧八

代（irgen-gioro gūbadai）の顧氏、西林根覚羅鄂爾泰 sirin-gioro ortai の鄂氏、章佳尹泰 janggiya yintai の尹氏などの例がある。

㊸　満洲族では、父が告訴したときには父の兄弟が干渉することによって死刑が取り消され、母が告訴したときには、母の兄弟が刑の執行を無効にできるのに対して、新疆イリ地方の満洲族では、裁判事件に干渉するのは母の兄弟だけの特権とされている（前掲シロコゴロフ『満洲族の社会組織』pp.214-217）。

㊹㊺㊻　ラティモアが記述するイトコ婚規則とは要するに、男子を自己 ego とした場合、母方並行イトコ婚（母の姉妹のムスメとの結婚）と母方交叉イトコ婚（母の兄弟のムスメとの結婚）の許可に尽きる。しかし、これは飽くまでも許可に過ぎず、社会的に望ましい婚姻対象としてつねに選好されたというわけではあるまい。かりに母方交叉イトコ婚が選好された場合、確かに女子は所与の二氏族間を一方向にしか流れない。換言すれば、一組の姉妹は必ず同一氏族に婚入することになるが、そうすると彼女らの子供たちは同一氏族の成員となるから、無論結婚できず、ここにおいて母方並行イトコ婚の許可と抵触せざるを得なくなる。なお、ゴルド族のイトコ婚規則と中国人のそれとの一致に関しては、中国人が父方交叉イトコ婚を「骨血（精血）倒流」として嫌悪し、母方交叉イトコ婚を「骨血不倒流」として許可する慣行（大山彦一『中国人の家族制度の研究』1958、pp.45-46）とまさに軌を一にした事実を指摘すれば十分であろう。

㊼　いわゆる人獣相婚譚のなかでも動物亭主の類型に属する説話である。文化的にゴルド族に近似する部族であったと推測される具州（尼麻車）于知介（明代の東海ウェジ部ニマチャ氏族）が、人獣相婚を紛れもない現実のできごととして周囲に喧伝した事実を、『李朝実録』世宗二一（1439）年七月戊申条が以下のように記録する。

> 具州于知介等喧伝言、「……于知介之俗、女皆佩鈴。歳戊午（1438）五月、有三女因採樺入山。一女還家、二女不還。是年十一月、猟者入山捕熊、聞木空中有鈴声。斫木視之、二女皆携児。問其由、答云、『去五月、因採樺到山間、迷路不得還家。仍雄熊脅与交、各生児子。』其児面半似熊形。其人殺其児、率二女而還。」

こうしたニマチャ氏族の動物観に関しては拙稿「ニマチャ雑考」（『立命館文学』609，2008、pp.17-31［逆頁］）を、またクマをめぐるアムール下流地域の伝承に関しては荻原真子『北方諸民族の世界観　アイヌとアムール・サハリン地域の神話伝承』1966、pp.208-232 を参照されたい。

㊽　クマ祭りは注㊺と同じ理由で、1855 年から 1885 年までの間に消滅したのであろう。事実、前掲『西伯利東偏紀要』は、長毛子（不剃髪黒斤：オルチャ

Olcha）のクマ祭りを「以弄熊為楽」、費雅喀喇（Fiyaha：ギリヤーク）のそれを「喜弄熊、……聚隣里親朋、射殺為懽」などと明記するのに反して、短毛子（剃髪黒斤）についてはまったく沈黙する。

⑲　ゴルド族はかつて屋葬の慣習を有した。死者は棺に納め、その同じ場所に美しい彫刻を施した丸太小屋を建て、故人が生前使用した日用品を置いた（前掲「アムール河流域民族誌（三）」p.199）。

⑳　ゴルド族を含むツングース系民族に行われた樹上葬については、河内良弘「兀者衛に関する研究」［初出 1975］（『明代女真史の研究』1992）pp.255-257 に詳しい言及がある。

㉑　ロパーチンによれば、ゴルディ Goldi は人間の魂には三つの形態、omiya, yergeni, fania があると信じている。omiya は生後一年目の幼児に存在し、その間に幼児が死亡すると天 boa に飛び去り、再び地上に戻って女性の胎内に宿る。幼児が生後一年を生き延びると、別の魂である yergeni に置き換わる。yergeni は生命魂であり、人が死亡すると fania に形を変え、シャマンによって地下にある死者の国 buni に導かれる（Lopatin, Ivan., *The Cult of the Dead among the Natives of the Amur Basin*, Hague,1960, pp.27-30, p.44）。

㉒　シャマンの漢字音訳には薩満・薩瑪・薩摩・薩蛮・薩嗎・撒麻・叉馬などがある（石橋丑雄『北平の薩満教について』1934、pp.7-8）。南宋・徐夢莘『三朝北盟会編』巻三に、兀室（完顔希尹）を「国人（女真人）は号して珊蛮と為す。珊蛮なる者は女真語の巫嫗なり。変に通ずること神の如」しとあるのが、漢字音訳されたシャマン shaman の初見である。

㉓　マークがシルヴィという松花江口の村落で見かけたトロ柱は下記のようであった。

「私の注意を最もひきつけたのは、今までどこでも見たことがない偶像である。小屋の一軒一軒の前に、丸太に彫りつけた偶像が地上に立っている。丸太の上部は人間の頭の形に刻んであり、眼口が描かれており、下の方は胴の形をしている。丸太小屋に面した方には上から下へ次のような像が描かれている。

①　人体の偶像、球形の胴には手がなく、足だけがある。

②③　短い尾をもったカエルに似た動物の偶像

④　①と同じ人形の偶像

⑤　とぐろを巻いた二匹の蛇の偶像

⑥　カエルに似た動物の偶像、これには尾がない

⑦　人体の偶像

丸太の別の側面には、二匹の蛇の代わりに二頭の四足獣を描いた彫刻がして

ある外、上述と大同小異である。他の小屋には、また異なった彫刻の偶像が立てられている」（前掲マーク「アムール河流域民族誌（三）」pp.170-171）。

⑭　ゴルド語 soun は、北方ツングース諸方言の seveki, seven、ネギダール語の sevekhi、オロク（オロッコ）語・ウデヘ語・ナナイ語の seve、満洲語の soki（soko, sokū）の同系語である。詳しくは Shirokogoroff, S. M., *Psycomental Complex of the Tungus*, London,1935, pp.160-161、および前掲拙稿「ニマチャ雑考」pp.19-24 参照。

⑮　マークもまたアムール河沿岸のホダリーというゴリド族村落において「シャマンは毎朝やって来て、病人のそばで呪術といけにえを捧げる儀式をとり行う」情景を目撃している（前掲「アムール河流域民族誌（三）」p.203）。

⑯　ラティモアは満洲語における f 音を稀少とするが、実際上、文語（羽田亨編『満和辞典』1972 復刻版に準拠）でも、口語（山本謙吾『満洲語口語基礎語彙集』1969 に準拠）でも相当数にのぼる。むしろ極度に少ないのは p 音である。また、『柳辺紀略』巻四が「扒犂」p'a-li を「扒犂、土人曰法喇」と明記することに徴して、満洲語から中国語に借用され、f → p の変化を生じたのであろう。

⑰⑱⑳　父方イトコ（父の兄弟のムスコ・ムスメ）が母方イトコ（母の兄弟のムスコ・ムスメ）から峻別されると同時に、「兄弟」「姉妹」として分類される現象は、ゴルド族の親族名称体系がある程度は類別式 classificatory の傾向を有したことを示唆する。

⑲　laha は満洲語で「挂泥草。壁泥を粘着させるために壁下地の木に捩じって括りつける草」（前掲河内良弘『改訂増補版 満洲語辞典』p.771）を意味する。

㉑　『吉林外記』巻七・物産の烏拉草条に「凡そ烏拉を穿（は）き、或は塔塔馬 ta-ta-ma を穿く者は、必ず烏拉草を将て錘熟（よくたいて）して其の内に墊（し）く」とあり、満洲語も同形であったことが分かる。

㉒　文語満洲語で 5 を sunja、50 を susai と表記するので、gusai は susai の誤記ないし誤植であろう。

㉓　文語満洲語形は tofohon である。四夷館本（または乙種本）『女真訳語』（ここでは Gisaburo N. Kiyose, *A Study of the Jurchen Language and Script*, Kyoto,1977 に依拠）によると、明初の女真語では 15 を tobohon といい、11 から 19 まで独特の数詞が存在した。このうち 11「安朔」amšo と 12「只児歓」jirhon は、満洲語に「十一月」omšon biya と「十二月」jorgon biya として名残をとどめている。

［補注］『東華続録』は王先謙が蔣良麒の『東華録』を承けて、乾隆朝から道光朝

までを増補編纂した著作である。その後、王先謙は『東華録』が簡略過ぎるため、改めて天命朝から雍正朝までを編纂し直して、これを『東華続録』と合編した。これが『九朝東華録』である。従って、ラティモアが清太祖ヌルハチの事蹟に関連して、二度にわたって言及する『東華続録』（もう一個所の言及は本訳稿 p.46 に見える）とは、恐らく王先謙『九朝東華録』の天命朝部分を指すのであろう。

（本学非常勤講師）

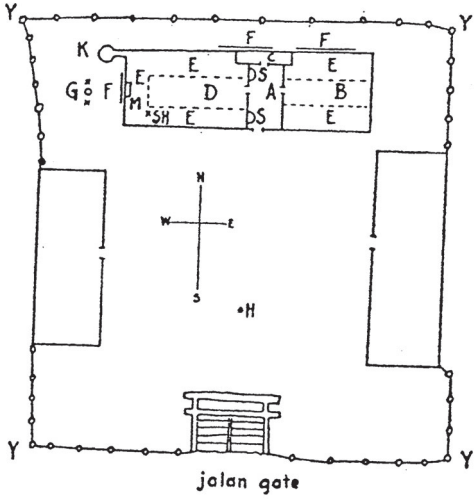
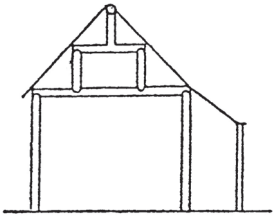
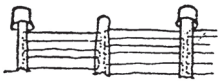


図 1：家屋と中庭の平面図

A	通路
B	点線で示された炕が北と南にある東側の部屋
C	背後内側の部屋
D	点線で示された三つ組の炕がある西側の部屋
E E E	竈（かまど）S S からの煙道によって暖められる三つ組の炕
F F F	屋外の軒下にある棚（棚は聖なる物を支えていて、家屋西端の棚はつねに見られるわけではない）
G	トロ柱とその他の支柱
H	ある種の儀礼におけるシャマンの位置（一時的な）
M	西端の壁に接触する祭壇と祖先の位牌の場所
S S	料理用の竈（かまど）（そこから煙が煙道を走って西側の部屋の炕を暖める）
K	家から離れて立つ煙突
S H	屋内での儀礼におけるシャマンの定位置
Y Y Y Y	板塀



a



b

図２ａ：家屋末端の骨組み（重量が柱と梁によっていかにして支えられるか、またベランダを形づくるために屋根がどのように延長されるかを示す）

ｂ：板塀のスケッチ

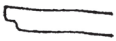


図３

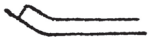


図５

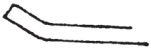


図４

図６

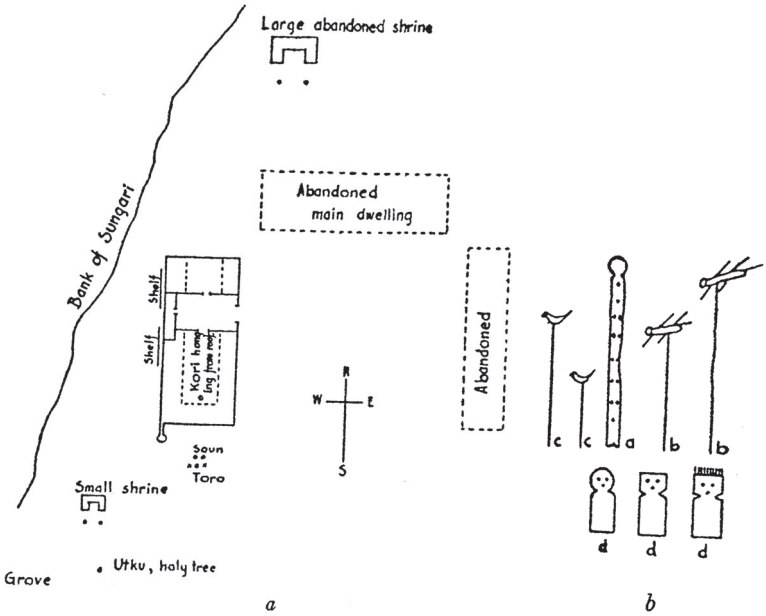


図７ａ：図斯科にあるシャマンの家の平面図

ｂ：ａ　　トロ柱本体

ｂｂ　　棒杭の上の動物像

ｃｃ　　棒杭の上の kêku

ｄｄｄ　souni

図８

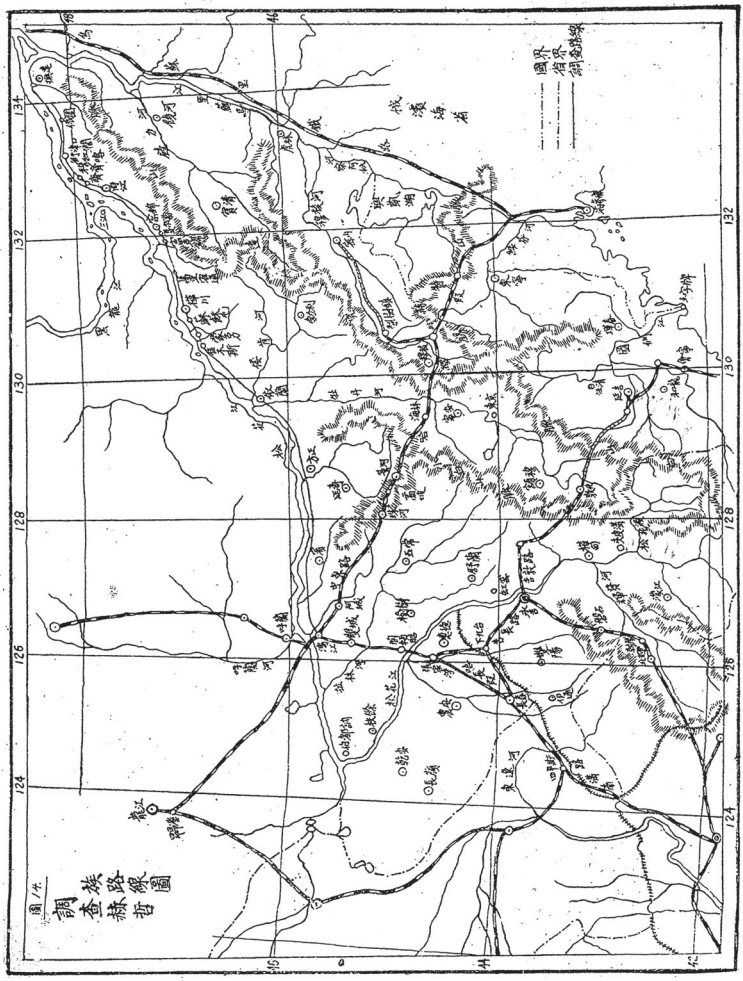
図９

図 10

図 11

図 12

図 13



凌純声『松花江下游的赫哲族』より